
俺的妄想ファンタジーに俺を送り込む話。

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺的妄想ファンタジーに俺を送り込む話。

【Nコード】

N5715E

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

俺がファンタジーの話を設定して、そこに俺を送り込む話。どうなるかは知らないよ？期待しちゃだめだよ、先期待しちゃだめ、俺だからな？つまんなかったらほっといていいよ・俺勝手に中で暴れてるからさ、好きな事するんだ。

俺的ファンタジー案を練る その1

俺の名前は宅だ。

宅っていつでもオタクじゃないよ

まーそんなことはどうでもいいんだよ。

俺はさ、ファンタジーの世界に飛び込みたいんだよ。

俺がファンタジー世界とやらに言ったら

どうなるのか知りたいのさ

何日生き残れるだろうな？

考えただけで恐ろしい。

よし、ファンタジー世界の創造だ。

俺が入っていく世界だ。

もちろん、かつこいいのにしたいな・・

どんな世界がいいだろう？

やっぱ俺が活躍できないとな・

天空の城なんてどうだ？

かつこいいじゃん

夢ありそうだ

いやいや、そんなのもう何個も小説のネタにされてて

ダメだろう？パクリって言われるに違いない。

でもさ、とりあえず俺が入る世界用意しないと

この物語ははじまらないぜ？

よし！剣と魔法の世界だ！

定番だよ！ 定番！

魔法使いまくりだよ俺。

魔物とか、建物破壊しまくってやるぜ。

設定はどうしよう？

やっぱ俺はかつこよくないとな？

世界はそうさな・・・中世のイタリアの建物とか欧州系統の建物みたいなのが

一杯建つてて、取り合えず、俺がその世界で暴れるのが良いな

とにかく俺全知全能！　どんな奴にも負けないはずだ。

後・・・女欲しいな！もちろん俺に尽くすタイプの女だ！

しかも美人で、かわいい女。

俺につっかかってくるタイプどうだろ？

俺は口汚い女とか強気な女苦手なんだよな・・・

でもさ、スレてて、一見きついんだけど、女らしさのある女

どういえば良いのかな・・・昔のヤンキータイプのねーちゃん？

すれてる女。

世間なんか・・・先生なんか・・・勉強なんか・・・

とかいいながら、案外優しいところがあるタイプ？

近付き難いんだけど、無口な男子に優しい言葉たまにかけたりする女

毎日弁当とか自分で作ってくる女。両親がややこしい家庭の女。

あ、それ、俺の中学校時代の横にいた女のことな。

そういうタイプの女もいいな

とにかく、女はいれるぞ！

よし女入ります。

で、世界は欧州の風景な。

魔法と剣がある世界だ。

まだ足りないな？

まあ、物語中に追加していこう

だって俺神だもん。

なんでも追加できるさ。

よし2章からそういう世界はじまるよ。

俺はわくわくさ

でも、もしこれ見る奴は期待するなよ？

俺ファンタジー世界に入る その1

さあ俺、いくよ

ファンタジーの入口は俺の今座っている椅子の下だよ。

ここに穴開きます

うわ〜・・・

死んじゃうって・・・

普通しぬって・・・

取り合えず落ちたときクッション頼む！

助かった・・・

俺生きてるよ・・・さてここはどこだ？

異世界ですな・

取り合えず、地図も無いし、なんだか岩ばっかりの場所だよ。

どうしよう・・・

「大丈夫ですか？」

なんかかわいい女の子出てきたぞ。

「は・・・はい・・・」

初対面で相手女の子・

恥ずかしいよ、だって俺童貞だよ？

どもっちゃったよ。

「あの、あなたどこから来たんですか？」

どこからって・・・そりゃ・・・俺は・・・

なんて説明しよう・・・困ったな・・・家の椅子の下に穴が開いて

ここに着たって説明すればいいのだろうか・・・

とりあえず、どこかの村の名前だそう。

アッチ村だ。そうだアッチ村から俺きたんだよ。そういつことにしよう。

「アッチ村から着ました」

なんかこの女、知らないそぶり見せてるぞ・・・

まあそんなことはいいよな？

よし話しかけてみよう。

「あ、あのー、どうか休める村が都市みたいなの近くにありますか？」

「ありますよ、ここから3kmほど南に行くと、コッチ村があります。」

おお、あるってよ・・・じゃあ・・・どうしよう・・・

このまま、はいさよならで去ってしまったら

もうこの女とはお別れだよ、それちよっともったいなくね？

そ・そうだ・・・案内頼んでみよっか・・・

「あの、俺、ここ来たの初めてでして・・・なんていうか・・・その」

ああ、俺もっとはつきり言えよ・・・だからもてないんだよ・・・

「案内してくれませんか・・・？」

あ、言っちゃったよ・・・清水の舞台から飛び降りるつもりで言っちゃったよ・・・

「いいですよ」

おお、いいって！

俺ちよっともててる？ 俺の顔ってやっぱましな部類だもんな。

とりあえず笑って、良いですよって言ってくれたよ。

こりゃついで行くしかないよ。だって俺なんもこの世界知らないしな

よしついで行こう・それにしても綺麗なねーちゃんだ・

手とか繋ぎたいな・

俺女についていくよ！

「あの・・・その格好・・・変な格好ですね。」

ええ・・・そりゃ・・・現実世界で買った半そでと半ズボンのまま

こっち来たしな・・・

俺の格好は中世の世界観からしたら、変だろうな・・・

でも、いきなり、それつつこむの？ちよっとは遠慮してくれよ・・・

俺凹んじやうよ・・・

「そうですか？この格好アツチ村では流行ってるんですよ」

言ってやった・・・いくらなんでも変な格好はひどいから

つい俺も悔しくて言っっちゃったよ・・・

「そうなんですか・・・ふん・・・」

なんか疑ってるよ・・・この人・・・

かわいいのに、結構直に態度に表すね・・・

なんか既にキモがられてるよ。

絶対そうだよ、この目は・・・

俺は伊達にもてない暦〃人生じゃないぞ・・

冷たい冷ややかな女の視線は感じやすいんだよ。

絶対零度だよ、この目は・・・

なんか話づらくなったな・・・どうしよう・・

しかし、いつまで歩かせるんだ・・疲れてきたよ・・

俺体力ないのに・・もう10分近く岩場歩いてるよ・・

靴だって砂まみれだ、足だってタコできそう・・

息も苦しくなってきたるし・・

まだ・・？

「あゝ、村は後どれくらいで着きますか？」

「後5分ですね」

5分か・・俺の死力を尽くして歩くしかない・・

喉渴いたな・・

妙に暑いし、太陽の日差しもきついしさ・・

「着きましたよ!」

おお・着きましたか・

「有難うございます」

本当に有難う、あんたいなければ俺は、荒野で野垂れ死んでたよ・

「いいえ」

「じゃ私は自分の家に行きますので」

どうしょ・・こつち来たのは良いけど、俺金ねーし

知り合いもいない・

「あの・・実は・・この辺で道迷って・・お金もないし、知り合いもいないしで」

頼む・・俺のこの拙い言葉から俺の言わんとする事を汲み取ってくれ・

「お困りですか・・?えっと・・よろしければ私の家にこられますか?」

ええ・・いいの?藁にもすがる思いとはこの事だ・

「はい・よろしければ、少し休憩させてもらえますか・・?」

もうあなたしかいない・・・助けて・・・

「はい、じゃあ行きましょう」

助かった・・・取り合えず喉乾いています・・・

なんか・・・村人俺みてるぞ・・・？

珍しいんだろうな・服が・

もしくは見知らぬ奴が来て警戒してるのかな・・・？

やな雰囲気だ・・・

「着きましたよ。」

着きましたか！

「あの・狭いですが、よろしければどうぞ・・・」

はいはい、よろしくないわけではないですよ

「お水もつてきますね」

来ました、あなた気が利く！

ついてきて良かったよ！

「はい、どうぞ」

「有難うございます〜」

「ゴクゴク」

ああ・・・生き返る・・・

俺の体に生が蘇ってきてますよ！

俺復活しました、ほんとにありがとう！

しかし、あまりのしんどさに、周り見てなかったけど

変な家だな・・・？

藁か・・・木のようなもので出来た家だよ・

はじめてみる家だ・東南アジアとか、原住民の家に近いよ。

ま・・・そんなことはいいよ・

これからどうするかが問題だよ。

「あの・・・この後どうされるんですか？」

どうされるんでしょうね・・・俺

取り合えず、そんな事俺に聞いてくれるなんて

この人優しいよ。

よし！ここは少しソフトにずうずうしくなってみよう。

取り合えず搦め手パターンで行こう。

かわいそうな俺を演じるんだ。

「あの・・・俺・・・お金もないし・・・行くあてもないんです・・・」

「道迷って、ここがどこかも分からなくて・・・帰るにも帰れなくて・・・」

よしここで悲しそうに俯こう。

「そうですか・・・」

「それは・・・大変ですね・・・」

うんうん・俺物凄く大変ですよ。

「今日はもう遅いし、私の家にお泊りになれますか？」

ええ・・・いいの？

でも・・・女一人のところに俺泊めていいんですか？

「もうすぐ、夫も帰ってきますので、話してみますね」

夫もちか・・・夫怖い人だとどうしよう・・・

俺、しばかれるんじゃない・・・

だからと言って・・・俺にはあてもないしな・・・

取り合えず夫待とう、そうしよう。

アツチ村はどっちじゃ？

「夫が帰ってきました」

「おう、ただいま」

「あれ、そいつ誰？」

うわ・・・帰って来たよ・・・

しかも熊のような大男

上半身裸、胸毛ぼうぼう・・・

熊のような奴だ・・・

明らかに不振な目してる。

浮気疑ってる。俺は違うんだ。

そんな目で見ないで・・・苛めないで・・・

「あのね、なんか、道迷ったしくって・・・」

「お金もないし、帰る道も分らないんだって」

「もう、暗いし、泊まっていてもらおうかと思って」

「あなた待ってたの」

うん、その調子！

その調子で主人丸め込んでください．．

今放り出されたら、俺、野犬にでも食べられてしまいます．．

神様．．

あ．．俯いて．．ごっつい悩んでるよ．．だ．だめか．．？

「そうか．．それは仕方ないな．．」

「お客入、狭いが泊まっていきなさい」

あんた．．怖い顔してるけど、良い人だ．

人を見かけで判断したらいけないな

反省しよう．．

「ぐーがーぐーぐーがー」

泊めてもらったはいいけど、寝れないよ。

鼾うるさいけど、それ以上にこの状態では眠りに入れない。

だって夫婦の足が俺の頭上にあるんだよ。

狭すぎるよここ．．

だけど、贅沢は言えないよな．．

野宿するよりましだよ．．うん

うゝん．．あれ俺いつの間に寝てたんだ．．

！

二人いない．．

どこ行つたんだ？

外出てみよう。

うわ．．俺が出てとたん、村の衆が俺を一斉に見るよ．．

ん．．？あのおじいさん、俺に手招きしてる．

言ってみるか．．．

「よお・旅の人．．ギッサムから話は聞いたよ」

ギッサム．．？

ああ．．あの夫か．．

「道に困つて帰れないそうじゃな」

「そうなんです・・・」

「大変ですな」

大変なんです・・・

「朝食は済んだかな？」

「いえ、まだなんにも食べてないんです・・・」

「じゃわしの家こんかい？」

「おにぎり作ってあげるよ」

親切なじいさんだ・・・

ありがたい・・・

俺は決めたよ！

お年よりはこれから大事にするよ

現実の世界に帰ったら、寝たふりせず、電車で席を譲るよ！

「さあ、入って入って！」

「お邪魔します・・・」

「ちょっと待ってな」

待ってますよゝ

おお、握ってる握ってる・・

おにぎり握るのもコツがあるんだよねゝ

俺のおにぎりは自慢じゃないが、いつも不細工なんだよ

ある意味尊敬しちゃうよ

「ほら・・たべなさい」

「有難うございます・・」

おいしい・・

おにぎりがこんなに美味しいなんて・・

たかが、おにぎり、されど、おにぎり・・

ありがたやゝ・・

はー食った食った・・

お茶がほしいな・・

そんなものは、ここには無いかな・・

「これ飲んでください」

ん・・・土製の古びた茶碗に、何か液体が入ってるな

とりあえず・・・飲んでみよう・・・

おお・・・これは・・・

サクランボのような酸っぱい匂いがするけど・・・

おいしいな・・・

「あのー、この飲み物はなんですか・・・？」

「ああ、それは、イルボの実をお湯につけて作った飲み物ですじゃ」

イルボの実？初めて聞くな・・・

とりあえずおいしいから、何でもいいよー

「それより客人、この後どうするつもりじゃ・・・？」

「ええつと・・・」

そうだ、俺どうするつもりじゃ・・・？

そうだ、アッチ村の場所聞いてみよう、あるかもしれない。

「アッチ村を探してるんですが、心当たりないですか？」

「アツチ村ね、ちよつと地図だしてみるよ」

頼む！

「どこじゃったかのぉ・・・」

「あつたあつた・・・」

「どれ・・・アツチ村・・・アツチ村・・・」

お願い見つけて

「あつたよ！、ここから北に5km川沿いにあるよ」

5km・・・？

まあ・・・歩けない距離じゃないけど・・・

おじーさん、あんた最高だよ

「地図見せていただけますか？」

「ほれ・・・ここじゃ」

ふむふむ・・・

ここから川沿いに確かにアツチ村であるな・・・

よし言ってみるか

「俺行ってみます・・・」

「そうか・気をつけてな・・・」

じくさん、ありがとうあんたの事は一生忘れないよ・・・

「ああ・・・ちよつと待ちや・・・」

「これ持っていきなされ・・・」

おお、地図と水と藁に包まれたおにぎり3つ・・・

俺こんなに親切にしてもらったのいつ以来だろ・・・

泣けてきた・・・

「頑張つてな・・・」

「ありがとう・・・」

声が震えてしまう・・・

涙で前が見えないよ・・・

ここが村の出口か・・・

俺は新たな旅路・・・

いくぜ・・・

もう後ろは振り返らない・

ところで・・・

アッチ村行って、俺はなにすんの・・・

決めて無かった・

次の章で設定しよう。

設定完了、再び妄想世界へ

今、現実の世界に帰ってきて、俺はこの文を書いてるわけだが・

めんどくさいよな・・

なんか良い方法はないものか・・

ずっとあっちにいる方法・

そうだ・・よい事思いついたよ。

あっちの世界にいながらにして設定可能な方法

そうだ・・妄想世界にいながら設定可能な携帯を持たせよう。

携帯に設定を文字で打つと

打った事がすべて現実になるんだ

いいよなこれ・・

なんかこういう設定昔あった気するけど

パクリとか言わないで・・

携帯にしたから、あれとは違う！

あれは教えません。

後、そうそう、いずれ、ちょっとした効果や、物事を説明する人が必要だ。

たまに、神の声として、ナレーション入ります。

何起きてるか、説明してくれる時があります。

オンオフ可

説明臭くなったら切ります。

さあ、またファンタジーのさっきの世界に戻らないといけないな。

あ、そうそう・

今行ってるファンタジー世界がだるくなってきたら

一旦こっちに帰って違う世界設定します。

このときだけ俺はこっちに戻れます。

よし、プログラミングしました。

あ、そそ、これ見てる人！

俺、頭おかしくないからね。

勘違いしないで・・・

よし、取り合えず、さっきのファンタジーの世界に帰ろう。

携帯持ったな。

よし行きます。

再び穴モ〜ン！

ストーン

堕ちて行きます、堕ちて行きます

はい、帰って来ました。

今、さっきの門にいます。

さあ、次の章から俺の旅再開です。

携帯さっそく使いましたよ

はい、俺、さっきまで寝ていましたよ。

やっぱり俺は一応人間なんで眠くなるんですよ。

早速携帯使いました。

俺の家と打ちました。

俺の家、川沿いの道端にぽつんとありますよ。

夜は物騒かもしれないんで

鍵かけましたよ。

でもそれだけじゃ不安だったんで

バリア張つとききました。

原住民が珍しがって、ドアこじ開けてきて

入ってこられたら

困りますからね。

夜盗とかだったりしたら

泥棒されたりして

拳句の果てに殺されたりしたら

ジ・エンドですからね

困りますからね

取り合えず、そんなことはいいんです。

さあ、俺は目を覚ましました。

この世界で俺は生きて生きます。

取り合えずこの家は捨てておきましょう。

だって俺は携帯握った時から、もう神なんです。

いくらでも、どこでも俺は建てれますから

ああ・・・でも・・・俺の世界がつまらなくなると困るから

俺はこの世界を堪能したいので

あんまり無茶なことはしませんよ。

地味に携帯使用します。

いきなり、超人な俺とか携帯には打ちません。

だってそんなことしたら、旅がつまらなくなってしまうからね。

ただ、来た時より心の余裕ができましたよ。

意欲が溢れています。

あ、そうそう・・・

取り合えず、こちらで設定しないと・・・

そう、俺は昨日、この世界に入る前に

中世の世界観、女、剣と魔法の世界って

設定したんだけど

それだけじゃ物語がつまらない事に気づきました。

だって、目的がないんですよ。

このままじゃ村を渡り歩く流浪人生活してしまいますよ。

それじゃつまらない。

なんかピリッと塩味が欲しいところ・

そうだな・・・

やっぱり、剣と魔法って行ったら、魔王いるかな・・・

魔王は書いてる分にはいいけど、俺小心者だから

あんまりグロイ奴だと、見ただけで心臓麻痺起こしちゃう。

目に優しい魔王でも作りますか

人間の格好した魔王にしましょう。

携帯使います。

はい・・・人間の格好した魔王つと。

あ、ちよつとどんな奴か書いてないな・・・

どんな奴にしよう。

あんまり凶暴だと、俺、怯えちゃうから

優しい魔王。

うーん、どうなるか分からないけど

これでいいか・・・

優しい人間の格好をした魔王入りました

後、俺寂しがりやなんだよな・・・

家族がほしいな

現実の俺の家族がアツチ村に住んでいることにしよう。

アツチ村に俺の家族が住んでいると。

アツチ村に俺の家族入りました。

よし、取り合えずこれで行ってみよう！

さあ、アツチ村いくぞ。

5 km だったな・

まあいいよ。

最近運動不足だから・

俺鍛えられるよ。

アッチ村着いたよ！

川沿いなんて歩くの久しぶりだな・

あれ・なんか前の方に人いるぞ・

子供だ・

何してるんだろ・

上半身裸・で釣りしてるな・

何が釣れるんだろう・

ちょっと気になる。

お・バケツがある。

近付いて、中覗いてみよう。

岩魚？

岩魚ってここにもいるのか・

少年、不審そうに俺見てるな・

取り合えず、愛想良く話しかけないと

気持ち悪がられてしまう。

「釣れてますか・・・？」

あ、バカな質問してしまった。

釣れてるから、バケツ魚いるんだろ・？

相変わらずコミュニケーション下手だよな・

「はい・・・ぼちぼち・・・」

なんか、うつとうしそうだな・・

変な奴きて、明らかに面倒くさそうな顔してるよ・

でも、俺は大人だ。

俺は小心者だけど、子供には強いんだ。

恥ずかしいけど、俺弱い奴には強いよ。

だから、ちょっと上から目線でなんか言ってみよう。

「じゃ、頑張つてな・・・」

「はい」

上から目線で言ってみただけ

やっぱり俺ジェントルマン！

酷いことは言えない。

無難に去るよ。

俺はそういう性格じゃないんだ・

地味な奴だから・

5 k m っ て結構歩くな・・

俺足がもう筋肉痛になってきたよ。

ハアハア・・

なんか息きれています。

喉もまた渴いてきた。

アツチ村まだですか・・？

暑いよ・・・

どうやら・・現実の世界が夏だったもんで

俺の妄想世界も夏が反映されてるようだ・

暑すぎる・・

帽子持っていないよ俺・・

川沿いの道の左側は、木がずっと続いてるから

木の陰に沿って歩こう。

あちゝ・・

アツチ村まだかゝ・・

え・・・・・なんだ道分かれてるぞ・・

そんなバカな・・

どうしよ・・

俺もう疲れてるって・・

すんなり村に着かないと

俺また家建てるしかないよ・・

取り合えず、さっきの地図見てみよう。

左か・・

よし行ってみよう。

お・・看板・・

アツチ村

やった・・

もう近いぞ・・・

門だ・・閉ざされてるよ・・

村の門閉ざされてる。

どうしよう・・

鉄の門だよ・・

なんだよ・ここ・

入れてくれって・・

俺の家族がいるはずだよ・・

コラ、開ける・・

ガンガン！

びくともしない・・・

蹴りいれてみよう。

オラ！

入れる！

暑いから俺気が立ってるんだよ・・

早く開けてくれ・・

あ・・なんか人来たよ・

槍持った人が・・

怒られるかな・・・

でも俺ここの住人なはずだよ。

知り合いのはず。

大目にみてくれるよ、きつと。

「こら、門蹴るんじゃないよ、拓」

「今開けるから」

おっちゃん、早く開けて・・

カチャン！

「ほら、開けたよ」

「どこ行ってたんだ？」

「この物騒な時に・・・」

ええ・・・物騒ってなんかあったの・・・？

気になるな・・・

聞いてみよう。

「何かあつたんですか・・・？」

「ああ・・・最近この辺り、魔物がいてさ」

「人間をさらっていくらしいよ」

「だから、長老が、今、村の門閉めさせてるんだよ」

ふむ・・・

魔物って・・・どんな奴だろ・・・

怖い・・・

そんな事とは露しらず、さっきまで余裕こいて歩いてたよ・・・

取り合えず、俺んち行こう。

どこだ・・・

そつえば、さっきの村と違って

ここは木の家が多いな・・

アメリカの西部劇に出てくるような家が多い。

家というより、小屋か・・・

俺の家知らないんだよ・・

俺の村だって言うのに・・

どうでしょう・・

路頭に迷ってます。

我が家に着いたよ！

狭い村だ・・

どこかに俺の家族はいるはず

あちこち探してみよう。

ちよつと・・いない・・

「こんにちわゝ拓」

ん・・？誰よ・

誰か分からないけど

挨拶しとくか

「こんにちわ・・」

ぼそつと挨拶。

それより家族だ

俺の家族どこどこ

あ！！！

妹いやがった！

あいつに話しかければ分かるはずだ

「おい、智子」

「ん？お兄ちゃん」

「どこ行つてたの？」

どこつて・・・なんて言おう・・・

う～～～ん

悩む・・・俺は言い訳がしにくい奴なんだ。

友達いないんだよ！

友達の家行つてた　却下

この言い訳がダメならなんて言おう・・・

「ちよつと一人旅してたんだよ」

苦しい理由だが、これしか選択肢はない。

「ええ・・・お兄ちゃんが・・・？」

「へっ・・・そんな事できるんだ・・・」

俺だって、できるよ・・・たぶん・

「どこに泊まってたの？」

「コッチ村ってとこだよ」

「コッチ村か・・・」

「知らないわ」

そんなことはどうでもいいんだよ

家を見つけないと。

「おい、智子、一緒に家に帰ろう」

「いいけど・・・」

良いけど、なんなんだよ？

智子についていこう。

しかし、智子、なにその格好は・・・

インディアンみたいな格好してやがる。

智子が小屋に入っていく・

ここか！俺の家！

そうと分かれれば、話は簡単。

踏み込むまでよ。

ガターン

「ただいま」

誰かやってくる。

母ちゃんだ。

智子は奥のほうにいるな。

「拓！どこほつつき歩いてたの？」

「心配したでしょ」

「魔物がうろつろしてるっていつのに」

「あんたって子は」

母ちゃん・・・俺もう歩きっぱなしで疲れてるんだから

説教勘弁して・・・

取り合えず、なんか言わないと治まらないぞ・・・

「一人旅してたんだよ・・・ごめんよ」

「一人旅？あんたが？」

「そうだよ」

「へへ珍しい」

「あんた、そんなことできるんだ」

ちっ、親子そろって同じような事言いやがって

俺、何にも出来ない奴って

判押されてるからな・・

この反応には驚かないけどな。

逆に言えば、俺は一人旅したという勲章を

今日得たわけよ。

ちよつとは家族の目が変わるかも？

まあそんなことはいいんだ。

飲み物ほしい。

「母ちゃん、なんか飲み物くれ、冷たい奴」

「奥に水瓶があるから勝手に飲みなさい」

ええ・・・水瓶つてなんだよ・・・

そっか中世だもんな、冷蔵庫なんてないのか

ジュース飲みたいけど、水で我慢するか・・・

我慢なんねえ・・・

取り合えず、俺の部屋に行くぞ・・・

んっ・・・どの部屋だ・・・

ここは・・・女もんの下着とか吊ってるし

おかんか妹の部屋だな・・・

ここはどうだ・・・

ここ・・・男くさい・・・

鉄砲が壁にかけられてる。

もしかして、おとんの部屋・・・？

ん、壁になんか張り紙書かれている。

週2回掃除しなさい、母より

これ絶対俺の部屋だ！

よし、ドア閉めて・・

鍵かけてつと・・

携帯使うぞ・・

もう喉渴いてんだよ。

カラカラ・

俺の部屋に自動的に永久補給する自動販売機設置しよう。

自分の部屋の片隅に全て無料の全自動永久補給自動販売機を設置。

なんか文字長いけど、いいか。

よし、書いたぞ。

自動販売機出てきた〜！

さあ何飲もうかな・・

無料だから、金入れる必要が無い。

便利だよ。

一生これ担いできれば、飲み物には困らない。

まあそんな事は良いんだ。

カルピスソーダが欲しい

あるある。

ボタン押してつと・・

ガラーコンコン

出て来た、出て来た！

プシュ！ゴクゴク・・

うめ~~~~！

最高！水とかありえないよ！

ははは、俺はこの世界で一番良いもの飲んでるんだよ

たぶん、そうだよ！

俺の家族は水だつてよ。

へへへ・・・かわいそうにな・・・

取り合えず、飲んだし

俺、眠くなってきたよ

ハンモックがあるな・・

柱と柱で繋がれている。

なんか気持ち良さそうだ。

気持ちいいのかな？

取り合えず寝転んでみよう・・

おお・・柔らかい・・体が沈み込んでいく。

ゆらゆら揺れてるよ。

この揺れが、また気持ちいいな・・

なんだか、眠くなってきたよ。

昼寝してしまおう。

鍵OK！

じゃあ寝ますか・・

おやすみ・・

取り合えず俺ここの村に慣れるよ？

ああ、良く寝た・・・

ここは・・・

俺の部屋だったな

ふあ~~~~

眠い・

取り合えず、この家に慣れないとな

家族は同じ顔しているけど

習慣や生活が全く分からないし・

しばらくここに留まって、ここの生活を知ろう。

当分の俺の拠点だ。

外は人攫いの魔物がいるらしいし

臆病な俺が外へ出る道理はない。

この村の生活に慣れるぞ。

今何時だ・・・？

時計あんのかな・

らしきものは、この部屋に無いな・

丸太を組んだログハウスのようなこの家

木の香りすごいよ

わけの分らない、装飾品あるし

何で鉄砲置いてるんだろ

やっぱ泥棒とか、盗賊除けか？

剣と魔法の世界の癖に鉄砲あるんだな

まあ・その辺は俺の創造した世界・

穴だらけなのは分かっていたさ

さて、どうすっかな・

なんか薄暗いけど、夜みたいだな

そろそろご飯かな

一階降りてみよう。

ん・・？

この壁に掛けてある、カウボーイハット見たいな帽子

カウボーイが着そうな服とズボン・

俺の私服・・・？

これ着ろってか？

この暑いのに・・・

そういや、智子の奴、インディアンの女みたいな格好してたな

良く分からん世界だ・・・

ただ、郷に入れば郷に従えって諺あるしな？

よし、着てみるか

ああ・やっぱり気色悪い着心地

ズボンが蒸れる・・・

仕方ない、我慢してやるよ・

でっかい長靴あるな

これは勘弁してもらおう

サンダルのままでもいいだろう。

しかしカウボーイにサンダル

すごい変だよな

さて、全部着たし

一階行ってみるか

重い扉だな・・

ふー開閉が大変だよこれ

取り合えず、階段降りるか

ん？

智子なにしてるんだ？

鉢みたいなんで、なんか摺ってるよ

「智子、なにしてる？」

「ああ、お兄ちゃん今頃起きてきた」

悪かったな・

「パウパウの実、摺ってるんだよ」

「いつものパウパウのゴマ煮だよ」

ほー

また良く分からない実が出てきたな

うまいのかな？

まあいいや、食べば分かる。

「お兄ちゃん、お父さん呼んでたよ」

「なんか用かな」

「たぶん、魔物が良く現れるから」

「剣術の稽古でもさせるんじゃないの？」

「今みんな村の人たちは訓練してるからね」

「なんで剣だよ？鉄砲あるじゃん」

「撃ち殺しちまえよ？」

「なに言ってるの？この間出た魔物」

「全然、銃効かなかったじゃない」

「だから村で、男達は剣の練習するってなったんでしょ？」

ええ・・・俺に剣もたせるの？

そんなんでできるわけないじゃん・・・

俺はいつちゃんだが、バッグ以上の重さのもの

最近持った覚えないぞ？

誰か来た、親父？

「拓！ほら、食べる前に訓練するぞ」

「表にでろ」

「ええ・・・」

「お前も一家の長男なんだから」

「女子供守れなくてはな」

俺に訓練させるの？まじで？

それにしても、親父、その格好なんだよ！

鉄の甲冑着込んでからに・

盾もってるし

うわ、その太い剣俺にもてつてか？

いや、その前にその重そうなの俺着るの？

「拓！さつさと着替えてこんか！」

「二階の部屋にあるだろ！とつとと着替えて来い！」

「痛い・」

盾で尻殴られたよ。

取り合えず二階に上がるか、逃げ、逃げ

親父、家では大人しいサラリーマンだと思ってたけど

なんですか、あの勇猛果敢な性格は・・

現実の家じゃもっと疲れた顔してる癖に

くたびれた感じで、家でゴロゴロTVみてるじゃん・

環境変われば性格も変わるってやつですか？

これ着るのか・

取り合えず全部着てみるか

どれから着よう。

まず足かな？

うんしょ、うんしょ、入った。

ふう．．

次はこの鉄の鎧．．

頭からかぶるか

髪はさまった！

ちよつと待つて．．

スポ！

入ったよなんとか．

次は頭だよな

いや、これ今着たら

たぶん、階段からこけて落ちるよ

酷い目にあうに決まっている。

脇に抱えて降りるか

盾も持っていないとな

あそそ、剣も・・

ちよつと一回じゃ運べないな・

剣と盾は後で持っていこう。

よし動くぞ！

うわ・・重いよ・・

ガチャンガチャン言ってるし

うお・・こけそう・・

うわ・うわ・・

ガシャン！

痛たたたた

尻餅打った・・

まともに歩けないよ

どうしょ・・

いや・・もう一度チャレンジだ

立つぞ・・

足に神経を集中させる・

よし・立てた。

じゃ・歩くぞ・

右・左・右・左

何とか歩けそうだ・

階段怖いな

この格好で落ちたら死ぬぜ？

・・・・・

どうしょ・・・・・

ええゝい

やけくそだ・・

やったる。

いくぞ・

手すりもって・・

慎重に・

こけないように、こけないように・

右足からだ

ミシ！

よし、なんとかいけそうだな・

ミシ！

ミシ！

その調子その調子・

ミシミシ！

ダン！

よし一階に降りたぞ

俺すごい！

快拳だよ

ハハハ

俺やればできるじゃん

でも、降りたけど

上がれねえぞこれ！

剣と盾どうしよ。

「拓用意できたか？」

「剣と盾が上にまだ・」

「親父とつてきてくれない？」

「仕方ないな・」

親父上がれないだろうな・

俺でこんな状態なんだ

あんたフル装備だぜ

無理無理・

え・

え・？

・・・なにその軽い足取り・

スタスタ上がっていきやがる。

ガシャンガシャンいわせながら。

ミシミシいってるよ

すごいよ親父

パワフル！

ちょっと見直したよ。

お、降りてきた。

「ほら」

「甲冑の腰のベルトに挿しておけ」

「重い・・・」

「なに言ってるんだ、こんなものの如き！」

「よし、外出るぞ！」

ああ、本気でやらせるのね・・・

死ななきゃいいけど・・・

へたれてきたよう！

「拓構えろ」

「何を？」

「盾と剣をだ」

「重いよ・・・」

「無理だよ、親父」

「歩くのだって、ままならないのに」

「何言ってるんだ」

「ほら、構えろ」

親父・・・無理いうな・・・

初めから無理だよ

だって、俺はもともとへたれなんだよ・・・

無茶いいすぎ・・・

ついていけねーよ・

とにかくやんねーからな

断固拒否！

「仕方ない奴だな・・・」

やつと折れたか・・・

「今日はお前晩御飯抜きだ！」

いらねーよ！

親父なんか怒りながら家入って行ったよ。

俺は勝利したぜ。

俺のヘタレを貫いた。

晩飯だと？

そんなもん携帯さえあれば・・・

取り合えず、家入ろう。

「あ、帰って来た」

「お兄ちゃん、お父さんカンカンだよ」

「あ、そう」

ほっといてくれ・・・

俺は元々へたれなのはお前も知ってるだろ？

取り合えず、この鎧脱ぎ捨ててやる。

やってられっか・

オラオラ〜

ガシャン、ガシャン、ドカ！

はーすつきりした。

「ちよっとお兄ちゃん・・・」

「これ糞重いんだよ」

「もう少し丁寧に扱いなよ」

「ほっとけ！」

うるせーな〜・

取り合えずだるいから

自室に帰るぜ。

親父の説教も聴きたくない。

さっさと入って鍵閉めよう。

ダン・・ダン・・ダン！

階段一段飛ばしで上がってやった。

キーーーーー！ボタン！

カチャカチャ！

よし、俺の身柄は安全だ。

ココは俺の聖域

誰にも邪魔はさせねえ・・

ドカ！

ギイ、ギイ！

ハンモック気持ちいい〜

この揺れ最高。

ネットサーフィンでもしたいな・・

あるわけないか・・

だんだん、この世界の不便さが

俺の身に染みてきたぜ

はっきりにってきついでよ？

このままでは、何れぶちきれて

とんでもない方向に行くだろうな。

どうすっかな？

そうだ、取り合えず、俺

前々から夢があるんだ。

空をとびたい。

漫画の主人公みたいに、スイスイ飛ぶんだよ

道具もなんもなしにな。

超能力みたいなもん？

そうだ、それしよう。

今の荒れた気分を立て直すには

それしかないよ。

携帯使うぞ。

お題は？

俺は自由に空を飛べるって

よしボタン押して発動！

これで俺はもう飛べるはずだよ。

寝たまま浮かんでみよう。

お・・・浮いてきたぞ・・・

おお・・・すげえ・・・

ふわふわ、浮いてるよ。

天井にへばりついて見よう

忍者みたい。

ちょっと部屋を一周してみよう。

ブーン！

ドカ！

照明に頭ぶつけた・・・

痛い・・・

血だよ、血！

ちょっとやばい．．

ドクドクでてるよ．．

携帯だ！

なんて書こう。

よし、なんでも治療マシン

これで良いだろう。

やばいから早く

押したぞ。

なんか天井から出てきたよ。

このエレベーターの箱みたいなのに

入ればいいのか

やべ．．そんな事語ってる余裕がないよ

血イイイイ

ウィーン、扉開いた。

入ろう。

シューー

扉閉まった。

頭上から気持ちいい空気みたいなものが

出てきたぞ

チン！

ん？なんだ、この音は．．

お．．．血止まってる．．

すごい．．．傷もねーよ。

シューー！

ドアが開いた。

ふう．．ひとまず俺の傷完治

びびらせやがって．．

それにしても、空飛べても

俺の体は脆いままなんだよ。

外でたら、俺のことだから

またドジ踏んで、木とかにぶつかって

勝手に大怪我しそうだよな。

どうするかな・・・

そうだ・・・俺の体の周りに

見えないバリア常に発動させよう。

よし決定！

携帯だ！

俺の身を守るバリア・・・

待てよ・・・これ作ったら・・・

物とか触れなくならないか・・・？

触れる前にバリアが邪魔するんだよ・

それは困るな・・・

コップだって持てない。

飲み物も触れない。

どうしよう・

簡単だ。

俺の身を守る、どんなものも通さないバリア、オンオフ自由！

これでOKだ。

ボタン押した！

よし試すぞ。

今バリア状態。

まず浮いてみよう。

そして、この状態で壁に突っ込むぞ。

少し早めに突っ込んでみよう。

ちょっと怖いけど・・

いくぞ・・・

オラ〜〜！

ドカーン！

やべえ・・・

壁貫いちゃったよ・

階段まで出てきたよ・・

木材がちらばってるよ。

家壊しちゃった。

ああ、みんなこっち見てる・・

これはまずい！

逃げるぞ・・

こうなつてはこの村出るしかない・・

さらば俺の家族・・

またいつか会おう・・

ゴォ~~~~~！

俺は今窓から飛び出て

かなり上空まで一直線で飛んできたよ。

夜の空、気持ち良いよ〜！

最高〜

さてこの後どうすっかな・・

小難しい事考えてみたよ

ふゝ・・

飛び続けています・・

さっき、不覚にも全てが面倒くさくなって

切れてしまった。

そして、携帯を乱用してしまった。

そう、俺は既にさっき二つの事柄を

現実化してしまった。

それがどういうことか・・？

もう普通の人間ではありません。

超人になってしまっています。

これは避けたかった。

しかし今更無理な事だ。

携帯には解除ボタンはない。

解除できるのは、この世界をデリートしたときのみです。

まあやっちゃったものは、しょうがない。

夜空を飛びながら、そんな事を考えていた。

ポジティブ思考でこの世界を楽しもう。

超人として、生きるしかない。

今、俺の能力は

1 . 空を飛べる 自由自在。

2 . 体に何者をも寄せ付けられないバリアを晴れる、オンオフ可

1 は大して問題ないかもしれない。

飛ばなきゃいいんだから。いざつてときだけ、飛ばせば良い

だけど、2 のことを、深く考えてみた。

2 もオンオフ可なので使用しなければ、問題ない。

ただ、使用した場合、どうなるか

要は無敵のバリアを自由自在に操れる力

そのバリアを、どんな力も貫く事はできない。

それがどういうことか？

そのバリアをはったまま、物体にあたると

どうなるのか？

例えば、バリアはったまま手で何かを殴ろうと考える。

そのバリアはどんなもので攻撃しても貫けないということは

そのバリアを張った状態で手が移動する分、物体も移動する。

それは即ち、移動が大きいほど物体へのダメージが大きいという事。

思いつきり殴れば、どんなものも破壊できてしまう。

どんな頑強のものも、思いつきり殴れば一撃で壊れるだろう。

この能力の危険さが、分かってきた。

今、バリアを張りながら、飛んでるけど

触れる物、全て壊していきます。

木にぶつかれば、木をぶちおって、進んでいきます。

相手が植物ならまだしも、これが動物だと

すごいグロイことになってしまう。

加減して叩けば、それほど効かないだろうけど

思いつきり叩けば、砕け散る事間違いないし。

そして、俺は更に気づいてしまった。

小説やアニメで人や、魔物を倒すって

簡単に書くけど、それを実際に見た場合

とんでもない精神的ダメージを受ける事を。

要は魔物を倒せば、魔物殺し

人を殺せば、人殺しなんだ。

そりゃ、魔物といえど、破壊したら

ぐちゃっとなります。血もどばどばって出るでしょう。

俺はそんなのに耐えられる自信がない。

今まで平和に生きてきたんだ。

ファンタジーの世界で活躍するとか

気軽に書いたけど、中の世界は現実であり

起こったことに対して、精神的ダメージを受けるのも

俺だ。

甘かった・・

例え、これが超人パワーなしの場合だとしても

剣が相手に当たれば頭は割れる。

その光景を考えると、恐ろしい・・

だから、俺は平和にこの世界を旅したい。

ただ、どうなるかは分からない。

旅には危険がつきもの。

ましてや、優しいとはいえ魔王がいて

魔物がいる世界です。

剣と魔法の世界なんです。

相手を破壊しなければいけない、シーンがあるかもしれない。

そうすると、それを受容するだけの精神が無いと

俺は壊れてしまう。

なんか難しい事言ってるけど、そういうことなんだ。

2の能力は慎重に使わないといけない。

ただバリアとして使うだけとか。

間違っても、バリア張ったまま、女の子殴っちゃいけない。

軽くはたいても、死ぬかもしれない。

強弱を覚えないとダメだ。

オンの時のタイミングも考えないと。

さてと、家飛び出してきた俺は

どこへ行けば。

そうだ

とりあえず、町に行きたい。

イタリアや欧州のような町だ。

綺麗な建物、レンガの家。

中世らしい建物がいい。

もう、訳分からん村はいやだ。

村が嫌！

あんな長老とか、村根性ある場所が嫌

共同体みたいな嫌なんだ。

とりあえず、一人の旅人として、街に潜入したい。

街ないかな。

街探すぞー！

従者作っちゃうよ？

俺は街を探して高速で飛び続けている。

高速で飛ぶと、顔に当たってくる風が

半端じゃないので、前が見えなくなる。

それを防ぐため、バリアを張っている。

街はないか・・・？

中世ヨーロッパの街がいいよ。

村はもういい。

どっかないかな・・・

景色が後方へすつとんでいく。

すごいスピードだ。

今眼下には山脈が見える。

山脈と山脈の間には川が流れているな。

街はどこだ〜・

ん・・・？なんだ・・・？

海・・・

海が見えてきた。

潮風の香り。

あ・・・なんかぶつかった・・・

やばい・・・やっちまったかも・・・

カモメか・・・？

いや～～

もう当たってからも進んでるから

その残骸を目にしないけど・・・

ごめんなさい、カモメさん、成仏してください。

見なければいい・・・

見なければ、なかったことに・・・

罪悪感にさいなまれない。

だんだん俺の感覚がこういうのを

繰り返して麻痺していくんだろうな・・・

ん、海を越えたぞ・・

また大陸だ。

・
・
・

平地が続いている。

ん・・・！？

あれなんだ・・？

なんか丸い円状の白いものが見える。

これは・・

都市だ・・・

しかも城下町っぽい

俺は急停止した。

上空からその街を眺めている。

真ん中にお城が建っている。

その周りには、放射状に道があり

建物がいっぱいあるよ。

木の家じゃない！

レンガや土？石？でできた家だ。

俺は中世の家は知らないから

何で出来ているかは分からないが・

これは・とうとう見つけたか・

かなり飛び続けてやっと見つけた、街。

よし、街へいくぞ。

そうそう、俺は超人ではあるが

超人である事は取り合えず隠しておきたい。

街の少し手前で降りて、歩いて入っていこう。

街の入口には兵士が立っている。

取り合えず素通り。

ドキドキ・・・

なんかこっち見えますが

呼び止められなかった。

ふゝ・・

街潜入成功。

石畳の道が続く。

両側には、石の壁の家、レンガの家、漆喰の壁の家が立ち並ぶ。

結構人いるな・？

綺麗なドレスに羽帽子みたいなものつけた女の人

鉄の帷子つけた、兵士？傭兵？

貴族風の男

布の服をきた平凡な感じの男

スカートに上はコルセットみたいなものつけた町娘

小汚い布の服をきたおっさんが地面で座っているし

やっぱり俺見られてるよ。

半そで半ズボンは珍しいみたい。

サンダルだしな。

ちよつと建物と建物の中の細い道に入ろう。

樽がある・・・

樽・

何が入ってるんだろうな。

両脇には石の壁が続く。

人はいないな・・・？

俺がなぜこの細い人気のない脇道に入ったか？

そう、俺はあるものを実現化するため

携帯を使うために入ったんだ。

俺は空を飛んでいる間、ずっと考えていた。

一人旅は心細いと・・・

俺は空を飛びながら思い出していた。

偉い人とかには、従者みたいなのが付き添ってるよなって

水戸黄門とか、助さん、角さんいるよな？

ドンキホーテですら、パンチョって従者がいたはず。

そう、俺は俺に忠実な旅のお供が欲しくなったんだ。

俺の命令に絶対服従で

俺の話相手になってくれる。

優しい性格。柔らかい口調。

話にあわせてくれる、

言う事をすべて温かく聞いてくれる。

たまには助言してくれる。

暴走をとめてくれたりする。

俺のために命を投げ出してくれる。

俺に説教臭く垂れない。

機転が利く。

そういう従者がほしい。

ある意味保護者？

そんな旅のお供が欲しくなったのさ。

携帯使うぞ

なんて書こう。

俺に全忠誠を誓う従者でしょうか？

その前にどんな奴か設定しないと。

男か？女か？

この場合は男の方がいいかな。

女だと緊張するし

男の事が良く分かる奴がいい。

顔は、どんなのにしよう

イケメン？いやダメダメ

俺がコンプレックス感じるような奴はダメ。

ブサイクにする？いやそれもまた、それでつらいものがある。

横歩きたくなくなる。

普通の顔にしよう。

あ、その前に年はどうしよう？

じーさん？若者？

うーん、中年にするか。

30後半のおっさん。

じーさんだと体力的にきつそうだし

若者だと、人と対面するとき舐められそうだし。

それ相応に押しが利く中年がいいだろ。

ヒゲはやす？

ヒゲ却下！むさ苦しい。

頭は？ハゲ？

短髪でいいな。

金髪にしよう。

目は細く優しい顔にしよう。

背の高さは、俺より少し高いくらい

ああ、ちょっと待てよ

こんなに書いたら携帯の文字がすごい長いじゃん。

まいった、少し削ろう。

俺に全忠誠を誓い、すごい従順な30後半で短髪で金髪で背は俺より少し高いくらいの、優しい目をした、優しい性格で優しい口調で喋る、機転がきく、普通の顔をした貴族風のヒゲの生えていない男性の従者。

なげえ・・・

しかし何とか打てる。画面スクロールしたけど・・・

これでボタン押すぞ・・・

さあ出て来い

我が僕よ！

従者こきつかうよ？

どんな奴ができるんだろ・・・

煙のような者が現れたかと思うと

だんだん人間の姿へ変わってくる。

こいつは・・・

ブラッドピットの出来損ない見たいな顔してるぞ・・・

確かに金髪、ひげも無い。優しげな細い目

30代後半くらい、俺より少し背が高い。

大体外見はそのまんまかな。

中身だよな？

「はじめまして、ご主人様」

「私の名前はピエール、レプリコットと申します」

「なんなりとお申し付けください。」

うんうん、いいかんじ。

「えっと・・・ピエールさん、私は拓って言います」

「拓様ですか、分かりました」

ふむ……まあまあかな

初対面の挨拶は終わったから

ジリジリ偉そうになっていくかな。

「あ、ピエールさん、ピエールって呼び捨てにしていいい？」

「どんな呼び方でも、結構でございますよ」

うんうん、忠実ですな。

「じゃ、ピエール、街の中心部にでも行こうか」

「はい、かしこまりました」

会って3分も経たないうちに言葉が、変わっていく俺。

さて、どこ行くかな。

大通りに出るか。

俺の少し後ろをピエールは歩く。

話せる距離は保っているようだ。

「ピエール、喉が渴いてきたよ。」

「どこか、酒場にでも寄りましょうか？」

「俺酒飲めないよ？」

「ジュースもありますよ」

「でも、俺金ないよ？」

「・・・・・・・・・・」

ん？ピエールどうした？

「お任せください・・」

「拓様、少しこの外灯の下で御待ちいただけますか・・？」

「いいけど」

「じゃちょっと行つてきます」

「いつてらっしゃい」

ピエールは人ごみに消えていった。

どこ行つたんだろうな・・？

ん・・？

ピエール帰つて来たよ。

「お待たせしました・・・」

「お帰り、ピエール」

「どこ行つてたんだい？」

「あ・・・それがその・・・」

「主人の質問にはきっちり答えてくれよ」

ちよつと偉そうに言つてみた。

ん・・・？

ピエールどうした？

俺に顔を近づけてきて・・・

「大変言にくいことなんですが・・・」

「よろしいでしょうか・・・？」

何で、そんなボソボソしゃべるんだよ？

「実は・・・人ごみに紛れて、ご婦人から財布をすつてきました」

え・・・・・・・・

ええええ・・・・・・・・？

「お、お前、それ犯罪じゃないのか？」

「しーーーーっ！」

「お静かに・・・」

「分かっております。」

「ですが、ご主人様がお金が無いと言われましたので」

「私もお金は持っていないので・・・」

「早急に手にいれるには、これしか方法がなかったんです。」

「おいおい・・・」

「大丈夫です、私こうみえても、手の先は器用なんです。」

「何の、感触も残さずに、すり盗りましたから」

「ご婦人は気づいてないはずですよ。」

こいつ・・・お前は・・・

アルセーヌルパンかよ・・・！！

俺の従者はいきなり、泥棒はたらきやがりました。

俺はこいつの主人だから、いきなり共犯かよ！

俺に犯罪者の汚名、いきなり着せやがって・

とんでもない奴だ・・・

まあ、でも、俺はそんな気にしないからいいよ。

ばれてないんだろ？

余裕余裕。

少し冷静に考えたら、なんかこいつ遅しく感じ始めたよ。

「じゃ、ピエール酒場へ行こうか」

「はい、参りましょう。」

「ここの酒場はいかがですか？」

「とりあえず、オレンジジュースありそう？」

「たぶん、ございます」

たぶんか・・・

まあいつか、アルコール入ってなければいいよ。

「よし、入ろう。」

「御意！」

微妙に言葉代わる奴だな・

まあいつか。

「おい、そのバーテン」

「この方に、オレンジジュース持ってくるように」

俺以外には、ふてぶてしくなれるのな・

「へいへい、オレンジジュースですね」

「ちょっと御待ちを。」

「拓様、その席が空いていますので」

「どうぞ」

お、椅子引いて、手を傾けてくれる。

良いぞ、良い感じだ。

「へい、御待ち」

「拓様、オレンジジュース来ました」

「お召し上がりください。」

「うむ」

だんだん王様気分になってきたぞ。

ゴクゴク・・・

おいしいぞよ。

「ピエールよ、この後どうする？」

「そうですね。」

「拓様、こちら、初めてですよね。」

「そうだよ。」

「実は私も初めてなんですよ。」

そりゃ、さつき出来たばかりだしな。

知ってたらすごいよ。

あ、また顔寄せてきた。

ボソボソ

「とりあえず・・・さっきのご婦人・・・」

「結構お金持ってましたので・・・」

「しばらくはお金に不自由しないかと思われます。」

「今日の宿を予約しておきたいと思います。」

「ふむふむ」

なるほど・

「この店を出ましたら、宿の手配してきますね。」

「あい、わかった。」

「じゃ、出ようか」

「イエッサー！」

言葉変わる奴だな・

服買っちゃったよ」

「宿の手配してきました」

「うむ、ありがとう」

・・喉潤ったし、この後どうすっかな・

「ピエール、俺なんか退屈だよ」

「それは困りましたね」

なんか面白いことない？」

「拓様、キャッチボールでもしますか？」

「やだよ」

「俺、前ボール取り損ねて、顔面に当ててから」

「トラウマになってんだよ」

「そんな暗い過去が・・・」

もって面白い事ない？」

「ちよっと街を歩きましょうか？」

「そうだな」

人多いなゝ・・

俺は人ごみ、あんまり好きじゃないんだけど

しかし、どいつもこいつも、ジロジロ俺見やがる・・

嫌になつてきたな・・

この格好が悪い・

「なあ、俺、この格好だと目立ちすぎるよ」

「さっきからジロジロ見られて気分悪いよ、ピエール」

なんとかして・・

「そうですか・・じゃどこかで、着るものを購入しにいきましょう」

「鎧とかカウボーイの格好は嫌だからな」

「軽い布の服がいいですか？それとも私の着ているような貴族用の服とか？」

「軽い布の服でいいよ、」

「その格好は暑苦しい」

「承知いたしました。」

もうあのガチャンガチャンは絶対嫌だ・・

熱いんだから、通気性のいい服装が良いに決まっている。

「では、ここの仕立て屋に入りましょう。」

「ok!」

カランカラン

「主人いるか？」

「はいはい、どのような服お探しですか？」

「拓様に、軽いお洒落な布の服を用意して欲しい」

ああ、この主人もジロリンコと俺を見てるよ・

珍しいんだろうな・・

「ええつと・・では・・ちょっとサイズを」

巻尺取り出して、俺のサイズ測りはじめたよ。

・・俺最近ウエストが・・・心配だな・・

太ってるかもしれない・・

「ちょっとお待ちを・・・」

「これなんか、いかがでしょうか？」

「ちょっと色暗いな・・・」

「上は明るい白がいいな。」

「ズボンも白っぽい色でいいや」

俺は服装はあまりこだわらない。

とにかく軽くて、さっぱりしたのがいい・

「これなんかいかがでしょうか？」

「お、いいなあ・・・」

「それ試着させてくれ」

「では、こちらへ・・・」

うん、中々着心地いいぞ。

風通しもいいし、肌触りもいい！

「これどうだ？ピエール」

「似合ってますよ」

そっか、白っぽい上下の布の服とズボン。

これで決まりだな・・

後サンダルどうしよつか・・

長い靴嫌だな・・

「あんまり長くない靴ある？」

「ええ・・ありますよ。」

「それ持ってきて。」

「かしこまりました。」

「どうぞ」

お、良い靴あるじゃん。

短めの皮靴

履いてみるか

うん、いいかんじ

サイズはあつてるかな？

「サイズもぴったりのようですね」

店主が俺のつま先を押す。

歩いてみるか。

カツ、カツ、カツ

いいね〜

「気に入ったから、これ全部もらつよ」

「有難うございます、では会計致します。」

「ピエール、俺外出てるから、会計頼むよ」

「仰せのままに」

いいねーいいねー！

新しい服は

こっちきてから、汗だくのまま

ずっと同じ服着てたんだから。

気持ちいいよ〜。

ほらほら、みんな全然みないよ。

溶け込んでるよ。

ピエールいよいよ？

お、ピエール出てきた。

「拓様、かつこいいですよ、その格好」

「決まってますよ」

「だろ、だろ！」

ピエールお世辞うまいな。

世渡りうまそうな奴だよな。お前。

まあ、俺も決まってるとは思ってたんだ。

格好いいかは知らないが、さっぱりしてるよ。

南から吹き込む風が俺に清涼感を与える。

服装が新しくなると、風の心地よさを感じる余裕が出てくる。

取り合えず散歩したくなってきたよ。

気分最高潮、夕方の散歩と行こうじゃないか。

「ピエール、あそこの高台へ通じる路地を歩いて行こう。」

「かしこまりました。」

少し坂道を歩いて上がっていく。

気持ちいいな

そんな俺の静かな気分をぶち壊すような

けたたましい声が聞こえてくる。

なんだなんだ・・・

俺が夕方の散歩を穏やかな気持ちで、満喫している時に・・・

「あんだー！ー！」

「あの女と浮気してるでしょー！」

「だから、それ勘違いだつて！」

「嘘おっしゃい！」

「私みたのよー！」

「あんたが楽しそうに喫茶店で、あの女と話してることを」

「それは仕事としての付き合いだよ」

「うわっわ・・・これは・・・」

男にとっては修羅場ですな。

浮気の現場発覚して、嫁さんが発狂してますよ。

ああ、引き返したい。

「ピエール、なんかうるさいから」

「さっさと通り抜けよう。」

「そうですね。」

よし、ささっと通り抜けるぞ

巻き込まれないように・・

「あんななんか、死んじゃえ！」

「こらこら、物なげるな！」

「人が通ってるだろ」

「やめろって」

ガーン！！

グアア・・

痛い~~~~！

フライパンが足に当たった~~~~！

コルア~~~~！

「いたたたたた」

「拓様大丈夫ですか！」

痛いよ~~~~！

赤くなってるよ・・

「ほら、当たっただろ・・」

「どうするんだ・・」

「あんたが悪いのよ」

なんだところらー

お前の責任だろうが！！

「拓様・・ちょっと御待ちください・・」

ピエールは二人に駆け寄っていく。

ピエール、お前どうするつもりだ・・？

犯罪だけは辞めてよ・・

「申し訳ないが、今、あなたの投げたフライパンが」

「私の主人である拓様に当たりました。」

「どう、責任とるおつもりですか・？」

「ごめんなさいよ、うちの家内が・。」

「あなたが浮気なんかしなければ、こんなことに・。」

こいつ、自分のしたこと謝らないつもりか？

とんでもない女だ・。

こつちや、怪我してるんだぞ。

「はつきり言いますが、あなたの投げたフライパンが」

「我が主人に当たったんです。あなたのご主人は関係ない。」

「責任とってもらいましょうか？もちろんあなたに・」

「ええ・・・・す・すみません・」

おお、さすがピエール、押しが聞くじゃないか。

まあ当然っちゃ当然。謝るのはあの女だよ。

「拓様はこの街を治める市長の甥に当たるお方」

俺ってそうだったんか・ほんと・？

「謝つてすむ事じゃありません。」

「兵隊を連れてきて牢獄にいれましょうか？」

おいおい、そこまで言わなくても・・

「従者殿、それだけは勘弁してください。」

「家内に悪気はないんです。」

「私が浮気したのが、悪かったんです。」

「あんた・・」

「そんな事は知った事じゃないですよ」

「あ・・賠償金払います。」

「ここに50万ポルンあります」

「怪我の治療にお使ください」

お金・・

「仕方ないな・・今回はそれで勘弁してあげましょう」

「次は気をつけてくださいね」

「はい、すみません!!」

土下座させてるな・・

ピエールの奴、うんうんって頷いてるし。

あ、ピエールこっちきた。

「拓様、さあ病院へ参りましょう。」

「きつちり治療代はもらってきましたよ」

って、50万ポルンっていくらなの？

もらいすぎなんじゃ・・？

でも中世の病院ってなんか怖いな・・

医療技術いまいちだろ？

「え・・病院・・？中世の・・？」

「なんか怖いよ」

「ほらみてみて！歩けるよ」

「足見せてください。」

「ほれ・・」

「アザだけですが、骨にヒビがあるかもしれないですよ」

「そうなの？」

ああ、でもいや、絶対嫌。

病院は拒否。

「いいって！」

「お前は俺の言う事聞けば良いの！」

「は・はい、宅様がそういうのでしたら・」

後で携帯で治療マシンだして治しとこう・・

まあ、こいつの押しの強さと俺への忠誠心は

本物のようだ。

これから頑張ってくれよ、ピエール！

犯罪者まっしぐらだよ？

「拓様、そろそろ宿屋に参りましょう。」

「はいよ」

なんかこいつといると、楽なんだけど
行動が縛られるんだよな。

「部屋はこちらになります。」

「夕食は7時に召使がお持ちいたしますので」

「ごゆっくりしてってくださいな」

はいよ、宿屋のおっちゃん。
疲れた足取りで階段を登る俺

「ピエール、背中押せ」

「はい」

俺はピエールに、もたれかかる様にして
部屋まで歩いていく。

「その突き当たりの部屋ですね」

「開ける」

「はい」

キィ〜キィ

ああ、もうクタクタ・・

気持ち良さそうな、ふかふかベッドだ。

俺は沈み込むようにして、ベッドに寝っころがった。

俺は、ずっと考えていた。

従者を作ったものの

色々やってくれるけど、過保護すぎるって・・

俺はこんな体たらくな、生活送るために

この世界きたんじゃないよ。

「ピエール」

「はい」

「なんかこう、もっと刺激的なことがしたい」

「刺激的ですか・・」

「俺はさ、平穏な奴だけど、スリリングに満ちた生活を」

「送りたいって願望もあるのさ。」

「なるほど・・」

「じゃ、船でもものつとつて、海にでもいきますか？」

「はえ・・・」

お前突拍子も無いこと言う奴だよな。

お前の発想の転換が結構好きだぜ。

しかし泳げない俺に海は酷だ。

「それは辞めところ、他にいいのない？」

そうだ、女が足りねえ

旅だというのに、野郎二人なんて嫌だ。

「なあ・・・俺は女と旅がしたいぞ」

「ご婦人とですか」

「そうだ」

女だ

女を持ってまいれ。

「分りました・・・」

「でも、取り合えず今日は寝ましょう。」

「そうだな・・・」

ピエールはランプの光を消すと横になった。

・・・・チュンチュン

「うゝん・・・朝か・・・」

ねむいなあ・・・

でも暑いから、もう寝てられないよ
あれピエールいないぞ。

「拓様ゝゝゝ！」

なんじゃらほい？

「外に馬車を用意しました。」

「街を出ましょう。」

「なんだよ急に・・・」

「朝飯もまだじゃないか・・・？」

「急ぎです。朝食は外でパンを買ってきました。」

ほお〜でもなんで、そんな急いでるの？

「もう、チェックアウト済ませていますので・・・」

「行きましょう！」

わかったよ・・・

俺達は宿をでると、馬車の前までやって来た。

「拓様、私が馬を走らせますので」

「その隣にお座りください。」

ええ・・・なんで中にゆっくり座らせてくれないの？

ん・・・？

え・・・

俺は馬車の中をみた。

後ろ手を縛られて、口にナフキン噛まされた女の子が乗っている。
なんか、うーうー言っています・・・

「おい・・・この後ろの席の女の子はどなた・・・？」

「・・・・・・・・」

「とある、家の町娘をさらって来ました。」

「ですので、足がつくとまずいので」

「馬車で早めに、この街から出て行きましょう。」

「おい・・・これって・・・誘拐って言うんじゃない？」

「話しは後です！」

「ハイヤ〜パシーンパシーン！」

馬車は猛スピードで走っていく。

俺・・・どうなっちゃうんだろ・・・

殺されちゃうよ・・・

俺達は街から随分離れた森までやってきた。

「ピエール！このへんならいいだろ」

「そろそろ止めてくれよ」

「酔っちゃうよ」

ゲロゲロ、ピエール爆走しすぎだ・・・女の子も心配だし

止まってくれ、そろそろ・・・

「分かりました、ここは人気のない森」

「ここなら・・・泣こうが叫ぼうが助けはきませんね。」

ピエール・・・さりと怖いこという奴だ・・・

「ドウドウー！」

馬車は停止した。

「ピエール女の子可哀相だから」

「解いてやって」

「はい、拓様」

「すまないね、痛かったでしょ、今解くから」

ピエール、誘拐してきたわりに、何その優しい態度。

まあ・・・やっぱり俺の作った従者。

ジェントルマンなどは持ち合わせているようだ。

「プハ」

「ゲホゲホ」

ちょっと女の子咽てるな。可愛いそうに・・・

「ゲホ・・・」

「ふー」

女の子美人だなあ・・・はっきりにって可愛い。

俺の好み、色白だし、ぽっちゃり体系デブじゃないし、目はパツチリしてて

栗色の髪にポニーテールつというのかな、後ろで束ねているだけか

胸も程よく大きいよなあ・・・あ・・・俺、無意識に審査してるよ

そんなところじゃないよ。今から怒涛の言い訳しないとな・・・

「あのくすみませんね。うちの従者が・・・とんでもない事を」

「ん？この人攫い、あなたの従者？」

「ええ・・・」

うわ・・・誘拐されてきた割に、怯えるどころか

そんな強気な態度で・・・結構きつい子だったりして。

「あんたが命令したのね！」

「いえ・・・滅相ありません・・・」

「問答無用！！！！！！！！」

「ギャアア」

うわぁ・・・女の子が飛び掛ってきた。

右パンチ顔面にもらった！！！！！！

「うつ！」

腹に蹴り！俺の体が九の字に折れる。

「ぐえ・・・」

さっき食べた物リバーシ・・・ぐえ・・・

アッパゝ顎が跳ね上がる、頭くらつときたよ

「辞めて・・・お願い・・・うっうっ」

尻に蹴り入れられたゝ、痛いって・

俺、地面に倒れこむ。

「ドサ！」

「辞めて辞めて・・・」

うげえ・・・唇切れた・・・痛い、痛い！いじめないで・・・

怖い、マジで怖い助けて・・・ピエールなんとかせんかい！

俺死んじゃうぞ。

「このゝ蛆虫がゝドカドカドカドカ！」

まだ、俺、腹蹴られてるってば！

この糞女、止めてってば・・・

死ぬゝ！ダズゲテ・・・

ピエールは女の手を掴んだ。

「コラ！拓様になんてことを・・・！」

「うるさい！この人攫いめ！」

「あんたもこうなるんだよ！」

「私を舐めるなよ！それでも武道の心得あるんだから！」

おめー遅いんだよ・・・もっと早く・・・

ピエール・・・お前がやられたら全滅だ・

なんとかしろ・・・お前やられたら、もうバリア張っちゃうよ。

ん・・・？

ピエールなんか笑ってる・・・

「ふ・・・」

「しんじゃえ〜！」

「ふん！」

おお、ピエール女の子の右パンチを、左手で余裕で止めた。

「まだまだ〜」

うわ、女の子の後ろ回し蹴り

「グハ！」

ピエール頭に受けちゃったよ・

その後、女の子しゃがんで、水平蹴りで足狙ってるよ。

ピエール危うし・

「ホッ！」

ピエール、小ジャンプっして水平蹴り避けた！

お・

おおお！！

「ふん！」

「ぐふ・・かは・」

ピエール、女の子に右ボディ一発

更にボディ！

あ、これは・・右手を取ったぞ

その体勢から背中に担ぎこむこれは・・一本背負い！

「きゃあああ！」

「ドスン！」

決まっただけ！

勝負あり！一本！

女の子は背中から叩きつけられ、動けないようだ。

「ゲホッ、ゲホッ！」

「悔しい・・・」

女の子地面の砂掴んで、悔しそうに半泣きしてるよ。

「所詮、女の力ではここまでのようですね」

「さてと、すみませんが、あなたに選択をしてもらいます」

ピエール、少し中腰になって、冷たい視線で女見下ろしてるよ。

氷のような目だ・・・

「ゲホッ・・・選択・・・？」

「私達と黙って一緒に旅をするか、それともここで死ぬかです。」

え・・・ピエール・・・そんな2択は無いでしょ・・・

お前は鬼畜か・・・？

しかし、俺もここまでボロボロにされたし

下手したら殺されてたかもな・

それくらいの脅しあってもいいかもな・

「わ・分かったわよ・付いていくわ・」

「よかった・あなたを殺さないで済んで」

ピエールは右手にナイフを隠し持っていた。

ピエール本気だったのね・

怖いよ・・ピエール・

「じゃ、貴方のお名前を聞いておきましょうか？」

「私はアンリ・ソルティア」

「アンリだね。よろしく」

「起き上がれるか？手を貸そう」

・・なんだ・・ピエール、その優しい態度。

アンリのお前を見る目が、さっきと違うぞ。

俺の女・・って、こんな凶暴な女、好みじゃないけどさ・

まあ、いつか・・旅のメンバーに女が入ったんだ。

凶暴でも美人だし、旅が少しは楽しくなるはず!?

新しい街作っちゃうよ？

俺達を乗せる馬車は、ごつごつした岩やサボテンが続く
舗装されていない道を、目的地を定めずに、ゆっくりした速度で
走る。ガタガタ揺れるその馬車の上は、一種異様な雰囲気支配し
ている。

さっきの凶暴女はもちろん一緒だ。

「あんたたち、どこへ行くつもり？」

アンリが俺達の後方から、行き先を尋ねてくる。

行き先なんてものは初めから持ち合わせていない・・・

無い物と言えないのだ。

俺は何を言おうか苦慮してる間にも、気まずい雰囲気が馬車を包
む。

ピエールがその雰囲気嫌ったかは、不明だが、俺より先に口を
開いた。

「さあね」

おいおい、それだけですか、ピエールさん・・・

俺は呆れた顔で、飄々と馬車を走らすピエールの横顔を見つめる。

でも、それは至極当たり前と言えば、当たり前。

だって、俺はこいつの主人であり、ピエールは俺に絶対服従の従者。

俺の要望を忠実に聞き入れ、その命令の通りにしか動かない。

・・・たまに暴走はすることはあるが・・・

その主人である俺が行き先なんてものは、頭の片隅にも置いてない。

答えは「さあね」 無難だよな・

「ピエール、どこか街を探してくれ。」

取り合えず、俺は街に行きたい。

街にさえ行けば、何か楽しい出来事が、棚から牡丹餅のように

降って来るはずだ。

俺はそんな短絡的な思考でピエールに気楽に言ってみる。

「街ですか？」

「地図もないし、今走ってる場所も分かりかねます。」

「どうでしょうか」

さすがのピエールも今のこの状況では、肯定的な答えは返せないようだ。

俺はこの永延と続くつまらない光景に、嫌気がさしてきたので

新しい街を見つける打開策を、馬車に揺られながら練り始める。

・・・うん、やっぱり携帯かな。携帯しかないような気がする。

「ピエール、ちょっと馬車を止めてくれないか」

「トイレしたいんだ。」

「できれば、俺の姿が馬車から隠れる、岩があるところに止めてくれ」

俺は携帯を使用するところを、ピエールや女の子に見られないように

俺の姿を覆い隠せる岩がある場所に止めるよう、ピエールに指示した。

女だけじゃなく、ピエールにも見られたく理由は……

そう、俺はまだピエールを信用していない……

携帯で、しっかり俺に絶対服従の優しい従者と名打った。

出てきたピエールの今までの行動を、観察した俺の感想を述べると確かに命令に背く行為はないし、俺に対しては従順で優しい調子で接してくれるが、俺以外に大しては鬼畜とも言える犯罪行為を平気ではたらくピエール。

そして、俺より行動力と実行力があり、頭の回りも格段に速いピエール。

いくら従順に設定してるとは言え、どうしても俺の性格上警戒は解けない。

こいつが携帯の存在を知った時、どういう行動に出るかが未知数な点も

俺を不安にさせる。

俺はこう見えても慎重な男だ。

まだまだ、信用できない。

ピエールとの旅路はこれからも、石橋を叩いて渡ることになるであらう。

「ここでいいですか？ 拓様」

うん、確かに俺が隠れることが出来る岩があるな。

俺は地面に軽く飛び跳ねて着地すると、岩場にこそ隠れる。

岩場の影から、馬車の方をちらつと見る俺。

ピエールは馬車の後方に顔を向け、体を振っている。

女としゃべってるな・？

よし、こつち見ていないな・・

俺はポケットから携帯を取り出すと、音を立てずに、そーっと開く。

さて、何にしよう・・

街に行きたいわけだが、街に行ったところで、普通の街では

さつきと変わらない旅がこれからも続くだろう。

そんな、つまらない世界を旅するために、ここに来たわけじゃない。

そうだな・・・

魔物が支配する街でどうだろう？

でも、それだと優しい魔王の設定に矛盾は生じないだろうか？

その優しい魔王の手下である魔物が何で街を支配してるの・

いや、優しい魔王の手下だから、街を支配している理由はなにかあるんだよ。

きっとそうだ！

それに・・・怖い魔物がいたとしても、街に入ってから、バリア張り続けられ

俺に危害を加える事はできないはずだ。

よし、決めた。ここから西に5kmの地点に街を作るぞ。

どんな街にしようかな？

そうだ、湖の真ん中に土砂を埋め、その上に建てられた水の都。

俺は泳げないから、橋が4つあることにしよう。

1つだと、いざつて時、橋を一本封鎖されたら

ジ・・・エンドだからな・・・

よしそうしよう。

携帯を打つぞ、ピエールは・・・

見ていないな・・・

ここから西に5kmの地点にある湖の真ん中にある

陸地から4つの丈夫な岩でできた橋でわたる事が出来る

魔物が支配する街。

OK！

これでボタンを押すぞ。

押したぞ！

街追加！

さあ、馬車に乗って出発だ。

街にきたよう？

俺は西の水の都へ行くために、唐突にピエールに命令をした。

「ピエール！」

「はい」

「ここから西に5kmの地点に馬車を走らせる」

「は？」

「は？じゃねーよ」

「行くんだよ」

「分かりました」

ピエールは俺の突然の要望に、訳がわからないといった表情を瞬したが

従者としての義務を果たすため、無言で手綱を引き馬の方向を変えると

馬車を西に走らせた。

さすが、俺の従者、俺の一見、意味不明な命令にも、口答えせず

何も言わずに要望にこたえる。

まさに従者の鏡。

「ん・・・どこ向かってるの？」

「水の都さ」

「はあ？」

「そんなのあったけ・・・」

「あるのさ」

突然の進路変更に、不審な表情を浮かべ、行き先を聞いてくるアンリ。

俺はそのアンリに、にやけながら行き場所を告げた。

水の都、語呂がいい。そしてその場所を知っている俺。

少しアンリに俺の博識ぶりを、見せ付けた気持ちになり

なんだか、いい気持ちだ。

「ああ、喉渴いた。」

「あんたたち、何か飲み物もってない？」

「ねーよ！」

「うーん、喉渴いた・・・」

馬車の後部座席で太陽に晒される事無く、もたれかかる椅子があり

快適なくせに、要求はしっかりしてくる女、アンリ

後部座席で後ろにふんぞり返り、少し股を開き気味に座っている。

なんて下品な女だ・・

いや、女ってこんなもんなんだろう？

俺は今更恥ずかしくないが、童貞であることには間違いない。

女という者に、多少偏見や憧憬や幻想が入ってるのは仕方ないんだが・・

それにしても、見るに耐えない姿。

馬車についてるバックミラーから丸見えなんだよ・・

女らしくして欲しいな・・俺は清楚なかんじの女の子が好きなんだ。

アンリを好きになる必要は全くないけれど、その格好は目に毒だ・

しかし、アンリって両親とかいるはずだよな。

無理やり誘拐されたあげく、変な奴等（俺含む）と一緒に

いきなり旅に連れて行かれて、悲しくないのかな？

寂しさとか無いのかな・

そうだ、一応そのこと聞いてみよう。

「なあアンリ」

「ん？何よ」

「君ってさ・今の状況どう思う？」

分かっているよ、馬鹿な質問してるのはさ・

でも聞いてみたいんだ・

「はん！、どうもこうもないよ」

「いきなり誘拐されて、暴行つけて、脅迫されて」

「無理やり旅に連れて行かされて」

「良い迷惑だよ」

確かに・その通りでございます。

やっぱり、普通腹立つよな

「アンリ、家に帰りたいか？」

「そら、帰りたいよ」

「でも、その男が許さないだろうね」

たぶんね、剣で殺そうとしたしね・

いや人事みたいに俺って・

なんか罪の意識が芽生え始めてきた。

「ごめんよ、今から家に帰そうか？」

「……………」

「いいよ、別に、私退屈してたからさ」

「旅行だと思えば、気も晴れるよ」

へ…………帰らないのか？

「私の両親は父親はどっかの女と浮気してるし」

「母は私に毎日愚痴ばかり言ってる」

「最近うんざりしてたからさ」

「私がいなくなって、あたふたしてるだろうね」

「ざまあみろってかんじ」

なんか複雑な家庭のようだ。

まあ、本人が良いって言うのなら、良いのかな・

そんな会話を聞いているのか、聞いていないのか

能面のような顔で、無言で馬車を走らせるピエール。

何にも感じていないのかな？

なあ、ピエール。

「お・・拓様！言われたとおりに来ましたら」

「確かに湖に浮かぶ街が見えてきましたよ」

「当たり前さ、俺はその街知ってるんだから」

俺は得意げな笑みを浮かべ、ピエールにぶっきらぼくに答える。

「湖！？水ありそうね、早くいこー！」

喉をからからにしたアンリが、湖の浮かぶ街というフレーズを耳にすると

急にかつと目を見開き、上部座席に半身を乗り出してくる。

「おお、本当だ・・すごい、水の都だー！」

アンリちゃん・胸あたってますよ・

俺はさすがに恥ずかしさを隠しきれず、体が硬直する。

緊張しています・・・やっぱり女の子。

免疫のない俺には、生の女の子は刺激が強すぎる・・・

馬車が石橋を渡り始める。

石橋のその両脇には湖がみえ、青い透き通った綺麗な水を俺達の目に焼き付ける。

アンリはその水を見つめながら、生唾を飲んで喉をごくろと言わす。

どこからともなく、涼しい心地良い風が、炎天下を走ってきた馬車に

吹き付け、俺達に一瞬の天国を体験させる。

間もなくすると、街の門が見えてきた。

つり橋の両脇が、二つの鎖で街の入口の石壁から繋がれていて

それが今走っている岩の道へと、敷かれている。

そのつり橋を馬車はゆっくりした速度で渡ると、街の門にさしかかる。

その時・・・

突然、門の中から豚の顔をした人間みたいな奴が、二人でできて馬車の前で

持つてる槍を両者の真ん中で交差させる。

「む・・・」

「なんだなんだ？」

ピエールは片方の眉を吊り上げると、緊迫した表情で手綱をひき馬車を止める。

俺はピエールの肩に右手を置くと、その醜悪な面の豚人間に少し怯えながら

肩を震わせる。

怖いです・・・

実際に見るとやっぱり魔物ってインパクトありますよ・・・

後部座席のアンリはその豚人間を見たたん、驚いた表情で顔を引きつらせると

体を平坦にして、奴等から見えないように姿を隠す。

ずるいよ・・・アンリ・・・

俺も隠れたいってば・・・

上部座席から今更後ろに引っ込むわけにもいかないし・・・

助けてピエール・・・

俺達の運命は君にかかっているよ。

「おい、その馬車の人間」

「降りて来い」

豚人間は少し険しい表情ですごみながら馬車に近付いてくる。

ひゅ・・・

怖いよ・・・

怖いよう？

「おい、どうした、降りて来い！」

ピエールはしばらく、豚人間達を見ながら、押し黙っていたが手綱を離すと、ゆっくり降りていく。その間に、俺に何かを囁いた。

「拓様・・・ここは奴等に従いましょう」

「お、おう・・・」

俺も仕方ないので、少し怯えながらも、猫背で馬車を静かに降りる。

そして、ピエールを盾にするように、後ろに重なるようにして立つ。

「人間、この街になんの用だ？」

「用ってほどの事は・・・」

「ただの通りすがりの旅人です」

ピエールは眉一つ動かさずに淡々と答える。

ピエール強気だな・・・頑張れ・・・

「隊長！馬車の中に女が隠れてましたぜ」

「なに？」

「こら、痛いつてば、なにすんの！」

豚人間の一人が馬車の後部座席で背を低くして、隠れていたアンリを見つけると
スカートの背中の部分を、片手で引っ張り、ひょいと持ち上げると外に連れ出した。

なんて力だ・・・豚人間強そうだ・・・

「こら、豚！私にひどいことすると、その男が黙ってないよ！」

アンリはそう叫ぶと、俺達の方を指差す。

俺はそれを聞いて、一瞬、冷や汗を書くと、アンリの指先の外へ体を移動させる。

コルア！アンリ・・・突然挑発的な態度となるよ・・・

大人しくしとけよバカ・・・

「なに・・・こいつが黙ってないって？」

豚人形が俺のほうを睨む。

だ・・・だから違うって・・・！俺の前の男だよ・・・！

勘違いするな・・・！

俺は首を横にぶるぶる振りながら、地面に屈むと泣きそうな顔で

ピエールを指差す。

「私のことですよ」

ピエールは静かに言い放つ。その言葉を聞いて、豚人間が一斉にピエールを見た。

「そうそう、そいつだよ」

あんりがダメ押しする。

アンリ、ぐっじょぶ・・

少しピエールは考え込むように、俯き黙っていたが、また口を開いた。

「ですが・・私はあなたたちに抵抗するつもりは、ありません」

豚人間たちはそれを聞くと、二匹で顔を見合わせた。

「そうか、その方が利口だな」

「よし、お前達を連行する」

俺達は後ろ手を縄で縛られると、ピエール、俺、アンリの順に豚人形に前後を挟まれながら、街の門の中へ連れて行かれる。

「どこ、連れて行くのよー！」

アンリが両眉を上吊り上げながら、不機嫌そうに豚人形に物申す。

「この街を治めるラクシャーサ様の所だ」

豚人間はアンリにそう答えると、アンリの背中を一回押した。

「痛いわねー！豚！」

「この野郎・・・口に気をつけろよ」

「ふーんだ！」

「ち・・・」

後方の豚人間はアンリを訝しげに見つめる。

アンリ・・・大人しくしようよ・・・

このシチュエーションを理解しようぜ・・・KYは嫌われるぜ・・・

怒らせることは辞めて・・・お願い・・・

アンリが静かになるように只管祈る俺。

そして、ピエールの顔を、後ろから縋るように覗きこむと
少し険しい表情をしながらも、口元が少し笑っているように見える。

な・・なんなんだ・・その余裕は・・

なんかあるのか・・？期待していいのか？ピエール・・

俺はこれから何が起こるのかを考えると、心臓の鼓動が激しく高鳴るのを感じていた。

助かりそう？

俺達は豚人間に連行され街の中心部へと、進んでいく。

街の中は人間の姿はなく、魔物の姿も見えない。

石畳のタイルが敷かれた道沿いには、街の民の住む家だと思しき木造やレンガ、石材でできた建物が両側に何軒も建っている。

その道を抜けると大きな広場が見えてきた。そこには高く聳え立つ、大きなクリスタルの塔が

日の光を浴びて、眩い煌きを放っている。

湖の上に建てられたこの街は、ほぼ円状の土台に、真ん中の広場のクリスタルの塔を中心に、家が円を描くように幾重にも建ち並んでいて、その家々の間に中心部から放射線状にいくつかの道が延びている。

俺達は、どうやらあの大きなクリスタルの塔の中へ連れて行かれるようだ。

塔の前には衛兵らしい豚人間が遠目で見える。

どうなってしまうんだろう・・・

俺達は前後を豚人間に挟まれ、逃げれそうにも無かった。

ピエール君・・・どうするつもりだい・・・

ピエールの後ろ頭を、不安に駆られながら眺めると、俺は最悪の状況を頭に思い浮かべていた。

あの塔には、きっと、豚人間なんか及びもつかない、凶悪な面をした巨大な化け物が

居るに違いない。

そして、良く分からない理由で、牢屋に押し込められて、処刑されるんだよ、きつと。

もしくは・・・

どこかの工場で、化け物のために、死ぬまで強制労働させられるに決まっている。

支配されるという事は、そういうことなんだ。

ましてや、俺達は行きずりの旅人であり、人間だ

俺は根暗な妄想を、次から次へと頭の中に垂れ流していた。

「あの塔、綺麗！」

アンリは無邪気な顔で、クリスタルの塔を後ろ手を縛られながらも興味深げに楽しそうに眺めていた。

アンリ・・・お前はいいなあ・恐怖という物は貴方の心には存在しないんだね・・・

俺はそんなアンリとは対照的に、足を震わせ恐怖していた。そして最後の手段の事を頭に思い浮かべていた。

・・・もう、こうなったら、あの塔に入る前に、こいつら見捨てて飛び立とう・

そんな身勝手な行動を実行しようとしたその時・・・

「おい！」

「ん・・・？」

「ブシュ、ブサ、ドス、ズシャ！」

突然、数人の人間の男達が現れたかと思うと

俺達の前後に居る豚人間に、襲い掛かった。

豚人間は剣で切りかかってくる人間達に、槍で応戦するも背後から剣で貫かれ、多勢に無勢で、血をどばどば流しながら倒れていった。

「あはは、ざまあみる！」

アンリは、そんな殺戮シーンの中でも、倒れこんだ豚人間に暴言を吐いている。

アンリすげえ・・・こういうシーン慣れてるのね・・・

うげ・・・気持ちわる・・・とても、俺は凝視できねえ・・・

豚人間を倒した後、俺達にそいつ等は剣を持ったまま、近付いてくる。

俺は咄嗟に防衛反応を働かせて、体にバリアを纏う。

・・・うわ・・・やるきか・・・しかし、俺にはバリアがあるぜ！

バリアを張ったとたん強気な俺。

「君達、後ろを向きなさい」

・・・後ろから、刺す気？

近付いてくる人間に、俺は手を振り上げ、バリアパンチを食らわそ

うとした刹那

ピエールが声を発した。

「拓様、彼等の言うとおりにしてください」

「え．．？」

ピエールのその冷静でトーンが低い割りに、何かの確信を含んだような声に

疑心暗鬼ながらも、宥められると、バリアパンチを取りやめ大人しくしてみることにした。

その人間達は、俺達の後ろ手の紐と手首の隙間に、ナイフを差し込むと

紐を切り千切っていく。

「ああ、痛かった」

「大丈夫か、お嬢ちゃん」

「酷い目にあつたな」

「うん、助けてくれてありがとね、おじさんたち」

「ははは、おじさんか、確かにそうだな」

良く分からない人々と、瞬時に打ち解けあうアンリ。

俺は、たぶん敵ではないと思いつつも、微妙に警戒をして無口になっている。

ピエールは元々無口で、押し黙っていた。

「君達、俺達と着いてこないか？」

カウボーイハットの、渋い顎鬚の男が俺達に言った。
その言葉にピエールの右眉がピクッと上に持ち上がると
静寂に溶け込むような静かな声で、言葉を発した。

「貴方達は何者ですか？」

「俺達は、この街のレジスタンスの者だ」

「詳しくは、ここでは話せない」

「衛兵がもうすぐ、こちらへやってくるだろう」

「来るのか、来ないのか、それだけ答えてくれればいい」

カウボーイの男は、強い口調で、俺達に語りかけるように言い放った。
その間にも、塔の衛兵が気づいたのか、こちらの方へ遠くから走ってくるのが見える。

「私は行くよ、付いていくよー！」

あまり物事を深く考えずに、即決断を口にするアンリ。

「行きますか、拓様・」

「ピエール行く？」

俺の問いかけるような言葉に、静かに頷くピエール。

「じゃ、俺も行こつかな・・・」

・豚人間来てるし、ここは素直についていった方が良さそうだ。

最後の俺の決断の言葉を、カウボーイ男が聞き取ると俺達に呼びかけた。

「よし、じゃあ、俺達に付いて来い」

「悪いようにはせん」

俺達は男達が小走りで、街の細い道へ入っていく後を追いかけるように、行動を共にした。

勇気振り絞るよ？

俺達はレジスタンスと名乗る男達の後を、小走りで付いていく。

どこまでいくつもりだろう・・・？

「もう疲れたよ」私・・・」

アンリが息をきりながら、無言で走っていたが、だんだん口から弱音がこぼれ始めていた。

「もうだめ」

「頑張るんだ・・・もうすぐだ・・・」

男達は疲れてきた俺達に、足が止まりそうになるのを防ぐかのように、励ましの言葉を点々と掛けてくる。

俺は息をハアハア言わせ、時々ふら付きながらも、後ろを振り向く。見ると、遠くから追ってきていた豚人間が、かなり俺達に追いついてきているのが分かる。

・・・ゲゲ・・・

俺はそれを見て、ガソリンの切れかけた体の、全パワーを振り絞るかのよう

に猛ダッシュをすると、アンリを追い越し、ピエールの横に並んだ。

「来てるよ！おっちゃん！！！」

声を振り絞り追っ手の存在を教える俺。

「む・・・早いな・・・」

「みんな、良く聞け！」

「こここの道をまっすぐ走ると、壁に突き当たる」

「その壁の下に、勇気を振り絞って、足から滑り込め」

「ええ・・・」

「いいから、騙されたと思って、突っ込んでくれ」

そんな無茶な・・・そんな事したら、足折れるじゃん・・・

「わかった！」

アンリは強い口調でそう答えると、さっきまでの弱気な顔から、凛々しささえ漂わす

大人の女性の顔に変貌していた。

静かにピエールも頷く。

・・・二人とも格好いいよ・それに比べて俺は恐ろしいよ・・・

「よしきたぞ！」

「足からつつこめ〜！」

・・・どうみても、レンガが積み上げれたその壁に
足から突っ込んだら、足が折れる事、間違いなしなんですが・

「イヤホオオ〜！」

壁まで来ると、男達が威勢の良い声をあげ、次々と低姿勢でスライ
ディングのように
足から壁に突っ込んでいく。

すると、その姿が壁に吸い込まれるように、中へ入っていった。

その様子を足を止め、啞然と見つめる俺達。

しばらくすると、ピエールが額に汗を浮かべながらも、冷静な口調で
俺達に語りかける。

「みんな、見ましたね？」

「同じように入るんです」

「分かったよ〜！」

「わ・・・分かった・」

俺達の返事を聞くと、先にピエールが意を決したように、勢い良
く滑り込んでいくと
壁の中へ消えていく。

それを見たアンリは、壁の前で足を止めると、足の先でみんなが消
えていった辺りを
突付いている。

足の先が、壁に吸い込まれたのを何度か確認すると、しゃがみ込み、
四つん這いになって

お尻を壁の方へ向けると、俺のほうを見上げ、言葉を発した。

「じゃあ先にいくね」

「バイ！」

俺に無邪気な笑みを浮かべ手を振ると、そのままの格好で、恐る恐る体を後退させていく。

その間、俺は、焦る気持ちを全面に出しながら、後ろを何回もふりむき、その場で激しく足踏みをしていた。

やがて、大きな足音が迫ってくるのを聞き取ると、居ても立ってもいられなくなり

他に逃げ道がないか探し始めるが、見つける事が出来ない。

そうしているうちに、アンリが壁に吸い込まれ消えたのが目に入ると、覚悟を決め

半ばやけくそ気味に、壁に足から滑り込んだ。

・・・ままよ！！

俺は壁の中に体全体が吸い込まれると、一瞬間に浮かぶような感覚が体を襲う。両手両足をばたつかせ、声ともならない声を発するが気がつくと、どこかの建物の床で、仰向けで手足をバタつかせていた。

「うわ・うわ・・・」

「あれ・・・」

「びつくりしたか、坊主」

その声に我にかえると、俺は手足のばたつきを止め、床に後ろ手をつくと

体を支えるように半身を起こす。

その姿を、さっきの男達が笑いながら見下ろし、言った。

「無理もないよな」

辺りをきよろきよろして見渡すと、近くにピエールとアンリの姿が目に入る。

ピエールは、息を荒げながら、うつ伏せに這いつくばっていたが、徐々に体を起こすと、ゆっくり起き上がり、自分のズボンを、右手でパンパンとはたと立ち上がった。

アンリは床で、少し息を切りながら額に汗を浮かべて、呆然とした顔で大の字になって寝転んでいた。

話し聞いちゃうよ？

俺は息を整えながらも立ち上がると、この部屋をうろろし始めた。

木の長方形の少し古びたテーブル、丸イス、壁に沿って、剣立てでもいつのかな

剣を置いてける場所があつて、いくつもの剣が刺さっている。

(…これ、爆弾かな…？鉄の丸いボールくらいのものが数個あるな)

大きな本棚には、大小様々な本が並んでいる。

(…広さは結構あるよな…30畳くらいありそう…)

(…試験管…？これで何つくるんだろ…)

ピエールとアンリは疲れているのか、テーブルのイスに座っている。アンリはテーブルにもたれかかって、顔を押し付けている。

「みんな、落ち着いたか…？」

顎鬚の男が俺達を見回すと、一言発した。

「ええ、まあ…なんとか…」

適当に言葉を返す俺。

「じゃみんなテーブルについてくれ」

「色々話そうと思う」

「君達も聞きたいことは山ほどあるだろう」

俺はその言葉の通り、ピエールの横に座る。
顎鬚以外の5人の男達も椅子に座っていく。

「ピエール、大丈夫かい？」

「はい、拓様こそお怪我はありませんか？」

「うん、大丈夫だよ」

「それは良かった」

「拓様、勇敢でしたよ」

「お、俺が？」

「はい、初めて会ったときより、随分逞しくなれました」

「ほ」

少し俺には意外だった。

ピエールが俺の事に対して感想を述べるなんて・・

正直今まで、俺の事をどう思ってるのか、何考えているのか
さっぱり分からない、能面男としか思っていなかったが

ピエールなりに何かを思っているらしい。

ある意味発見だ。人形じゃなく、血の通った生き物だという事をこ
の時実感した。

「さてと、何から言えばよいのやら」

「とりあえず、自己紹介しようかな」

「俺はこの街でレジスタンスを組織するエンギルだ」

「他の5人は時計回りで順に、タバスコ、ハン、コーネル、ムール、キルだ」

男達は名前を呼ばれると、立ち上がり、俺達一人一人に各々自分の名前を言い、そして俺達も名前を名乗り、挨拶をして握手をする
と、席に戻っていく。

「自己紹介は済んだな」

「さて、旅人諸君、俺達に色々質問があると思う」

「何でも聞いてくれ」

俺はそれを聞くと、ずーっとここへ来てから聞きたくて、うずうず
していた
質問を投げかけた。

「あのー、さっき、この部屋に入ったときの、あの壁の」

「なんていったら良いのかな・・見えない入口・？」

「あれは一体何なんでしょうか？」

エンギルはヒゲを右手で一度さすると、快活な笑みを浮かべて語り
だした。

「良い質問だ、あれはな、魔法だよ」

「この街には、所々に、この部屋に通じる魔法の入口が張ってあってな」

「逃げる時や、近道に、その入口を使うんだよ」

「この入口は特殊な魔法を施していて、人間だけが通れるようにできている」

「魔物が入る事はできない」

「なるほど・・・」

（…便利な入口だな・・・ワープゾーンみたいな物が・・・）

「すごい、魔法って本等にあっただんだ!」

疲れた顔をしていたアンリに一瞬生氣が宿ると、突然驚いた様子で目を輝かせ言った。

「ああ、他にも色んな魔法があるぞ」

「炎を飛ばす魔法や、凍らせる魔法、空を飛ぶ魔法など色々な!」

「すごい! 私も使えるようになりたいな・・・」

「ハハハ、そのうち教えてあげるよ」

「やった〜!」

俺は大して魔法の存在に驚きはしなかった。何せ俺が作った世界だからな。

ま、実際にこの目で見てみたいとは思っただけだな。

アンリはすごく興味ありそうだ・・

あのお転婆娘に魔法・・恐ろしいよ・・

「他に何かあるかな？」

テーブルで手を組み、その話を黙って聞いていたピエールが口を開いた。

「この街は魔物が支配しているように見受けませんが」

「どういう経緯で、こういう事態になったんでしょうか？」

エンギルの顔がさっきまでの和やかな表情を、一変させて強張らせる。

「おっと、いきなり核心をついてきたな」

「当たり前といえば当たりの質問だ」

「この話をすると長くなるが、重要な事なので心して聞いて欲しい」

エンギルは真剣な口調で話し始める。

聞いた感じを大まかに要約すると・・・

この街は元々、人間達が平和に暮していた町だったそうなの。

しかしある時、魔物の軍団がこの街へと突如やってきたかと思うとその圧倒的な力で街の民を粛清すると、この街を支配下に置いてしまった。

街の民のほとんどは殺され、生き残った人々は、クリスタルタワーにある

捕虜収容所に捕まっているらしい。

エンギル達は魔物が襲ってきた時に、何とか逃げ切った人々が集まって、いつか、街の民をクリスタルタワーから救い出し

魔物を街から追い出すために作った、赤いサソリというレジスタンスの組織の

メンバーだと言うことだ。

俺はこの話を聞いて、ふと疑問が頭によぎった。その疑問をエンギルに投げかけてみる事にした。

「エンギルさん、話しは大体分かりましたが」

「一つ気になる事があります」

「ん？なんだい、拓、何でも言ってくれ」

「実は、私の聞いたところによると、この世界を支配する魔王は」

「優しい人格の持ち主だと聞いています」

「その優しい魔王の手下である魔物が・・・」

「なぜこのような酷い事を行っているのでしょうか？」

「・・・・・・・・」

一瞬俺の質問に沈黙をするエンギル。

「これまた、鋭い質問だな・・」

「その話をするなら、この世界の成り立ちから、話すしかないな」

エンギルは深く息をつき、一瞬目を閉じると、目を細く開け少し遠い目をして、話しを続け始めた。

話長いよ？（前書き）

必死に推敲中・・・

話長いよ？

また、エンギルは長い長い話を語り始めた。
長すぎるので要約すると・・・

この世界に君臨する優しい魔王は、魔族と人間との共存共栄をスローガンに掲げ
魔物と人間が打ち解けあい、お互いの存在を認めて、平和な世界を築く事を理想としていた。

魔王は魔族だけが棲む国、シャンギリラに居を構え、人間が住む国々との

国交を絶やさず、常に平和的外交を行ってきた。

魔族に作れないアイテムや食べ物、特殊魔法の技術者、魔族の文化、そういった物を人間たちと分かち合い、逆に人間の国にしかない産物、技術、文化も自分達の国に積極的に取り入れ

そういった交易をする事によって、魔族にも人間にも利益をもたらす事に成功しているように見えた。

しかし、魔族人間の双方にそれを好まないものが多数いる。

優しい魔王の政策を快く思わない魔物たちは、シャンギリラから出て行き、あちこちで

人間を襲ったり、野で暴れたりし、その中には若干ではあるが、魔王を打ち滅ぼそうと

画策しているものまでいるそうだ。

そして、魔族との国交を疎ましく思う人間達は、離反した魔族と組んで、魔王を倒したい者

、利害関係のからみで魔族と組み、同族の人間の国を襲い、そこにある宝物や、技術を

奪うもの。野に出て魔族を敵対とみなし孤高に戦う者、集団。

いろんな勢力が双方にいて、一見平和にうまくいつているこの世界

も、実は混沌としたものとなっているそうだ。

「……まあ……現実の人間社会とほぼ変わらないと言えば変わらないかも……」

「話しが長くなっただ、そういう事だ」

「この街はそういった魔王を裏切り離反した魔族達の一部の者が……」

「理由は分からないが、襲ってきて支配し、現状のようになったわけだ」

「なるほど……」

「なんかすごいな……」

俺は少し驚いていた。

面白くするために、短絡的に優しい魔王が支配する世界と携帯に銘打ったが

これほど、壮大な世界に発展していようとは夢にも思わなかった。

ある意味エンギル達に、こんな世界を作った事に対して責任すら感じていた。

（……ごめんよ、エンギル、そして数々の人間達、魔物たちよ……）

「ね、難しい話はおいとして、お腹すいたよ」

アンリはさっきまで眠たそうに話を聞いていたが、空腹に堪えきれず

長い話が落ち着いたのを見計らって、自分の欲求をストレートに言い放った。

（…確かに、俺も飲まず食わずでずっと来たし）

「俺も喉乾いたし、腹もへってまゝす」

俺はアンリに、ただ乗りして同じ要求を言葉にした。

「ははは、そらそうだな」

「あれだけ走ったんだ」

「よし、調理係のミントにご馳走を頼もうか」

「ミントいるか？」

「はい」

年若い、アンリくらいの年かな？

俺から見たアンリは高校生くらいの年に見えるから

16つてところか、金髪を後ろで白いゴムのようなもので束ね、緑の丸いイヤリング、

少し暗めの赤と茶色の混じったようなスカート、同じような色のシヤツ

エメラルド色の眼に綺麗な顔立ち。とても可愛い子だ。

・・・なんで、俺がいちいち、説明するかって言えば・・・
・・・実は・・・モロタイプなんだよ・・・へへ・・・

ミントは俺達に挨拶し、人数の確認を済ますと、優しい笑みを浮かべ、丁寧に会釈したかと思うと、また調理場へ戻っていった。

(…かわいいなあ…)

「さて、飯ができるまで、少し時間がある」

「とりあえず、君達に今いる場所の説明をしようか」

エンギルがまた長くなりそうな話をするみたいだ。

「ここは、街の中のある民家の地下にあつてな」

「その民家の地下室の地面の一角に重い石の扉が隠されている」

「そこからは入ることも出る事も出来るんだ」

「唯、さつきも行った様に、魔法の入口が多数あるので」

「そこから入ることは、ほぼ無いと言っていいだろう」

「ただ、魔法の入口が多数あつても、出口が一つじゃ困るよな？」

「万が一、その扉から魔物たちが入ってきた場合」

「そこを抑えられたら俺達は終りだしな」

「だから、このレジスタンスのアジトにも・」

「もちろん、外の魔物の目に触れない安全な場所に通じる・」

「見えない出口が何個がある・・・」

「その場所を今から、アジトの説明も兼ねて教えようかと思う」

そうエンギルが言ったかと思うと、突然、神妙な顔つきに変わり俺達の方を少し厳しい目つきで見る。

「ところで・・・その前に君達に質問だ」

「なんで俺達が、見ず知らずの君達を助け、親切に対応し」

「あまつさえ、アジトの生命線である出入り口の事まで」

「教えようとするのか分かるか・・・？」

しばらく、エンギル達は押し黙って俺達を観察するような目で見つめている。

俺はその張り詰めた空気を感じ取ると、ピエールの顔に訴えかけるような視線を送る。

(…ピエール、俺は分かん、この空気をなんとかしてくれ・・・何か言ってくれ・・・)

アンリはその空気すら、どうでも良いらしく欠伸をしている。

(…アンリ・・・お前はいいよな…エンギルの顔見ろよ、なんか目が血走ってるよ?)

ピエールはエンギルに鋭い視線を投げつけると、静寂に溶け込むよ

うな透き通るような声で
言葉を並べはじめた。

「私の推測でしかありませんが・・・」

「貴方達は私達を信頼のおける人間だと判断し、レジスタンスの仲間へ引き入れるのが目的なのでは？」

「しかしそれが成り立つには、私達を瞬時に信頼における人間だと判断する方法を持っていたか、或いは、私達の事をあらかじめ知っていたか、どちらかになりますか・・・」

「ふむ・・・」

「ただ・・・どうやって、私達を瞬時に信頼に足る人間か判断できたかは、私にも分かりません・・・」

「そして、私達を知ってるという事はありえませんが、貴方達とは今日この街で初めて出会ったはず」

「仮に、私達の事をずっとつけて、観察してたというのなら話しは別ですが」

「私はいつも周りを注視して警戒していますので、そういった形跡は無かったと思います」

「しかし、どういう理由か知りませんが、私達は貴方達の信頼を得ているようです。それも、私達がレジスタンスに入るかどうかで、敵意へと変わるでしょうが・・・」

「エンギル達はしばらくピエールをじーっと穴が開くほど見つめてい

たが、やがて
笑みを浮かべると、言葉を投げかけた。

「ブラボ〜〜〜！」

「ピエール君、君はすごいな・・・！」

「大した洞察力だ・・・！」

エンギル達は嬉しそうにピエールに賛辞の拍手を送っている。
俺はその様子をほっとして眺めている。

（…なんか良く分からないが、良く言ってくれた、ピエール）

「君の推測は間違っではない」

「核心はついているよ」

「その洞察力に敬意を表して、君の疑問に答えよう」

「なぜ、俺達が君達を信頼できたか？」

「瞬時に君達のことを知る事ができ、信頼のおける人間である事を判断する方法を持っていた？」

「いや、そんな魔法やアイテムを私達は持つてはいない」

「君は可能性を否定したが、そう、私達は君達の事を、”知っていたんだよ”」

はめられちゃったよう？（前書き）

結構勘違いして見てる人いますね！題名狙って書いたわけじゃない
ですから！

残念！エロはないです！

はめられちゃったよう？

「知ってた？」

俺はエンギルの不可思議な言葉に思わずそう言った。

「そう知っていたんだ、君達が今日来ることを」

エンギルは本棚に近寄り、赤い何かの魔方陣のような形が扉絵として描かれた分厚い本をテーブルの上に置き、椅子に座ると俺達に聞こえるように読み始める。

「第三章、A1089日、その者達馬車に揺られこの街へきたれり」

「彼等は異形の者に支配されし水の都を救いし救世主・・・」

「彼等の一人は貴族風の男、年若い女、異質の世界からやって来た男子・・・」

「今読んだのは300年前にこの街に住んでいた有名な預言者バツフェルが書いた・・・」

「預言書の一説だ」

「A1089日とはまさしく今日を示していて、俺達はこの預言を信じ、待ち受けていたら」

「君達が来たわけだ」

「俺達は疑う事なく、君達がその救世主だと判断し助け出した」

(…うーん、ちょっと前に出来たばかりの町の癖して、歴史があるなんて

調子いいなあ…さすが俺の作った世界、帳尻あわせは天下一品…
・)

俺は冷めた目で真剣に語るエンギルを見ていた。

アンリは聞いているのか聞いていないのか分からないけど、理解はしてなさそうだ。

ピエールは真面目な顔でそれに聞き入っている。

「ま、そういうことから、君達に助けて欲しいんだ」

「なんといっても期待してた救世主が来たんだ」

「これで俺達の街も助かるはずだ」

「ハハハハハ！」

エンギルって気楽な奴だな…・思いっきり救世主まかせですか。
しかし、お前は俺の恐ろしさを知らない、そして、俺がどれだけ気まぐれな奴かも

分かつちやいない…・俺の性格は言うなれば、天邪鬼。

期待されたら裏切りたくなるんだよ。何も分かつちやいない…・

「取り合えず、エンギル、見えない出口の場所教えてくれない？」

俺はまじめ臭い話を長々と喋るエンギルの会話に空気を読まず分ける入ると、そう言い放った。

「おお、そうだったな、済まない、重要な事だからな」

エンギルはそう言うと言俺達を呼び寄せ、アジトの案内と見えない出口の場所を

俺達に教えながら歩く。

ここは、今居た部屋を中心として、円状の廊下へ繋がる細い通路が3つほど

さっきの部屋から出ていて、その円状の廊下にはさっきの外の家の出口に繋がる

廊下が一つある。円状の廊下の両側には幾つか個室が用意されていてそこでエンギル達は寝起きしている。魔法の出口はとにかく、あちこちに設置されているようで、覚えるというよりは、隙間無くある入口をハシゴするかんじ？

「まあ、こんなかんじだ、君達の部屋も用意してある」

俺達は円状の廊下を進んでいくと、少し大きな木の扉まで来るとエンギルがその扉を開いた。

「ここは客人用の部屋だ、大きめに作られている、ベッドも4つあるから

好きなの使ってくれ」

「じゃゆつくりしてくれ、旅の疲れもあるだろう」

「食事ができたら、また呼びにくるから」

エンギルはそう言つと、部屋から出て行く。

俺は部屋をコツコツ足音をならせながら、うろつろしてこの先どうするか考えていた。

「なあ、ピエール」

「はい？」

「逃げよつか！」

「え・・・」

俺の突然のその言葉に動揺を見せるピエール。

その言葉を聞いたアンリが激しく突っ込みを入れてくる。

「ちよつと、またご飯も食べてないのに、」

「それに私ここで魔法教えてもらいたいの」

「変な事言わないでよ！」

アンリは俺を少し睨みながら、両手を腰に当てて肩をいからせる。

「いや、しかし・なんかほら・ブラボー男の態度見た？」

「何か気に入らなくねえか？」

「なんていうか、もう完全に俺達任せというか・・・」

「確実に勇者かなにかと誤解してまっせ、アンリちゃん」

「そうかなあ・・・」

俺はかなり面倒くさくなっていて、投げやりに言葉を垂れ流す。

アンリはやはり話を禄に聞いていないかんで、取り合えず、料理と魔法にだけしか

興味ないかんじだ。

俺の一連の言葉にピエールが何か言いたそうにしている。

（…何か意見あるんだろうけど、俺が主人だから遠慮しているんだな・・・ここは一つ言葉を投げかけてみるか）

「ピエール君、言いたいことあれば言っていよいよ」

「そうですか？」

俺は笑顔でピエールに向かって二回頷く。

「それでは・・・」

ピエールが部屋に置かれている椅子に手をさし掛けるので、俺はその椅子に座ってみる。

そして、ピエールも顔が向かい合う席に腰掛ける。俺はとりあえず仲間の一人である

アンリに手招きして隣の席に呼び寄せる。少し不機嫌そうにアンリも席につく。

「確かに、拓様の気持ちも分かります」

「今日会ったばかりの人間に、助けられ親切に色々教えてもらいましたが」

「私達にとってこの街は、どうでもいいはずなのは確かです」

「アンリは魔法を覚えたいと言いますが、それなら他の街に行っても覚える事は可能です」

「ほんとに？」

アンリが魔法というフレーズに敏感に反応する。

「そうです、彼等の話したと、この世界にはあちこちに街があるのは確かですよ」

「どこか平和な街で魔法を覚えてもらえばいいでしょう」

「そういえばそうだね！」

ピエールのその言葉に納得すると、さっきまでの怒りが消えうせ笑顔を返る。

（…アンリって単純だな…ある意味扱いやすいよ）

「よしじゃあ、話しは纏まったな」

「さっき教えてもらった出口から出ようか」

「拓様…私も逃げたいと思うのですが、そううまく行くでしょ

うか？」

「彼等の預言書に書かれた言葉は非常に正確な物でした」

「つまりですね・・・」

ピエールは部屋のドアに近付き、開けようとしたが、鍵が掛かっていて開けられない。

「こういうことなんですよ」

「え・・・？」

俺はドアに駆け寄り、鍵をガチャガチャ音を立て、力いっぱい回すが、鍵が確かに掛かっていて開ける事ができない。

「ええ・・・ということだよ」

ドアの外からエンギルの高らかな笑い声が聞こえてくる。

「ハハハハ！済まないな」

「だが、君達の事は”知っている”と言ったはずだ」

「あの預言書は完璧だな」

「君達の性格、行動パターン、今日何するかまで全て書かれてるんだよ！」

「俺達は君達を逃がすわけに、いかないんだ」

「なぐに、この街を救ってくれたら、自由にしてやるから」

「心配しないでいいぞ」

(…糞ぐぐ、はめられた…悔しい…)

ピエール怒ったよ？」

「糞、あのヒゲ親父め！！」

俺は右拳を堅く握り左手の平に何度も叩きつけながら、悔しさを体全面に顕し

部屋をくるくる回っていた。たまに、怒りの波が大きく押し寄せると扉にケンカキックを何度か叩き込む。そんな荒れた俺に、相変わらずのとぼけた調子で

アンリが言葉を飛ばす。

「こら、拓！もう少し大人になりなよ」

「ピエールを見習いなさい」

「あ・・・？」

そのアンリの言葉が微妙に俺の怒りの琴線に触ると

少し遅れて怖い顔でアンリに視線を送ったが、いるはずの場所に既にその姿は無く

部屋の隅にある木でできた歪な台に置かれた地球儀を、手で回転させて遊んでいた。

その無邪気に遊ぶ姿を目にしているうちに、なんだか気が抜けると溜め込んでいた怒気が払われ俺に冷静さが戻ってくる。

（…そうだよ…いつまでも怒っていても、仕方が無いよな…

ここは一つ前向きに
色々考えようか…）

取り合えず俺はピエールが座る隣の椅子にゆっくり腰を落とすと、腕を組み目を閉じて

この後どうしようか思いを馳せる。

頭を左右に振りながら、この街を出て行く方法を全力で考えていたがどうしてもその方法が見出せずにいた。

様々な脱出方法を思い浮かべるものの、全てそれが水泡と帰す。

なぜそうなるかと言えば、やはりエンギル達が持つあの預言書のせいだ。

俺達の性格や行動パターンが示されているあの忌まわしい分厚い本。それだけならまだしも、今日俺達がどう行動するかまで逐一書かれてるらしいじゃないか・・

これじゃ、どんな策をろうしても、全て奴等に筒抜けであって、それを行動に移しても散々な結果は見えている。

考えれば考えるほど、俺の顔は苦悶に満ちたものへと変わり、苛立ちが体に積み上げられていく。そんな俺の様子を見てピエールが静かに口を開く。

「拓様・・お気持ちは分かりますが」

「いくら考えても無駄な事です・・」

「私達の全ての行動を示したあの本があるかぎり」

「全て徒労に終わります」

さすがに・・ピエールも分かってらっしゃる・・・俺も分かっちゃいるけど

人間ってというのはそう簡単に諦める事ができる動物じゃないんだよ。しばらく俺は無駄な努力を続けていた・・が

突然ある事に気がつく、思わずはっとして天井を見上げ、テーブルに手を付き立ち上がると、目を見開き一言呟いた。

「俺は神だった・・・」

突然の俺の奇妙な発言にピエールがこちらに視線を送る。

「どうされましたか・？」

「いや・・・」

そうだ・・・俺はこの世界を自由に変えることが出来る携帯を持つ神なんだよ！！気まぐれに文字をそこに打てば、それがこの世界に全て反映されるんだ。

気にいらないうら、怒りに任せて、『この街にいる俺、ピエール、アンリ以外のすべての生き物消滅』とでも打てば、ゴーストタウンの出来上がりだ。

俺はそう思い付くと、感情の赴くまま、スボンのポケットに押し込んでいる携帯に手を伸ばしてみたが、途中でその手を引き戻す。

（ちよつと待てよ・・・それは前から分かっていた事じゃないか？
今までその禁手を出来るだけ封印して、旅してきたのは何のためだ・？）

それを箍が外れかけた俺自身に問いかけると、強気に満ちた俺の表情が力なく崩れ落ち

落胆ではないにしろ、脱力感のような物と一緒に席に体をゆっくり落としこむ。

（そうだった・・・俺はこの旅を楽しみ物とするために、敢て携帯

を使う事を制限していたんだ・・・)

もう俺は考える事を辞めていた。旅を楽しむため作ったこの街でこれから起こるであろう

出来事を、成行きに任せ楽しむ事に決めたからだ。

(…携帯はもうちょっと封印しておこう…)

.....

俺は気がつくと、退屈そうに欠伸をしながら、部屋を徘徊するア
ンリの姿を目で追っていた。アンリは後ろ手を組み、栗色の髪を靡
かせながら、靴の先を空に高くあげて
ゆっくり部屋を練り歩く。時折、物珍しい置物に感心が向うと、気
まぐれにそれを手にし

色々な向きに傾けながら穴が開くほどそれを見つめていた。

(アンリ、暇そうだな・・・)

しばらくすると、堅い靴の底で石の地面を蹴る鈍い音が、断続的
に扉の向こうから聞こえてくる。その音は初めは静かのものであっ
たが、やがてその音の主が近づくに連れて

大きなものへと変わり始める。その音が部屋の前で一度大きく波打
ったかと思うと、消えうせ

次の瞬間、短い静寂を破り部屋の扉をノックする音へと変わった。

「みなさん、お食事の用意できました」

その声にアンリが感嘆の声を小さく上げ反応すると、立ち止まり体
を扉のほうにくるっと向け
溢れんばかりの笑みを浮かべて、両手を胸の辺りに組み合わせたま

ま耳を敬てる。

「で……その」

俺はその間の抜けた弱弱しい声を聞いてるうちに、警戒して強張っていた体から力を抜き取っていく。なぜなら、想像していた声と違う事にある意味落胆したからだ。

完全に俺の耳は、あのエンギルの憎たらしい渋い声を捉えていた。

「ええつと……あ……そうだ……」

「これを渡さなきゃな……」

金属が擦れるような音が聞こえ、突然、扉の下部に長方形の手が通るくらいの

空間が空いたかと思うと、部屋の内部に何かが投げ込まれる。

良く見ると、扉の前に敷かれている燃えるような紅い絨毯の上に、丸い輪つかのようなものが、無造作にばら撒かれている。

「えーつと……」

またその声の主が、しどろもどろした泥を這うような口調で言葉を繋いでくる。

「あの……できれば……」

「みなさん、それを首につけてください……」

その言葉に俺達は不意を突かれ、沈黙を余儀なくされる。

しばらく扉の両側を静寂が覆うが、やがてピエールが扉の向こうに

顔を向け、男が聞き取れる必要最小限の声で言葉を投げかける。

「どういう意味でしょうか・・・？」

そのピエールの横顔を上目遣いで見ると、思わず体全体に凍てつくような冷気が

奔る。普段落ち着きはらった能面のような顔を保っているピエールが両眉を上大きくつりあげ鼻に皺を寄せながら、怒りを表情に滲ませていたからだ。

その表情をアンリも目にしたのか、目を丸くして絶句している。

「いや・・・特に・・・」

「ただ・・・エンギルさんが・・・」

「それを着けないうちは部屋を出すなって申されて・・・」

それを聞くや否や更にピエールの表情が険しさを増し、体を小刻みに震わせ始める。

俺はその様子を見て悟る。ピエールの気高い自尊心というものをこの男の言葉

が故意ではないにしろ、大きく傷つけてしまい、眠れる魔神を呼び起こしてしまった事に・・・

「私達を犬か猫と勘違いしてませんか・・・？」

「いえ・・・私は・・・」

その迫力が扉の向こうの男に伝わったのだろうか、元々弱弱い声がさらに小さいものへと変わっていく。

(ひええ・・・ピエール怖いよ・・・)

またかよ？

「分かりました・・・その首輪しなくていいです。」

男はピエールの迫力に折れたのか、力なくそう言った。

「私も・・・強制することは不本意であります・・・」

「すみませんでした・・・」

「鍵開けますよ」

鍵穴に鍵が差し込まれ、向こうから中へ向けて扉が開かれる。

その瞬間、ピエールがその男に襲い掛かる。

音をほとんど漏らさずに、男のみぞおちに一発右拳がめり込む。その男は低い唸り声を上げたかと思うと、その場に倒れこんだ。

「ピエール何を・・・？」

突然のピエールの奇行に戸惑う俺。

アンリだって、体震わせてその場で固まっているよ・・・

「拓様、この場所を出ましょう」

「え・・・？」

ピエールを見ると、さっきまでの鬼のような表情は消えていて、いつもの沈着冷静な能面顔に戻っていた。

「無駄だろう？あの本のおかげで、どうにもならないんですよ」

「私もそう思っていました…」

「しかし、いくらあの本に全てが書かれていようと…」

「それに対策を施すのはエンギル達、そつただの人間なわけです」

「そして人間のする事に、完全というものはないんです」

（…さっきのは怖い顔は芝居だったのか・・・びびったよ・・・）
俺はその言葉に妙に納得してしまい、ピエールの判断に任せることにした。

アンリは倒れた男を、少し複雑な表情を浮かべて見下ろしていたかと思うと

屈んでその男の体を起こし、壁にもたれた状態にして置く。

その普段見せない気遣いのようなものに、違和感を感じてアンリに言葉を投げかける。

「どうした、アンリ？」

「……………」

「この人良く見たら私の叔父さんだ…」

「なに・・・！？」

俺も、そしてピエールもその言葉を聞いて、一瞬体の全ての動きを止め、

啞然とした顔で、男の前に屈むアンリを見下ろす。

「行方不明になってたの・・・」

「なんでこんなところにいるんだろう」

そう言葉を並べるアンリの眼から悲哀に満ちたものさえ感じ取れる。アンリ、どうしたんだ・・・なんでそんな悲しそうな眼を・・・

叔父さんだし当然かな・・・？それにしちゃ・・・感情箆ってるけど・・・ピエールが辺りを警戒しながら見渡すと、アンリに向けて落ち着いた口調で話し始める。

「すまない、アンリ・気絶させただけとは言え、貴方の叔父さんに」

「暴力を振るった事は詫びます」

「しかし、冷たいようですが・・・私たちには時間がありません」

「あなたがここに残りたいのなら、無理に連れて行くことはしません」

「決めるのは貴方です」

「ここに残るか、私たちと着いて来るか、即決してください」

アンリは涙を流していたのか、目を袖で二、三度擦ると立ち上がって一言発した。

「あは、何言ってるの、私があんたたちと別れるって？」

「冗談じゃないわ、誘拐され連れてこられて」

「こんなところで簡単に捨てられたんじゃ」

「私の腹の虫が納まらないわ、まだまだ一緒に遊んでもらうからね」

アンリは何か吹っ切れたような顔で笑うと、奇絶している叔父さんに視線を向けて言った。

「バイバイ…またいつか会おうね…」

俺達は廊下を出来るだけ音を立てずに歩くと、見えない出口の前で立ち止まった。

ピエールが蚊が鳴くような静かな声で俺達に語りかける。

「気をつけてください、この出口の向こうは、十中八九何か罠を張っているでしょう」

「エンギル達が待ち構えているか、それとも…どこかの牢屋に続いているか」

「その答えは分かりません」

「もし後者なら、手のうちようがありませんが、悩んでいても仕方ありません」

「これは賭けです、隙あれば逃げ出す事も可能ですが、無ければまた捕まるだけの事」

「彼らは私たちを救世主と呼びます。逃げ出したからと言って、そんな私たちに危害を加える事は無いと思われます」

「留まる選択肢を好まない以上、低い確率ですが、逃げ切る事に全力を尽くすしかありません」

「行きましょう・私が先に入りますから、続いて来て下さい」

俺達は静かに頷くと、ピエールが先に脚から飛び込んでいった。次にアンリを先に行かせる。また前の四つんばいの姿でお尻からゆっくり入っていく。

そして俺の番・・・心臓の鼓動は早く脈打ち、その音と共に体も揺れているように感じる。

・・・行くぞ!!!

「せいや!」

俺は空手家が正拳突きを繰り出す時の様な声を発して、右足から滑り込ませる。

次の瞬間・・・また前のふわつと浮いたような感覚が襲ったかと思うとその出口の向こう側に移動できたようだ・・・

見ると、ピエールとアンリは既に立ち上がっていた。

しかし・・・ここはどこだ・・・?

どこかの部屋のようだけど、今まで見てきたありふれた部屋と何かが違う。

透明な色をした床や壁が光を反射してか、眩しく輝いていた。これって・・・俺は部屋にある窓というにはおこがましいが、長方形の何も張られていない

空間から外を眺める。眼下には広場のようなものが、見えていた。おい・・・ここって・・・!!!!!!

「ふー・・・やられましたね・・・」

「完全にはめられました・・・」

ピエールが鼻の辺りを右手でつまむかのようにして俯いている・・・アンリはいつもと変わらずに、その塔の物珍しさに目を輝かし見入っていた。

「おいおい、いきなり魔物の塔か・・・」

エンギルやつてくれるぜ・・・

俺達に

やだよ

わかったよ

しなくていいから

でておいで

おっしわかった

おりゃ

ダウン

さてどうしよ

外出たけど

まず外に出ましよう

わたしはかんがえました

いくらあの本が力があつたとしても

その対策をするのはエンギル達

その対策に穴があれば

にげだせるはず

さてつでたぞ

どうする？

出口から出ましよう。

たぶん出口にはエンギルの仲間がまちかまえているでしょう

おいおい

そいつらどうするんだ？

わたしたちでたおしてしまえばいいですよ

そんなばかな

おれたちよわいよ

俺頑張るよ？

やれやれ、どうしてもエンギルは俺達に魔物を倒して欲しいようだ。

ハハハ、しかしまだまだ甘いよヒゲ親父。

俺がそんなに素直に君達のために、魔物に体張って挑むと思っているのかい。

冗談じゃない、甘い甘い甘い！！俺達をクリスタルの塔に送ったから

自然解決してくれるだろうなんて、そんな旨い話はこの世の中にはないんだよ。

俺は床に座り込んで胡坐を書くと、頭を円を描くように捻りながら考え始める。俺の敵は悪魔でエンギル達。

もうここへ来て、魔物の事はどうでもよくなってきている。

エンギル達の鼻を明かす事だけが俺に課せられた命題だ。

そうだ、奴等を仲間にして、エンギルのところに襲撃をかけさせよう。

「ピエール！」

「はい、拓様」

座り込んでいたピエールに声を掛けると、すぐに立ち上がって俺の傍までやって来る。

さすが従者だね。アンリはそれとは対照的に、暇そうに寝そべったまま

床の上で遠心力を利用して転がっている。

ガキみたい……まあいいよ。

「今から下にいる、魔物たちと交渉してくるよ」

「え、それは無茶ですよ」

「相手は話しの通じるような相手じゃないです」

俺も分かっているよ。

「大丈夫、俺に任せてくれないか？」

「何か策がおりなんですね」

「うん、だから少しお前達はここで待っててくれよ」

「え？お一人でいくつもりですか？」

少し驚いた表情でピエールが問いかけてきた。

そりゃ、驚くよな、俺一人とか、どれだけ勇敢なんだよって思うよな。だって俺だし、

俺は柄にもない言葉を続ける。

「うん、まあ大船に乗った気持ちでこの部屋で待っててくれよ」

「分かりました、お待ちしています。ただ、無理はしないでくださいね」

「わかった」

ピエールは俺の自信に満ちた目と、主人の強い口調に押し切られるように

それ以上話すことを止め、納得した素振りを上辺だけ見せていた。心配するな、俺はお前達の前では携帯を使えないので、ここに残ってもらうんだ。

そして封印していた携帯を、あのエンギルをギャフンと言わすためだけに使う事に決めたんだ。そんな会話にやっと好奇心が揺れたのか、アンリが俺に言葉を掛けてくる。

「拓、どっかいくの？」

「ああ、ちよつとな」

「ま、子供はここでゆっくりしててくれよ」

俺は上から見下ろすように、少し冷めた目をアンリに浴びせる。

こんな馬鹿にしたような言葉と蔑んだ目線を向けたのだからアンリは当然怒ってくるものだと思っていた。

しかし、それは間違いだとすぐ気づいた。

立ち上がって、俺に静かに歩み寄ってくる。

そして、突然俺の右腕に両手でしがみ付いてきたかと思うと、額を擦りつけながら

上目遣いで俺を見るといいう、なんとも可愛らしい態度をとってくるじゃないか。

突然のアンリの想定外の行動に俺は度肝を抜かれ、しばらく体を硬直させていた。

「ア、アンリちゃん、どうしたのかな？」

「拓死ぬつもり？」

「え！？」

アンリは俺達のやりとりをしっかり聞いていたようだ。
何か誤解しているな。

さっきの冷めた目を違う意味に解釈したのか。
死に逝く目と受け取ったみたいだ。

しかし、アンリでも間近でしおらしい顔されると可愛いな、
元々土台は良いから、日の光がクリスタルに反射して彼女を照らすと
白い肌が益々輝きを増し、その姿を目にした俺の心臓を高鳴らせる。

「し、死ぬわけないだろ？」

「ほんとに？」

「あ、当たり前だよ」

俺は体を硬直させながら、声を引きつらせ言った。
もう既にアンリを見ることができない。

それくらい緊張してしまっていた。童貞の性だね、
俺は動揺して頭が真白になっていた。

「拓、行くなって決めたのならさっさと行けー！」

ドカ！

突然後ろから罵声を浴びせられると、尻を蹴り飛ばされ、前に体を
弾かれる。

思わずその衝撃に前方の壁に手を突いた。

「いきなり何すっただおめー！」

振り返ると、アンリはさっきまでのシリアスな表情と打って変わって無邪気に笑い、俺に向って舌をだし、左目の下の筋肉を左人差し指で引っ張り

まあ、いわゆる、アツカンバーをしていた。

女って良く分かんねーな、まいった。

「じゃ行ってくる」

俺はいつもと違う精悍な表情を顔に漂わせ、背筋をピンと伸ばして右手を頭につけ、それを彼らに放つように挨拶を交わすと

部屋の外へ颯爽と駆け抜けていった。

今、俺、格好よかったよな？ たぶん。

部屋を出ると、廊下が長く伸びていたが、同時に両脇にも壁が続いている。

魔物たちの姿は見えない、この場所はクリスタルの上層にあるため、奴等はここまで上がってこないようだ。

壁の窪みを見つけると、迷い無くその中へ体を押し込み、ポケットから携帯を取り出した。

魔物たちを俺の仲間、要は手下にして、エンギル達のアジトに突っ込ませる。

一見無謀な上に不可能とさえ思えるこの案も、携帯さえあれば可能だ。

さて、どうしようか？ 俺は取り合えず何にも考えていなかった。

行き当たりばったりが信条の俺には良くあることだ。

既に宿っている力、バリアアタックで奴等を叩きのめし、支配下に置こうかとも

思ったけど、それは時間が掛かる上に、下手をすればピエール達に被害が及ぶ

可能性がある。だから、もっと安全に、且、確実に魔物たちを俺の

ペットにする

方法を考えないと、そうだ、俺に見られた魔物は全て魅了されて戦意を失いペットと化す、これでどうだろうか？でもこれだと、見るたびに

ペットが増産されちまうな。後々面倒なことになってしまいかも、いらなくなったらいつでも捨てれる、オンオフ可にしようか、しかも、俺の目が金色の眼に変わったときだけ使える能力。普段は黒眼だよ。良し纏めよう。

俺は眼の色を自由に金色に変える事ができる、その時に俺が見た魔物は全て忠実なペットとなる。黒目に戻っても其の効果は続くが、いらなくなったペットに俺が蹴りを入れると野性に返る。そんな能力を手に入れた俺。

ちょっと長いけど、これで行こう。

携帯だ。ピピピピっと！

OK！

よし、もう俺無敵モードだよ！
行くぜ！！

やばいよ？

この大きなクリスタルの扉・

俺が身長175だろ、その10倍くらい高さがあるよ。

この大きさからして、扉の向こうにはラクシャーサって言うこの塔の主がいる事は間違いないはずだ。普段の俺なら、この扉を開けるなんて無謀な考えは絶対起こさない。

だけど、俺の後ろには、下りてくる際に金色の眼で仲間を引き入れた数十匹の豚人間が、

規則正しく2列で並んでいる。そいつらに顎で合図を送ると、俺は後ろに下がり

扉の前を覆うように並ばせた。

取り合えず、ラクシャーサはいらない。こいつは邪魔だ。

どうせ馬鹿でかい図体で、大きな椅子に踏ん反り返っているんだろ
うが

小回りの効かない奴は、邪魔なだけだ。

豚人間に一齐に飛び掛らせて、始末してしまおう。

俺は豚人間に合図を送ると大きな扉を開かせる事にした。

真ん中で割れた開閉式の扉。

扉の両側に5匹配置させ、同時に押すように意図を伝えた。

言葉は使わない、全部にいちいち指示する面倒くささがあるからだ。
心で思ったことをテレパシーのようなもので彼らに通すかんじ？

最初に俺が仲間にした豚人間が、階段を下りて欲しいと思っただけ
で、降りていったのを見て、其れができる事に気づいた。

合図や顎での指示は俺の演出だ。その方が格好いい気がしたからだ。
豚人間が一齐に扉に力を与えると、ゆっくりだが、確実に扉が開き
始める。

地面と擦れる大きく鈍い音が、途切れることなく俺の耳を暫く震わ
せていた。

扉が大きく開かれ、内部の様子が視界に飛び込んでくる。

思ったとおり、部屋の奥には玉座がある。

幾つかのクリスタルの太い柱が、扉から玉座までの見えない道を挟むかのように

両側にいくつか建ち並んでいた。

！？

どういうことだ　・？玉座はあるけど、誰も座っていないし、中に豚人間の姿も無い。

それに玉座が小さすぎる。

俺の想像していた奴が座るのなら、もっと大きい物でないと、理屈が通らない。

その予想を覆す部屋の様子に、俺は警戒心を強め先に中へと数名豚人間を歩かせた。

そして、俺を囲むように豚人間を配置して、そいつ等の後をゆっくり付いていく。

なんだよ、いないじゃないか、緊張して損した。

俺は豚人間が接近しすぎて、臭いのと気持ち悪いのに嫌気がさして離れるように指示した。豚人間が俺からゆっくり放射線状に離れていった。

ふー、少しは周りの空気がよくなるぜ。

そう心で思ったのとほぼ同時に、俺は首に何か冷たいものが当てがられる感触を覚える。

気がつくのと、視界を遮るような大きな鎌が眼の前でギラギラと鈍い光を放っていた。

「動くな……」

「少しでも、動けばお前の首は飛ぶ」

「いいか、私の質問に忠実に答えよ……」

大鎌の刃を首に向けられ、後ろを振り向く事ができない。
俺は恐怖というよりは、死を感じていた。
背後にいる魔物？の異様な殺気が俺に全てを諦めさせる。

「お前は何者だ？」

「た、唯の旅人です」

「ここへ何しに来た？」

その質問に俺は言葉が詰まった。
なんて言えればいいんだ…

ここに居る魔物を仲間にして、エンギル倒そうと思ったって言えばいいのか？

「なるほど…」

え、俺まだ何にも言っていないんですが、
そう背後の者が言ったかと思うと、首から鎌が離れていった。
足を震わせながら、その場にゆっくり膝小僧から崩れ落ちる。

「拓君、こちらに来たまえ」

その言葉は部屋に反響しながら俺の耳に届く。
とても落ち着いた、しかし、どこか非情さを漂わす冷たい声。
なんで、俺の名前知ってるんだ？
そんな当たり前の疑問が浮かぶも、取り合えず行くしかない。
踏みとどまれば、殺される。それだけは実感できた。
俺は立ち上がり、音源の方向へと足を進める。

そこは思ったとおり、玉座だった。

豚人間を動かそうとかそういう気持ちすら湧き起こらない。
ただ俺は声の主の前へと行くことしかできなかった。

「はじめましてと言っておこうかな・・・」

「私はこのクリスタルの塔の主、ラクシャーサだ」

その姿を目の辺りにした俺に、より一層の冷たい何かが体を駆け巡る。

黒い擦り切れたフード付きローブの中に、骸骨の顔のようなものが覗いている。

大きな鎌と言い、俺がイメージする死神像とぴったりそのままの姿をしていた。

言葉が出てこない・・・実際死神を目にした時の戦慄は想像以上の物だ。

ぴくりとも動けない。

「君のこの塔でやろうとしていた事は大体分かった・・・」

「ポルク達は後で直してもらうぞ」

ポルク…？ああ、豚人間の正式名称か。しかし、どうやって俺のやるうとしていた事が分かったんだ？

「腑に落ちないって顔だな」

「今お前は、何で俺のやろうとした事が分かったんだって思ってるだろ？」

その通りでございます・・・

「私はお前に触れた時、お前の心の中を読み取っただけだ」

なるほど・・・そういう力をお持ちなんですね。

「お前はこうも思ってるはずだ」

「なぜすぐに殺さないのか？つてな」

いえ、それは思っていないませんでした。てか、殺さないで...

「大丈夫、お前を殺しはしない、お前の仲間もだ」

ほ、本気ですか？助かった、嘘なら泣きますよ、

「俺の標的はエンギル・・・」

俺の仲間・・・ですか？

「厳密に言えば、エンギルの持つ『True Bible』だ」

ローブの中にある骸骨の目の奥に広がる闇の中に、一瞬赤い怪しい光が灯ったように見えた。

更にラクシャーサは言葉は繋ぐ。

「拓君、君と仲間を逃がしてあげよう」

「ただし、私の話を聞いてからだ」

どういう事が理解出来なかった。

しかし、ラクシャーサが俺に向けるものは敵意では無く、かといって友好的なものでも無い。

その不可思議な立場を理解すべく、俺は話を聞いてみることにした。

死神は語るよ？

「話をする前に一つ言っておきたい事がある」

「エンギルは君達に色々話したと思うが」

「あいつの言う事は信じない方がいい」

ラクシャーサの表情から読み取れないが、どことなくさっきまでの殺気のようなものが

薄らいでいて、口調に柔らかさが感じ取れた。

彼はその後、長い時間俺に語り続けた……。

魔法の書は元々優しい魔王の物だったらしい。

それをエンギルがどうやったかは分からないが、魔王城に潜入しまんまと

盗み自分の物としたとか。

「あいつ等はどうしてもない悪党だ……。」

「魔王の書は持ち主の知りたい情報を、触れている手から読み取ると」

「その紙に示す魔力を帯びた書」

「それがどれだけ恐ろしい事が君にも分かるだろう……」

な、なんとなく分かるような。

「拓君、君はなぜここへ来たか分かるか？」

「さあ、来たくて来た訳じゃ」

「成行きかな？」

俺がそう答えると、ラクシャーサが低い声で笑い始める。

「違うな……」

「君はエンギルのシナリオ通りに動いたにすぎない……」

「どういう事？」

多少そういう所もあるけど、俺がラクシャーサに油断しなければ
今頃あいつ等に復讐できてたはず。
そう思うと、ラクシャーサの言葉に違和感を感じて思わず聞いてしまっ
た。

「さつき君から思考を読み取って分かったが」

「君はポルクと私を操り、エンギル達に仕返しをするつもりだっ
たはずだ」

「もし私たちを仲間に取り入れて、奴等のアジトに行ったとして」

「果たしてエンギルに一泡ふかす事ができただろうか……？」

そう俺に話すとラクシャーサが急に立ち上がった。
身を翻すと、そのローブの一部が俺の体をかすめる。

「ついてきなさい……」

静かにそう言うと、ラクシャーサは床を滑るようにして移動し始める。

最初その様子を眺めていたが、すぐに遅れて後を付いていった……。

俺が降りてきた塔の階段を上っていくラクシャーサ。

5階分くらい上っただろうか……。

その階で上るのを止めたかと思うと、細い迷路のような廊下を進んでいく。

なんかここ見覚えあるな…。

これは……。

クリスタルの床から盛り上がるようにして形を成す歪な台。

その台の上には七色に光る球体が浮いていた。

俺は降りてくる途中これを見ていた…。

何だろう？って思いはしたが、豚人間が次から次へと

襲ってくるので、すぐにそれを無視して通り過ぎたが……。

ラクシャーサはその球体の前にやってくると、その動きをやっと止めた。

黒いローブから白い骨で組まれた右手が伸びてきたかと思うと

その手の平を球体に翳す。

すると、左の方から重い引きずるような音が聞こえてくる……。

その音がする方へ視線を送ると、さっきまで平坦な壁だと思っていた所に

縦長の長方形の入口の様なものが突如姿を現した。

俺が楽々入れそうな大きさだ…。

「ここは牢屋だ」

ラクシャーサは静かにそう言うと、中へ入っていく…。

俺は入口の手前で動きを止め、そーっと外から頭を覗きいれ中の様子を確認する。

危険が無さそうなのでゆっくり中へ足を踏み入れた…。

意外と広い。部屋の隅にはクリスタルのベッドがあり、その上に布団まで敷かれていた。

布団の汚れ方や、無造作に折りたたまれた部分を見ると、確かに誰かがここに寝泊り

していたようだ…。

竜の顔をした彫像みたいなものが壁から突き出っていて、その口の部分から絶え間なく水が

床の丸いへこんだ窪みへと流れ落ちていた。

中心部分には水をどこかへ流す穴も空いている。

「やはりいいいな……」

ラクシャーサは俺にその骸骨頭を向けると、顔を近づけてくる。

あまり、近づけないで…。怖いから…。

俺から50cmくらいの位置でその顔を止めると

更に言葉を続ける。

「我々は幸運にもエンギルの仲間を捕獲する事に成功した」

「そしてこの中に幽閉したはずなんだ…」

「しかし、今みるとそいつの姿は影も形も見えない…」

「どうやって逃げたのか？」

「ポルクを大目に警備に当たらせていたはずなのに…」

それってまさか…。

俺はラクシャーサの怖い顔に動揺した視線を向け話を更に聞き続けていた。

「そう、君が降りてくる間にポルクたちを魅了し」

「下に引き連れていったために、ここを警備するものがいなくなり…」

「エンギルが仲間を救い出す事ができたんだ」

「つまり、君はエンギルを手助けしたわけだ…」

まさか、そんな……。奴はそこまで計算に入れていたって事か？いや、そうなる事を予め知っていた…。魔王の書を使って分かっていたんだ…。

てことは…、俺はずーっとあいつ等の手に平のエテ公だったって事か？

「君は奴等に旨く丸めこまれ、奴等のシナリオどおりに動いたにすぎない」

「あいつのこの街での目的はただ一つ、捕らえられていた仲間の救出だった」

まさか…、あいつから聞いた話って全部嘘か…？

捉えられていたこの街の住民は？街から魔物を追い出す計画は？

俺は激しい衝撃が頭を貫き困惑していた。

いや、混乱していると言ってもいいだろう。

ちよつと待てよ、ピエールとアンリは……？

二人の事を思い出し、何か言いようの無い不安がよぎる。

俺はラクシャーサをその場に置き去りにし走り出すと、額に冷たい

汗をかきながら

一心不乱に階段を上っていく。

何か嫌な予感がする……。

必死だよ？

俺は階段を息せき切って駆け上がっていく。

上がってる時間が永久にも感じれるほど、俺の心の中は焦燥感で満たされていた……。

まだか……！まだか、まだか！

あれは……！？

階段上に鷹の形をしたオブジェがクリスタルの台の上に浮き上がっている。

見覚えがある形……。

ここだ……。

その階で上がるのを止め、俺は右の廊下を一直線に走りぬける……

次は左だ……右の壁を足で蹴り、鋭く曲がった。

長いクリスタルの廊下が眩い光を煌かせ暫く続いていたが、やがて、壁の先に明かりが指す場所を視界に捉える。

ここだ……！

早く二人の姿を視界に入れようと、滑るように左足を大きく前に突き出し、体を横向きにして入り口の前に立った。

「ピエール、アンリ……！」

「あ、拓帰ってきた」

「拓様！ お怪我はありませんか！？」

ピエール、アンリ……いた！　いたよ！良かった！　二人の元気な姿を目にしたとたん、寒気のような喜びが体を走り抜ける。

それとほぼ同時に目から自然と涙があふれ出てきた。

心の底から湧き立つような喜びと安堵する心、悲壮な気持ちの反動のようなものが、涙を止め処なく外へと押し出す。

曖昧な視界に映る二人のぼやけた姿を頼りに、3歩ほど歩くとその場で佇んだ。

涙で前が見えない……。

「ほら、ハンカチ！」

アンリの高い声が聞こえたかと思うと、右手に白い布があてがられる感触を覚える。

それを無造作に掴むと目に押し当てた。

「えぐ、うぐ、俺お前たちがもしかしたら、連れ去れたり、殺されたりしてないかって」

「心配で心配で……」

「だけど、大丈夫だった……」

「ほら、拓、泣かないの」

その優しい綺麗な声と同時に、俺のお腹のあたりが包み込むように抱き込まれる。

とても、か細く、そして柔らかい腕の感触……。

「アンリ？」

涙が多少ふき取られ視界がはつきりしてくると、視線をお腹の辺りに落としてみる。

……アンリが目を瞑り俺の体に、小さな体を押し付けるようにしてハグしていた。

普段の俺なら、こんな状況だと慌てふためいて、体を強張らせて緊張するだろうけど……

今日はそれをする気が起きない……このままずっとこうしていたい、自然に任せて……。

……俺はその柔らかい体がだんだんとおしくなると、抱きしめたい衝動に駆られる。

どさくさ紛れて抱いちまうか……怒らないよね？アンリ

両手を彼女の背中に回してみた。

すると、当然のごとく……

「調子乗るなよ！」

腹に強烈な右ボディ炸裂……やはり無理だったか、ごめんなさい

……

俺は体を九の字に曲げ腰を落とした。

「拓様、本当にお体大丈夫ですか？」

「平気平気！」

アンリのボディ効いたけど、それ以外は平気さ……。

俺の言葉を聞くと、ピエールは細い眼に優しさを滲ませ口元を綻

ばせる。

そう言えば……

「ピエール、この部屋にエンギル達来なかったか？」

「来ましたよ」

ピエールはあっけなく平然と答えた。

「何もされなかったか？」

「いえ、特に」

「彼等は魔物を倒しに行くと言って、部屋を出て行きました」

「あ、そう言えば……」

ピエールが何かを思い出したのか、顔を一瞬上に向けると、懐から白い紙のようなものを取り出した。

「これ、拓様に渡してくれと言われました」

「俺に？」

何だろう……？恋文か？

白い封筒の開け口に赤いハートを貫く弓を模ったシールが張られていた。

なんちゅう、趣味の悪い……。

俺はシールを剥がし、手紙を開けて中のものを取り出す。
折りたたまれた便箋が2枚入っていた。
なにになに……？

『Dear God、もとい宅君へ』

なんだ、この出だしは……？

『君は今頃、仲間と再会し笑顔を浮かべているだろうね』

『急いで階段を駆け上がってきて、汗びっしょりだろう』

『しかし、君が心配するような事は起きないよ』

『ピエール君も、アンリちゃんにも手を出すわけないさ』

『生憎俺は、この世界の神を怒らせるほど馬鹿じゃないのでね……』

『まあ、お互い神のようなもんだし、仲よくやろうや！』

『ブラボー男より』

く、ふ……ははは！ この野郎！

本等にふざけた奴だ！

でも、お前のした事は正しいよ。

もし……二人に何かあったら、『エンギル一味死す』とか『魔王の書消滅』って怒りに任せて、携帯に打ってただろうから……。

まあ、魔王の書は危険だから消しておきたいけど、一応残しておくよ。

俺の物語を楽しむためにな。

どうせ、俺がそう決めるのも、奴は魔王の書を見て知ってるんだろうけど……。

……それにしても、携帯の存在を知りながら、なぜ奪おうとしなかったんだろうな？

まあいつか……二人は無事なんだし。

あれ？もう一枚の方の紙に地図……？

『追伸、アンリちゃんに魔法を教えられなかった事が残念だ』

『ここから南東20kmの場所に魔法都市セルギランダがあるから』

『そこへ連れて行ってあげたまえ』

魔法都市ね、まあアンリ喜ぶわな。

しかし、悪党の癖に親切な野郎だな……これも畏ってこと無いだろうな？

まあ行くかどうかは、後で決めるか。

「ピエール、アンリ、下行こう！」

「はい」

そうそう、二人をラクシャーサに会わせておこう。

死神と再会したよ？

「ほら、ここだ」

俺はピエールとアンリをラクシャーサのいる部屋まで連れてきた。途中、アンリは階段のあまりの長さに不満不平たらたらずで、先を走る俺に相変わらずの罵倒を浴びせてきていたが、「後で、魔法都市連れて行ってやるから」と告げると、急に機嫌を取り戻し静かについてきてくれた。

ああでも言わないと、ずっと文句垂れてるだろうから……
言ってしまったから行かないといけないかな……やれやれ。
ピエールはとにかく無駄な事を一切喋らずに、ついてきてくれる
んだけどね……

「ただいま戻りました〜！」

ラクシャーサに何も告げず放ったらかして部屋を出たのだから、
たぶん怒ってるだろうな？って思いで部屋に入る。

なんといっても彼は魔物。

得体がしれない上に顔も怖い、姿も死神に瓜二つ。

丁寧な言葉と腰を屈めた低姿勢で、ご機嫌伺いをする。

「やあ、どうだった……？」

あれ？ 思わぬ反応。

彼の姿形からはとても想像できないような、透き通るような声。
心なしが、最初に会ったときより口調が軽い気がした。

機嫌は……良さそう？

しかし、何がどうだった？って言うてるんだろ……

「何のことです？」

「君の仲間の事だよ」

む、俺が何しに言ったか分かっているようだ。

ああ、俺に最初触った時に仲間の映像も見たんだろうな。

で、俺が急いで上がっていったから……

「はい、無事であります」

「ほら、入っておいで」

ドアの向こうに取りあえず待つて貰った、ピエールとアンリに声を掛ける。

二人は俺の声に反応して、ゆっくり中へ入ってきた。

ラクシャーサの姿を見た時の反応は。それぞれ違っていた。

ピエールはほんの少し息を吸いこんで、体を3度（傾斜）ほど後ろに傾けたくらいなのに対し、アンリはあからさまに怯えていた。

相当怖かったんだろう、小さく悲鳴を上げると、ピエールの背中にしがみ付き震えていた。

「ははは、私の姿が相当怖いんだろうね」

アンリの怯えた様子を目にして、とてもフレンドリーな感想を述べるラクシャーサ。

案外いい人？ いや、いい魔物？

「みんなこっちへおいで」

玉座に座ったまま、俺達に声をかけ呼び寄せる。

ここは彼の言うとおりに行くしかない。

拒否したら怖いしね。

俺を先頭に彼の近くまで、歩み寄る。

ピエールにしがみ付きながら、及び腰で歩くアンリ。

「拓君、君は仲間に事の次第を話したのかね？」

「いや、まだです」

そっぴや、何にも話してないな。

「一応話しておいたほうが良くないか？」

確かに……

仕方ないので、ラクシャーサの前で長い長い話をピエールとアンリに話してみる。

要点をまとめて話すのって結構難しい。

「ま、そういうことだ」

「俺達は嵌められたんだよ」

「なるほど」

拙い説明で二人に大体の事を話し終えた。

もちろん、携帯を使った事や、その存在、それによって得た特技は隠してだけど。

取りあえず、俺の巧みな話術で魔物を説得した事にした。

もちろん、豚人間には説得が通じない事を前提に、話の分かる魔

物ラクシャーサの所まで、豚人間に追われながら、勇敢、且、幸運にも辿りつく俺の武勇伝つきで……

「エンギル達の事は分かりましたが」

「それにしても拓様、素晴らしいです」

「感動しました」

「拓、すごいね、見直したよ」

俺を褒め称える二人。

殆ど口から出任せだけど、悪い気はしないな。

俺の左腕に両手を絡ませて、その場で笑顔で撥ねるアンリ。だから胸が当たってるって……大きいよな、アンリの胸。

「それほどでも無いよ……」

あんまり、浮かれて話してたもので、ラクシャーサの存在を忘れていた。

適当な事言ってるから、気分害してないかな？

そう思い軽口を止めると、彼の方へそーっと視線を向けた。

まあ、黒いローブの中の骸骨顔から分かる訳ないんだけど。

彼をいつまでも蚊帳の外に置いているのも悪いんで、いや怖いんで話を振ってみる事にした。

「ところで、ラクシャーサ様は何故この町を支配されたんですか？

」

俺はエンギルの話を鵜呑みにして聞いてたから、頭の嘘話の修正

を図るため

彼にその質問を投げかけてみた。
本当のところを話してくれるに違いない。

「支配したという表現はどうかね」

「元々ここは魔物と人間達が共に暮らす街だった」

「しかし、引越す者が後を絶たないでね」

「ポルクがどうも民衆に嫌われていたらしい」

分かる気がする……顔は怖いし、臭いし、頭悪いし、あんなのに
うろつろされちゃ～ね。

「だから、いつの間にか人間達はこの街からいなくなり、残ったの
はクリスタルの塔に住む私達だけになったんだよ」

表情からは読み取れないが、声の調子から落胆が窺えた。
苦労してるんだね、あなたも……

あ、そうだ、もう一つ聞いてみるかな。

「あ、そうそう、エンギルはどこいったんですかね？ まだアジト
にいるとか？」

「それは無いだろう、アイツ等は今頃どこかで……」

うわ、声が低くなった。

たぶん、機嫌害したよ、よっぽどエンギル嫌いなんだな。
俺はここで話を止める事にした。

怖いから……彼の心の痛みに触れてはいけない、触らぬ神に祟り
なして言うからね。

でも……本当はもう一つ、物凄く重要な事を聞いておきたい気
もしたが……

「ラクシャーサ？ ちょっと聞いてもいい？」

無口を決め込もうとした矢先、アンリがラクシャーサに向って軽
口を叩き始めた。

どうやら、俺と淡々と会話を交わすラクシャーサを見ていて、思
ったより良い魔物だと判断したんだろうけど……
いきなり呼び捨てかい……

俺は顔に手をあて、指の間から動向を見守る。

お願い、変な事言わないで……

「なんだい？ えーっと名前は」

「アンリだよ」

「アンリちゃんか、何でも言ってごらん」

ラクシャーサは彼女に気さくに声を掛けた。

これが人間の姿なら、本当に気のいい親父ですむんだけどな……

「あなたはエンギルの仲間の事に詳しいですか？」

「エンギルの仲間か……」

途端に言葉尻に暗雲が立ち込めるラクシャーサ。
余計な事を……。

「知ってるよ、奴等の事は調査済みだ」

「もちろん仲間の事も良く知っている」

ラクシャーサがそう言うと、アンリは少し俯いて間を開ける。
そしてまた彼に視線を戻すと、堰を切ったかのように口早に言葉を奔らせた。

「私の叔父ムールの事を教えてください、お願いします」

「ムール！？ 君の叔父さんなのか！？」

その口調からは驚きと動揺が明らかに感じ取れた。
アンリの叔父ってあの時の……

すらすらいくよう？

「エンギルを頭に掲げる赤いサソリ」

「その構成メンバーは7人」

「エンギル、タバスコ、ハン、コーネル、ムール、キル、ミント」

「彼等は各々特殊な能力を持ち合わせている」

「その中でも、君の叔父ムールは、亜空間魔法を得意とする」

それを聞いたアンリが、聞きなれない言葉についてラクシャーサに問いかける。

「亜空間魔法ってなんですか？」

「亜空間魔法とは、この世界を覆う空間を3次元の空間だとすると」

「その3次元の空間に4次元もしくは、5次元の空間を重ねて作り出す事が出来る高等魔法」

「要は普通なら地面を掘ったり、地表に建物をたてたりして居住空間というものが生まれるわけだが、亜空間魔法を使えば、どんな場所にも独立した亜空間を作り出し、その中に部屋を作ったり、そこで生活したりできるわけだ」

「エンギルがそんな便利な魔法を使う彼を、放っておくわけはない」

「彼を都合よく使ったため、口八丁で仲間に引き入れた」

「ムールは元々流されやすい性格をしてるので、エンギルが仲間に引き入れるのは容易かっただろうな」

「はるなるほど」

俺もなんとなく凄い能力である事が分かったので、空気が抜けたような声を発しながら、軽く頷いた。

アンリちゃん、さすがに今は分かったよな？

「なるほど！」

ほんとに分かってんのか？

アンリは顔に明かりが灯ったように笑顔さえ浮かべていた。

さっきのマジ顔はどこへ言ったんだ？

「まあ、私がムールについて知ってる事はそれだけだ」

長い話を終えると、ラクシャーサは玉座で突発的病気で生き絶え放置された、偉い人の白骨化死体みたいに動かなくなった。

「分かりました、ありがと、ラクシャーサ」

アンリはラクシャーサに体を向けて、スカートの両端を軽く持ち上げ会釈をした。

「ハハハ、面白い子だ」

ラクシャーサはご機嫌はいいようだ。

さうと、大体話も聞き終わつたし、どうしよっかなう？
ピエールさんに聞いてみよう。

「ピエールこの後どうする？」

「はー、特に何も浮びませんね」

いやそこを頭を捻らせ考えるのが、従者の君の仕事じゃないのかい。

俺がピエールに多少がっかりした視線を浴びせて、軽くため息をついてると、アンリが何か思い出したみたいに俺に目を輝かせながら近付いてくる。

やっぱり来たかー！　どんとこい！

「よし、拓、魔法都市いこうー！」

「へい……」

君は本当に魔法が好きだね。

「私も亜空間魔法覚えるよ」

「な！？」

どういうつもりだ、叔父さんのパクリかい？
もうちよつと独創的なこと覚えようぜ。

「ほらいくよー」

「ちょ、待てったら、服ひっぱるなよ」

「うわ、わ、ピエールも来い」

「はい、拓様」

「あ、ラクシャーサ様また〜いつか〜」

何か分からないが、アンリが勢い良く俺の服を引っ張り、外へ駆け出そうとするもんだから、成行きでクリスタルの塔から、立ち去る事になった。

ピエールも俺の指示でちゃんと後からついてくる。

ラクシャーサにお礼も挨拶もきっちり出来ないまま、クリスタルの塔を滑るように降り、外へ躍り出て、水の都を一直線に出口に向って三人で走り抜けていった。

「なあ、お前たち」

俺は長い距離を止まらず走り続けたせいで、息がきれまくりで、その場で地面に四つんばいになって、呼吸を整えていた。

多少楽になつてくると、ある事が頭に浮んで立ち上がり、二人にその事を聞いてみる。

「馬車どこやったん？」

いや、出口まで来たのは良いけど、移動手段の馬車はどうなったんだ？

「あ、そう言えば、あの馬車どうなったんでしょね」

「ラクシャーサの魔物に捕らえられたので、やっぱり彼の所にあるのでしょうか？」

何〜？ この距離をまた引き返せというのか〜？

俺はもう歩けなかった、いや歩きたくないというのが正解か。

その場で尻をついて、腕を組み座り込む。

そんなふてくされた顔をした俺をよそに、ピエールが懷から金色の笛を出したかと思うと

街の方向に向き直り、大きく息を吸って、笛を咥えて思いっきり息を吐いた。

ガラスを鍵爪でひつかいたような嫌な音が俺達を中心に、周りへと波紋のように広がっていく。

ピエールの最大肺活量分の息が途切れたのか、笛の音も終わりに近付くにつれて、か細くなつて最後には消えた。

街の奥の方を細い眼を更に細くして眺めるピエール。

「着ました、どうやら無事のようにです」

「へ？ 何が？ え、あれは……」

街の石畳みの地面を馬の蹄鉄が叩く音が、遠くの方から俺達の耳に届く。

しばらくすると、蹄鉄の音だけではなく、馬の嘶く声とぼろい木の馬車を引張る猛々しい二頭の白い馬の姿が視界に飛び込んできた。

「おー、リリー、ポン、無事だったのね、良かった」

アンリは手を挙げその場で撥ねながら、馬をこちらに迎え入れようとしていた。

しかし、センスねーな、リリーとポンって……

馬は興奮しているのか、馬車を引つ張りながら、スピードを弱める事無く、にこちらへ突進してくる。

ちよ、ちよっと、止まらないよ、どうすんの！

「任せてください、拓様」

「少し離れててください」

「10、9、8、7……」

ピエールは馬車の進路外へ俺とアンリに離れるように手を突き出した。

それに従い俺とアンリが、門の影に素早く隠れる。

突進してくる馬車に、微動だにせず真正面に立ち尽くすピエール。良く分からないが、馬車を見ながら、カウントダウンをしていた。馬車はもう目の前だ。

「ピエール避ける！」

思わずピエールに俺は叫んだ。

「0！ ハイヤー！」

変わった掛け声と共にピエールが半歩横に体をずらしたかと思うと、馬車が通り過ぎる直前で体を横にして馬車の側面に飛びついた。側面の布をしがみ付いて、馬車の窓から必死に中へ入り込もうとしている。

馬はそんな後方の様子を気にも留めず荒野へと荒々しく駆け抜けていく。

「ああ、ピエール〜！」

「うわー、やる〜」

ピエールと共に荒野の彼方へ消えていこうとする馬車の後姿を、しばらく、はらはらしながら眺めていたが、やがて視界から完全に消えうせてしまう。

アンリはあの状況のピエールに何か期待してるんだろうか。さっきのやる〜は何なの？

「ん？ あれは」

俺は呆然と馬車が消えた先を、しばらくその場で佇んで見ていたが、やがて消えた先から馬車がおっとりした速度で引き返してくるじゃないか。

「ほらね、帰って来た」

アンリが分かったたよと言わんばかりに、俺に得意げな目を向けて言った。

「拓様〜、さあ行きましょう」

馬車の座席で馬の手綱を握って、額に汗を滲ませながらクールな微笑みを浮かべるあの男が、俺達に手を振っている。

俺はその笑顔に吸い込まれるように、もう何も言わずに、彼の元へ自然と駆けていった。

すらすらいくよ？（後書き）

ちよつと……雑かもしれない。

一旦物語は終了だよ？

俺は馬車に乗りながら、物思いに耽っていた。

一応ややこしい一件が落ち着いたものの、何か俺はこの世界を気に入りつつも、現実の世界の事が恋しくなり始めていた。

ホームシックとでもいうのだろうか？

相変わらず、後ろでマイペースに穏やかな顔で鼻歌を歌うアンリ。隣で能面顔で手綱を持つピエール。

彼等との旅は楽しい。

しかし、俺は現実の世界に帰りたくなっていた。

「ピエール、アンリ」

特に言うことも無いが、二人の名前を読んでみる。

「どうされましたか？」

「いや……」

うーん、どーしょかなー。

一時的にでも現実世界に帰ろうかな？

でも、俺が急にいなくなったら、二人はどうなるんだろ？ どう思うだろ？

「ピエール、一つ聞いていいかい？」

「はい、何でしょう？」

「もし俺が急に煙のように消えたら、どうする？」

ピエールは俺に質問に前を向いたまま押し黙る。

「えーっと、そうですね……」

「どうするかは分かりませんが、困りますね」

「主人を無くした従者に価値があるんでしょうか？」

むう、ピエールは本当に従者の中の従者だな。

俺から解放された後の人生を考える事はしないんだろうか。
よし、次はアンリだ。

「アンリちゃん」

「なに？ 拓」

「もし俺が急にどこかへ消えたら、どう思いますか？」

「別に？」

即答かい！ とぼけた顔で残酷な言葉を放つアンリ。

俺ってアンリにとってそんなものなのか……

その場で体を丸くし、頭を下げ落ち込んでみる。

そんな俺の様子を見て心が動いたのか

「でもさ、拓いなくなったら寂しいよね」

お、ちょっとは人間らしい心があったんだね

「てか、何で急にそんな事言うの?」

「別に?」

さっきの仕返しだとばかりに、アンリと同じ言葉を返した。

「ちょっと」

アンリの声がさっきより俺に近い位置から聞こえてくる。

「どうしたの?」

気になり始めたかい?

よし、ここは焦らせよう。

わざと深刻な表情を浮かべ、黙ったまま俯いてみる。

「なんか言つてよ」

「まさか……」

ん?

「私をこの辺に捨てて、二人でどっか行く気じゃないでしょうね!」

どうしてそうなる?

「そんな事するわけないじゃないか」

棒読みで答えてみた。

「ちょっとー何たくらんでいるの!」

「いてて」

アンリが後ろから俺の髪を掴んで、上に引つ張りまくってきた。

「よせつてば、何にも企んでなんかいないつてば」

「そう? ならいい」

俺の言葉を聞いて安心したのか、声の調子を穏やかに変え、後部座席に尻からどかっと座り込む。

アンリつて単純だな……

さーつてつとピエールにまた振ってみるか。

「ピエール」

「はい?」

「君は俺が思った以上の素晴らしい従者だよ」

「へ? いきなりなんですか?」

別れの挨拶つてわけじゃないけど、二人に一通り言いたいことを言った。

俺はこの後どうするか頭の中で固まりつつあった。

そうこの携帯には重要な機能がついていた。

俺が物語の途中で現実世界に帰りたくなつた時に、物語の時間を止めセーブする機能。

よく家庭用ゲームのRPG、ロールプレイングゲームであるような、ある地点までの出来事を記憶させておく事ができ、気が向いたら、またセーブ地点から始めることが出来る、そんな素晴らしい機能。

そう、俺は今すぐそれを発動しようと、後部座席に移りアンリの横に体を移動させた。

そして、背中をアンリに向け、ピエールが後ろを向いていない事を確認すると……

着ている服の裏にあるポケットにしまいこまれていた、伝家の宝刀『携帯』を素早くだし、それを体で隠すようにして胸の辺りで持つと、一時停止&saveと書かれたボタンを押した。

この世界の全ての時間が完全に止まる。

馬車も、ピエールも、アンリも、馬も、みんな全部動きを止め、俺の周りを静寂が包む。

俺はその止まった世界で唯一動ける存在であり、神であつた。全く動かなくなつたピエールとアンリの姿を見ながら、色々な思い出が浮んでは消えていく。

「お前たち最高だよ」

「また戻ってきたら、一緒に旅に出よう」

「その時まで……」

「さよなら……」

俺は涙を浮かべながら、一時の別れを告げ、携帯の『Return』のボタンを押した。

体が光に包まれ、俺の体は浮かび上がり、馬車の天井をすり抜け、上空の丸い白い光へと吸い込まれていく。

「楽しかったよーまたいつか会おう！」

大きな声で眼下に見える馬車に大声で叫んだ。

そして 俺は現実世界へと戻ってきた。

「母ちゃん、晩御飯何？」

おお、久しぶりに見る母上、会いたかったよ。

「ああ？ それしか言えんのか馬鹿たれ」

「イテ……」

時的にF I Nです。

一旦物語は終了だよ？（後書き）

一旦主人公は現実世界へ帰り、話は中断されました。

また、彼が気が向いた時、物語は紡がれる事になるはずです。その時までまた！

***長い間「俺的ファンタジーに俺を送り込む話。」読んで頂いてありがとうございました。

また、日を置いていつか続きを書こうと思います。

その時宜しければ覗いてやってください。拓も喜びますので^^*

天空編 再び新たな妄想世界へ。(前書き)

えゝ妄想再開、それだけです。

天空編 再び新たな妄想世界へ。

やあ、拓です、お久し振り。

何かこう平凡な毎日もいいもので、TV見たり、飼い猫のクロとじゃれあったり、漫画買いに行ったり、ゴロゴロしてました。

ピエール達がいる世界はまだちゃんと残っていますし、いつか帰ろうとは思ってるんだけど、まだいいかなって思ってた、でも、暇持て余してるんで、そろそろ自分の作った世界で遊びたい気持ちも湧いて来てて、今思案中なんだよ。

この間の世界はなんていうのか、西洋的な世界観だったんだけど、広すぎたね！

もうちょつと、狭い世界、例えば、映画の一コマのような場所に俺が潜入するって言うのも悪くないかなって思ってた、今考えています。

なんかないかな？ ……………。

あ、深く考えるのやめた。簡単に実験的に入ってみよう。

そうだな、まず、俺って女いないよな。

女にもてまくりたい。そうだ、俺が複数の女にもてる話を作ろう。で、舞台は？ うーん、俺が世界観狭いから、悩む所だな。異世界？ うーん、でも魔法とか剣とか飽きたよな……、ん、変わったのにしよう。

例えば、天空に浮ぶ島に街が一つあります。そこには複雑な悩みを持った人が集まっています。

俺はそいつらの悩みを聞き解決して金もらう事を生業としています。

まあ、なんていうの、必殺仕事人？ 違うな。まあ、便利屋だ。

何でも良い、そんな人。

そんな俺には女二人にもてています。助手もしてくれます。

よしよし、こんな感じで。

後はな、その島の雰囲気は現代っぽくしょうか。島国みたいにしょうか。

現代なんだけど、ラフな世界観？ なんでもありだね。そういつたかんじ。

ま、そういうことで行ってみようか。はい、座布団の下に次元ホール空きます。

空いた！ おういえええい！ スポ！ ハイ来てしまいました。どこかの公園でしょうか。芝生の上に座っています。青い空白い雲。

公園じゃないな、どこかの広場だな。周り木に覆われて何にもないや。

女は？ 女？

「どうした？ 拓坊」

「お、お前は誰？」

「寝ぼけてるのか？ ミルフィだよ」

前だけ見てたけど、後ろに女が立っていました。

ミルフィだって。年は同じくらいだろうか？ つまり16。

ボーイッシュな頭って言うのかな、短く纏まった橙色の髪に少し太い眉、美人っていうよりは、可愛いに入るのかな。でもどこか愛嬌のある顔してるな。

濃いピンクの半ズボン？ 淵に白い線が入ってて、ズボンよりは薄いピンクの半そで。

いや、服とか知らないから、そんなかんじ。赤い小さなリュックしょってるよ。

まあ、とりあえず、この辺で外見説明終わりで、スキんシップはかろう。

俺の女って設定だしね。

「ミルフィ、愛してるよ」

いきなりガバッと、両手を広げて彼女に抱きつく。

「愛してるよ、あたしも！」

おお、素直にハグにハグを仕返してくれる。

すごいよ、なんかぞくぞくする。胸があたってる！

今すごい抱き合っています。橙色の髪の毛の頭に上顎置いています。ちよつと俺より背が低いな。

しかし何か俺とてつもない事してるよな、俺の女設定で、従順だと大胆になっちゃう。あれ、何か後ろに人影……

「ミルフィだけずるい……」

悦に浸って鼻を伸ばしていると、後ろから低い女の子の声が。

俺はミルフィに抱きつきながら、首だけ声のするほうへ捻つてみた。

すると、もう一人女の子が立っていたんだ。

薄青いスカートに肩から提げた淵にひらひらがついた白いエプロン？ 赤い淵のメガネかけてるよ、しかも美人で大人しそうだ。

清楚っていうんだろうか。メイドって呼ばれるに近い格好？

右手に何かの本持っています。

「ごめんよ、サナ」

ミルフィはハグする両手を下げると、俺の胸の部分に手を持ってきて、一時的に離れたいのか押してくる。

サナって子に気使ってるのかな？

よし、抱きつき対象変更！花から花へ！

「サナ~~~~~！」

飛びつきハグ、ミルフィーから手を離して、向き直り、サナに浮かれた顔で目一杯手を広げて抱きつこうとしたが

「ぐえ……」

強烈な本の角の一撃が、俺の顔面をヒットする。

思わず脳天くらりときて、後ろに崩れ落ちた。

だが、頭を打ちつける前にミルフィーが柔らかく背中を支えてくれたようだ。

「拓、もうちょっと優しく……優しくお願いします。」

頬に本の角が当たったおかげで、鼻血ブーになっていなかったの
で、取りあえず大騒ぎしなくて済んでいた。鼻血出たら、さすが
に大慌てしてたけど……

そんな俺に何事も無かったように、顔を赤らめ目を閉じたまま、
サナは両手を開いた状態で静かに俺のハグを待っているかのようだ。
うーん、乱暴なのは嫌だったタイプだな。じゃあ、紳士的に。

「ごめんよ、サナ」

ちょっと真面目な顔を作り、彼女に体を寄り添わせ、両手を背中
にそっと巻きつけて、彼女の背中の中で後ろで手を絡める。

えーっと、ちょっとまって。これなんの恋愛物語だよ！

彼女の頭の髪からとってもいい匂いがしたんだ。

だから、何の話だよ。

そう、俺はこんな事をしに来た訳じゃ……いやしにきたのか？
恍惚に浸ったサナの顔を見つめながら、そつと体を離していく。
このまま抱きついたままで、いちゃいちゃしていてもいいんだけど、話が進まなさそうなので、いちゃいちゃを断腸の思いでやめると、

「さてと、俺達これからどうするよ？」

後ろを振り向くと、ミルフィーが肩を下げたまま、こちらに目を細めたゴリラみたいな顔でウツホウツホとか今にも言いそうな雰囲気
で俺とサナを、睨んでいる？ 嫉妬って奴か？

「拓……前も言ったけどさ、二人と付き合ってるんだし、愛情表現は均等にしろよ！」

彼女は人差し指を向けて、腰を後ろに突き出し前屈みぎみに、ちよつと膨れた顔で俺に釘を刺した。

「ま、まあ、気をつけるよ」

はあ、もてたことのない俺が、こんな……いきなりもう未知な体験尽くしで、ドキドキしっぱなしです。

#

俺達はその芝生の先を、歩いていると、少し傾斜のある横道に入っていく。

実はさっきいた場所はこの天空の島において、かなりの高所にあるわけで、今下りていく細い道からは、左にある丸太で出来た柵越しに、大きな街を見下ろせる。

この街が今回の物語のメインになるようだ。

街の真ん中に何か背の高い建物があって、ありや高層ビルかな？そのまわりに、街がごちゃごちゃあるかんじだね。案外現代風な家が軒を連ねているようだ。

そんな風景を俯瞰しながら、細い道で女の子に挟まれ、二人に両手をそれぞれ抱え込まれ、歩く俺ってば、幸せというか、これはもうハーレムだね！

この前の世界とはえらい境遇の違いだ。

しかし、そんな幸せが続くかと思われた矢先

下っていく細い道の先に大きな茶褐色の固まりが、こちらへ上がってくるのが見えたんだ。

ドドドドドドー……！

「おい、あれ何なの？」

「まゝた、きやがった、熊五郎の奴！」

ミルフィーが頬に手をあて目を眇め、呆れた様なため息をついた。サナは俺の右手に左手を絡めたまま、その熊五郎を全く気にしない様子で、右手にもつ黒い本を読みながら歩いている。

「おい、何か凄い勢いで上がってくるぞ！」

この状況で俺が、余裕こけるわけも無く、慌てて二人の腕をふりほどいて、逃げようとしたんだけど、がっしり掴まれて動けないんだよ。力あるよな二人。

いや、そんな事に感心してる場合じゃねーよ！

「逃げようぜ！！」

「ふあゝ、あんで？」

ミルフィはすつとぼけた顔を向けて、何か煎餅のようなものをかじったまま言った。

「何でつて、こんな細い道で、あんな凶暴そうな熊が……ほらほらほらほら！」

もうその距離10Mも無かった。熊はテリトリーを侵された小熊連れの母親熊みたいに怒りを顕にして、低い唸り声をあげ、息を荒立たせながら、黒い剛毛に覆われた大きな体を、丈夫そうな太い4本足を使って前へ前へと、つまり俺達に向かって突進してきているんだ。

「間にあわねえ！」

熊が大口開けて両手を高く掲げながら、目の前3m付近に踏み込んできた時、俺は諦めたね。携帯はあるけど、そんなのしてる暇なかったし、前の世界で使っていたバリアはリセットされて使えないしで、死を覚悟して胸元で手を合わせてたさ。

でもなんか、目を閉じてただけど、足に触れる地面の感触がふつと無くなり、体中を寒々とした何かが駆け抜けるような浮遊感が襲ってきて、その後また足が地についた気がしたんだ。

「拓、いつまで目閉じてるんだよ」

「拓……もつとしつかり……」

俺がその場にしゃがみこんで、両手を頭に当てて怯えていると、二人の声が上から聞こえてくる。

恐る恐る目を開けてそちらに目をやると、少し情けないものを見るような目で、上から二人に見下ろされてた。

しかも、今いる場所が、さっきいた場所より、更に細い道の先にいるようで、いつの間にか熊をやり過ごしているらしく、一体どうなったんだってかんじだ。

取りあえず経緯を聞いてみようと、振るえは止まっていなかったが、立ち上がってみた。

「く、熊は……？」

震える声でミルフィに熊五郎のその後を聞いてみた。

「ん？ ジャンプして飛び越えたら、上の方あがって行っただよ」

「じゃ、ジャンプって」

「拓を真ん中にしたまま、三人で仲よくジャンプしたじゃん」

ミルフィが風で靡く橙色の髪を、右手で掻き分けながら、少し冷めた目で俺に面倒くさそうに語った。

「拓……、どうしたの？ 昔は確かに凄い怖がってたけど、最近慣れてきたって言ってたでしょ、体調でも悪いの？」

サナが俺に心配そうな目を向けて、額に右手を当ててくる。

熱なんてないよ！ 俺は強くは無いけど、簡単に熱を出すほど、

ひ弱でもないんだ。

ただ、怖かったんだよ！　ここきたばかりで、いきなり大きな熊に襲われて、普通びびるって！

うーん、何か微妙に俺はここでいた事になっていて、慣れた事になってるらしく、時間軸がずれてるようだな。

まあ、多少ずれてても、すぐに進歩するような男ではないのが俺だから、すぐ追いつけるだろうな。その辺は誤差の範囲って事で、気にしないで置こう。

それにしても、さっきのジャンプ？　といい、それに腕を抱える力といい、この子達強いんじゃない？　いちやつくのもいいけど、怒らせないようにしないと怖いかも？

天空編、全く分かんないよ？

細い道は白いコンクリートのようなもので舗装されていて、それが45度くらいの傾斜を伴って、ずーっと下まで一直線に伸びていた。

たぶん前転したら、そのままコロコロと下まで転がっていくだろう。

しかしもう、それも終わりのようだ、左に針葉樹のような木が鬱蒼と生え茂った森が見えてきて、前方にも大きな木々が連なる。

どうやら、さっき居た場所は大きな岩山の天辺を平坦にして切り開いた場所で、その岩山は小さな森の中にぼつんとあるようだ。細い道は岩肌を削って作ったんだろう。

下まで降りてくると細い道の先が左に湾曲して、少し広めの白い道に繋がっていた。

両側に針葉樹のような高い木々が寄り添い、その先に街のようなものが視界に入る。

「さて、この後どうするの？」

街に行くんだろうとは思う。だけど、その後が俺には見当がつかない。

設定はしたけど、それがどういう風に反映されてるのが未知数だ。本当に分からない。俺はこの世界でどこに住んでいて、どういうステータスなのか不明なんだ。彼女等から色々聞き出すしかないな。

「拓決まってるじゃん、事務所帰るんだよ」

「事務所？」

「拓、どうしたの？ 頭でも打ったんじゃない……？」

何かやり辛いな、この世界で色々してた事になってるんだよ。取りあえず、頭打って記憶喪失になった事にしておこう。

「うん、どうも、記憶がないんだ、どこかで頭をぶつけたのかもしれない」

「「ええ……」」

驚いたような声をほぼ同時に二人が上げると、両側から二人は顔を見合わせて、口をOの字に開けたまま、絶句している。

その反応に動揺した俺は、二人に交互に素早く視線を往復させた。

……ビクリした……耳元で二人に大きな声上げないでくれよ……

ミルファアは人差し指を顎に当てて瞳を上にならずらして悩んでる様子、同じく右でサナも同じ様なポーズとって俯いてる。

まあ、普通記憶喪失になったとか急に言われたら困るよな？

「少し信じられないですけど、拓の今までの言動それで納得いきました。本当に記憶がないようですね」

サナのメガネの奥の瞳に迷いが感じられない。

冷静に今までの俺の言動を分析して、俺が嘘を言っていない事を認めたようだ。

うん、この子は賢いな、瞬時の判断力、洞察力はピエールを思い出す。

「はあ、本当かよ？ でもサナが言うんなら本当だよな、は……」

俺に絡める手を離れたミルフィーが後ろ手を組みながら、空を見

上げて虚ろな眼差しでため息をついた。

ミルフィーもサナの言う事に信頼は置いてるようだ。

だけど、一気に二人の雰囲気が暗いものへと変わってしまった。

……途方にくれるよな、彼氏がいきなり記憶喪失とか……

二人とも俺から手を離していて、両隣に近接して歩いているけど、どちらも視線を下に向けて冴えない表情をしている。

その真ん中でどうしていいのか分からず、俺は次の展開を待っているんだけど……

ここは彼女等に任せるしかない。俺には何もできん。

「まあ、悩んでも仕方ないし、一緒に行動しているうちに拓にも記憶が戻るはずです。取りあえず、事務所へ帰りましょう」

サナは顔を上げると、俺とミルフィーに穏やかな笑顔を向けて、前向きな意見を述べた。

ミルフィーはしゃーねーよなっと言呟き小さく頷く。

うん、それしかないよな。期待していた通りの展開に持って行ってくれて助かる。

いきなり、病院でも連れて行かれて、頭のレントゲン取られたり、同じ衝撃を加えれば　とか古の展開にもってかれたらどうしようかと……良かった。

#

俺達は真直ぐ白い道を歩むと、しばらくして、街中に足を踏み込んでいた。

高所から見下ろした時は現代風の家、つまり、俺が現実の世界で身近に目にするような家が、この街に佇んでいるように見えたんだ

が……全然違うぞ？

四角い現代風の建物と違っていたものは、白い石でできた四角形のオブジェというか、窓も扉すら付いていない四角い箱とも言いか……

なんに使われるのか知らないけど、同じような高さのそれが、無数に街の中に等間隔に並んでいた。

しかも、街の真ん中に立つ黒っぽい高層ビルだと思っていたものも、まるで違う物体である事が分かった。

とてつもなく高い黒い石柱とでも言うべきか。

表面に四角い透明なタイルのような物が隙間なく貼られていて、これが陽光を受けて皓皓と煌いていたので高所からはビルの窓に見えたんだ。

「ここは一体何するところ？」

俺は素直にそう思った。

記憶喪失だと二人は納得してるはずだが、それを聞いたとたん、少し息を吸い込んで小さな驚きを表情に浮かべる。

困惑気味の俺に近付いて、優しく丁寧に説明し始めたのはやはりサナだった。

「ここは、墓場ですよ……」

「へ？」

俺は一瞬頭が真白になった後、思考が宙に彷徨った。

え、これ墓場？ 何で街の中に……？ それに仮に墓場だとすると、黒い石柱はファラオとか偉い人の墓とか？

しばらく取りとめのない妄想が頭の中で渦巻く。

ミルフィーは白いオブジェに背中をつけながら、腕を組んで目を

瞑っていた。

まあ、俺の悪い頭で考えても答えは出るはずもなく、

「ごめん、もしここが墓場だとすると、人間達はどこに？ いや、もう、何でも教えて！」

もう全て分からない事を前提に、彼女等、特にサナに全ての説明を求めることにした。

だって分かんないものは、聞くしかないよな、一から100まで万遍なくな。

#

ミルフィーは俺の投げやりとも取れる訴えに、最初は困惑気味だったが、すぐに考えを纏めて語り始めてくれた。

「えーっと、何から話そうかしら……取りあえず、この天空の島、ゲルスタシアの表面には人間の居住空間はないの」

それを聞いた俺は辺りを見渡しながら、本当に人がいないか確かめるが、人の姿を見つucker事ができなかった。まじで人っ子一人いません。

白い地面に白い箱、真ん中に黒い石柱はあるものの、殺伐とすぎだろ？

彼女達がいなかったら、即座にリターンで現実世界に帰っていたかもしれないな。

更に質問を色々ぶつけよう。

「ええ、じゃこの広い空間はなんなの？」

「ここは、憩いの広場ってところかしら」

ふむ、要は公園とか山とか、そういつた空間かな？

じゃあ、一体人間達はどこに？ 街の住民は？

あ、そういや、熊五郎はなんでいたんだろ。

それ聞いてみよう。

「そういや、ここ来る前に襲ってきた熊五郎は何でいたの？」

「動物は一杯いるわよ、後は実験的に作られたキメラとかもいるしね」

聞きなれない言葉が耳にして即座にまた問いかける。

「キメラって何？」

その問いにサナは頬に左手を当てて、視線を下げて瞳を曇らせる。
え、何か悪い事言ったかな？

「ええつと……」

「合成動物だよ」

サナが言葉に詰まると、壁に持たれて黙って話を聞いていた、ミルフィーが口を開いた。

そう言い放ったミルフィーは、壁を尻でポンと弾くと、その反動で直立して俺の近くまでつかつか歩いてくる。

そして、いきなり俺の左肩に手を伸ばし強く掴んだ。

「ま、その話はそのうち話すとしてさ、記憶がないにしろ、拓があたし達の彼氏である事には違いないし、事務所へ行こう」

屈託ない笑顔で俺に淡々とミルフィーは語った。その瞳には一片の濁りも感じられない。

この子 男っばい口調でぶっきらぼうに話すけど、いい子だよな。

そんな事を考えていると、ミルフィーがサナに目配せして、それに答える様にサナが首を縦に振った。

そして、サナは突然 黒い石柱に向って走り出す。

俺はその後姿をばーっと目で追っていると、

「ほら、行くよ、拓！」

「どこへ？」

「付いて来れば分かる！」

ミルフィーがいきなり声をかけて来て、俺の右手を掴んで勢い良く引張った。

俺は少し気後れを覚えながらも、ミルフィに強引に連れられ、サナの後を追って黒い石柱に向って走っていった。

天空編、降りていくよう？

「拓、今から居住空間に移動します」

それはいいけど、黒い石柱でっけえな。幅も高さもどれだけあるんだ。

石柱にはやはり透明のタイルが張られている。

よく分からないけど、何のためにこんなに張られてるんだろうか？ サナは首に掛けていた鎖状の銀色のネックレスを首から外そうとしていた。その端を掴んで首から頭へと持っていく間に、手繰り寄せられたネックレスの先にエメラルド色の宝石のようなものが、胸元から零れ落ちる。

「なにそれ？」

宝石に興味はないんだけど、綺麗だったんで思わず聞いてしまった。

「IDストーンよ」

はあ、IDね。いわゆる、個人証明みたいなものか、などと思っていると、サナが鎖を持ち上げ、黒い石柱にIDストーンを見せ付けるように突き出した。

すると、前方の黒い石柱の壁がふつと突然消えたかと思うと、真白い箱型の空間が姿を現した。エレベーターかな？

「居住空間への輸送ポートよ、入ってください」

まあ、言い方違うけど、合ってそうだな。サナを先頭に、俺、ミルフィーと中へ足を踏み入れる。全員入ると、向こうに移る景色が白く塗りつぶされるように消えた。四方上下を囲む白い壁には、ボタンらしきものがない。エレベーターなら何階かボタン押さないと行けないんじゃないのか？

「ボタンは？」

「ボタン？　なんだそれ」

ミルフィーはボタンを知らないらしく、ちよつとした説明を彼女に施した。

「そついや、そんなの昔あったって、歴史の授業で聞いた気すんな」

はあ、なんかここ、俺たちの世界よりずっと科学が進んでるのかな？ ボタンは古代の遺物扱いか。

そんなやり取りしている間にも、この狭い空間はどこかへ進んでいるようで、独特の下腹がこそばゆくなるような感覚が襲ってくる。かなり早いスピードで、降下しているようだ

だけど、中での振動は大したことはなかった。それにしても、真白で息が詰まるな……

「そろそろ、居住空間に差し掛かります、拓景色見たいですか？」

「見たい」

うん、見れるもんなら見たいよ、俺は閉所は苦手なんだ。景色でも眺めて気分変えたい。

「じゃあ……」

サナは息を小さく吸うと、右足を後ろに反らして浮かせ、思いつきり白い壁を靴先で蹴りこんだ。

俺はそのサナの乱暴な行動に一時的に驚いたけど、それは取るに足らないことだとすぐに悟る。

「うわ……なんだ」

サナが蹴り込んだ後、少し遅れて白い壁が突然掻き消えたかと思うと、青い空間に俺たちは浮いていた。ここどこ？ さっきまで白い空間の中にいたはずだよな……？

青い空間かと思っていると、突然白い靄もやのようなものに包まれる。しかし短い間にまた青い空間へ。足元を見下ろしてみた。白い雲のようなものが凄い速度で迫ってくる。そしてあっという間にその中へ入っていく。

これってもしかして 空を降下しているのかな？ いや、しかし足場はしっかりしている。分かってきたぞ、どこかへ移動したわけじゃないんだ、白い壁が瞬時に限りなく透明になっただけで、実際は同じ空間の中に立っているんだ。さっきのサナの蹴りは部屋を囲む壁を透明化するためのものだったんだ。たぶん、中から衝撃を与えると、そうなるんだろうな。

「どう？ 転送ポートから眺める景色は？」

「すごいね、びつくりしたよ、でもこれってどうやって動いてるの？」

「このポートは重力を操る装置が備わっていて、自動的に居住空間

のターミナルに向うように設定されているの」

エレベーターかと思っていただけ、自力で移動しているらしい。

小型ロケットみたいなものか？

#

「何か見えてきた」

「下に見えるのが居住空間、つまり私たちが今から向う場所です」

「久し振りだな」

薄い雲がかかっているせいで、白々としか見えないけど、建物群みたいなものがちらほら、山か平原か緑の一体も見える、青いものは海？ 川？ 茶色いものは岩場か、砂地かな。

あ、黒い物はなんだろう？ 俺は少し浮かれているかも知れない。上空から見る景色は雄大且、とても鮮明に目に映るから、楽しくて仕方が無かった。

……それにしても久し振りって、サナ達は少し居住空間を離れたのかな？ いや俺も含まれるのか。

「あの黒いのはターミナルです、上にあったものと同じものです」

と、言う事は黒い石柱か、あれは要するに、下の世界と上の世界を繋ぐ駅みたいなものなんだな。

「さてと……」

またサナが足を後ろに反らして、蹴る体勢に入っている。青っぽいスカートの中から伸びた白く細い脰うでわが頭になる。サナが勢いよく、青っぽい靴の先で透明の壁を蹴りこむと、また瞬時に白い壁が周りを取り囲んだ。

降りる前には普通に戻しておかないといけないのかな？ どうでもいいか。

あ、外から聞こえる音が変わったような気がする。たぶん石柱の内部に入ったんだろ。とはいえ、それも気のせいくらいにしか分からない。白い壁は遮音素材で出来ているようだ。

#

ポートの小さな揺れが収まると、サナが俺に振りむいて笑顔を見た。

「拓着きました、この扉を開くと居住空間に出ます」

「そっか、ところでここなんていう場所？」

「どこにでも名前はあるはずだよな？」

「空間全体を指すなら、第2階層モラクという場所です。そして今から出る場所は、このモラクで最も人口が多く、首都でもあるカオスシティです」

「なるほど」

いや、よく分からないので、はいそうですかみたいな意見しか言えないんだけど、この白い壁の向こうには、人が沢山いるらしい。あーなんかドキドキしてきた……ちょっと緊張してきて腹も痛くなってきた。

トイレ行きたいな。そうだ、トイレあるか聞いておこう。たまにはサナばかりじゃなく、ミルフィーに聞いてみよう。頭の後ろで手組んで、会話に混ざらずに虚ろな眼差しで壁にもたれたままなんだ。やっぱり俺の記憶喪失が堪えてるのかな？

「ミルフィー、ここトイレあるか？」

俺が声を掛けた途端、表情を改めて優しく快活な笑顔を向けてくる。

「トイレあるよ！ 中まで一緒にについて行ってあげるよ！」

いや……ついて来てくれるのは嬉しいけど、中まではいいいよ……はあ、しかし、この設定無茶あるよね。何がって彼女が二人つてとこがさ。しかも一緒に行動って、最近よく見かける、冴えない男のハーレムパターンを模して作った設定だけど、俺には違和感ありまくりで、なんだかしっくりこない。俺って一人の女の子に一途に愛を傾ける方なので、なかなか大変だよ。一方だけ話し込むと、もう一方が疎外感を感じると思っんだよ。

「じゃ、拓、扉そろそろ開きますけど、油断はしないでくださいね」

「油断って何かあるの？」

「開けたら分かります……」

サナの声色が一段低くなった。そして、俺の両隣にミルフィーとサナが並んで、両腕もそれぞれの手でガッチリ組まれている。まるで容疑者を護送する警察官のようだ……

な、何があるんだよ……本気で緊張してきた……横っ腹痛い……！

天空編 虎。

扉が開いた。真っ暗……？ 前方の黒い長方形の壁というか、闇
とすべきか。

とにかく、光どころか音すら聞こえない。あれ、人は？ 居住空
間は？

頭で描いていた扉の向こうの風景と、隔絶した前方の闇の世界に、
俺は言葉を失った。

「サナ……これは……」

「分かっています、拓！ ちょっと後ろに下がってください」

「え？ うん……」

俺は二人の手から解き放たれると、後ろによろめきながら退く。

二人の様子から今起こっている事、つまり前に広がる闇が尋常でな
い事が、俺にも何となく分かっていった。

後ろからその闇をじゅっと観察してたんだけど、気のせいかな、何
かが蠢いてるような気がした。 何かがいる……俺はそう思うと、
後ろの壁にめりこむくらい背中を押し付けていた。

怖い……まじで……。怯える俺の前で、ミルフィー達が顔を向き
合わせ小声で喋っている。辛うじて俺にも聞こえるくらいの声で
囁きあっていた。

「どうするー？」

「やっぱ……焼いてしまう？ それとも、平和的に話しかけてみる
？」

「無理でしょ、聞くような奴じゃないし、だから焼いちゃお」

ミルファイが最後に言い終えると、サナがそれに首を縦に振った。俺はその言葉の意味が良く分からない。取りあえず、後ろでドキドキしながら、見ていた。

肩に下げている小さなリュックから、ミルファイが何かを取り出した。

それって……銃？ 俺がそう心で思ったのとほぼ同時に、銃口と思われる先から、大きな炎の球が弾けたかと思うと、爆裂音とともに闇が掻き消される。そして、突然、視界に映った現代的な風景の奥に見えるビルの一階部分が、数瞬後、爆発した。炎の進りと黒白入り混じった煙が辺りの視界を濁らせる。辺りから人間の悲鳴や、何かの羽音、動物の呻く声が聞こえてくる。

「じゃ出るよ！」

「そうね、行きましょう！」

慌しい喧騒の中で、後ろに居た俺の腕を、二人が各々の手でがっしり掴みあげる。俺の体は少し持ち上げられ、踵が浮いた状態だ。そして

「Go！」

ミルファイが耳元で叫ぶと、俺たちは 風になっていた。いや！ 風なんて生易しいものじゃない。もう、周りの風景が絵の具を塗りつぶしたみたいになって、このとてつもない速さは 音速……？ もう目を開けていることも、意識を繋ぎとめている事も……できなさそうだ……

#

……光？ 眩しい。 浩々と輝く光を訝しく思う。俺はもっと寝ていたい……

だけど、何かが足元を^{くすぐ}撥る。ちよつと……こそばゆいって。誰だよ……俺はもっと寝ていたいんだよ……ああ、もう駄目だ。

ガバツ！

「……あれ？」

俺は気がつくど、どこかの部屋の大きなベッドの上にいた。青いカーテンの合間から漏れる光が眩しい。思わず目を細めて手を翳した。ここどこだ……？

手で光を遮りながら、部屋の中を見渡した。一見、俺が住んでいた現実世界とそれほど変わらない内装が目映る。木の開閉式扉みたいなもの、クローゼットかな？ 部屋の角には出入り口らしき扉。四角い金属のテーブルに、木製の腰掛椅子。目新しいものは特に見当たらない。

だけど、電灯が消えているせいか、部屋は薄暗い。カーテンをほぼ、閉め切っているせいもあるだろう。カーテンの合間から漏れる陽光だけが光源だ。

俺はさつきから、白い掛け布団の中に伸ばしている足先に触れる、何か柔らかい物に気づいていた。良く見たら、足の辺りの掛け布団の白い布が、こんもり大きく山を形成している。

「ちよつと……」

得体の知れない物が触れる恐怖から、思わず声が漏れる。

「どうした？」

突然どこからか聞こえる謎の声……部屋にはさつき見渡した限りじゃ誰もいないはず。

てことは……

足元の掛け布団の端が、突然大きく上に持ち上がる。俺は反射的に、両足を体に押し付けるように折りたたんだ。そして、背中をベッドの後方の出っ張りにビタっとくっ付けて、身震いしながら、こんもりと持ち上がった布団の端に、怯えた視線を置いていた。

「だ、誰だ！？」

恐怖と喉の渇きで掠れた声で、そのこんもりに叫んだ。もう心臓高鳴りっぱなしだ。

「トラの助だよ」

そのこんもりした影から声が漏れると、徐々に布団が下に擦れ落ち、その恐ろしい姿を俺の前に晒し始める。本当に怖いよ……ホラー映画のようだ。

黄色い体毛に黒の横線が入った大きな背中？　が目に映りこんだ。一見、虎の気ぐるみでも着ている大男がベッドに座っているようにも見える。しかし、頭に視線を這わせると、耳が動いたんだ……ピクピクつとね。

体表も気ぐるみの割りには、皮に透ける骨の影が生々しいし、それにこの匂い……とても獣くさい。

そして、気ぐるみ男が体を振って、俺に体を向けたんだ。

薄っすら部屋の闇に浮ぶその顔を直視して、俺の時間が凍りついた……声が出ない……。

目の前にいるのは、まさしく虎、顔も虎！牙もある！虎虎虎！虎……がなんで居るの……!? パニック寸前だった……気づくみんなかじゃない！こいつは喋る虎だよ！ちよつと……誰か助けて！

ボタン！

「拓元気……?」

突然扉が開け広げられ、ミルフィーの声が俺の耳に届く。すると、途端に部屋が明るくなる。

「ミルフィー……!!」

ミルフィーの顔を見るや、ベッドから跳ね起きて、彼女の胸に顔から飛びついていった。

「どうしたのよ、拓……昼間っから」

部屋に虎が……!! 心で叫ぶも、声が出てこない……しかし、指だけは虎をきっちり指し示していた。

「ああ、パパ、おはよー!」

「ミルフィー、昼真っから見せ付けるねい、一応父親だぞ、わしゃ」

「ごめん、拓さ、ちよつと訳ありで、たぶん、父さんの姿に怖がってる……」

ミルフィの胸の谷間に顔を押し付けながら、二人の会話をかろうじて拾っていた。

パパ……！？　なにそれ、なにがどうして……　訳分らないよ

……

後頭部にミルフィの吐息を感じた。その後、俺の怯えた肩をミルフィは驚掴みにして、まるで置物をどけるように横に俺を移動させた。その場に力なく膝を折って、俺は座り込む。

#

ミルフィが虎男の耳に、手を翳してひそひそ何かを喋っている。その間、虎男がこちらを鋭い目で見つめていた。そして

「なんてこった！　拓がね……そら怖がるわな……」

囁き話が終わると、ミルフィと虎男がこちらに向き直った。

虎男は大きいため息をついた。両耳がそれに呼応して前に倒れる。虎の顔をしているのに、表情が見てとれる。なんかがっかりしている様子だ。目を閉じて俯いていた。

な、何なんだよ……ため息つきたいのはこっちの方だ……

しばらく、部屋を重々しい沈黙が支配していた。

天空編、キメラ。

「やあ、拓、えーっと、はじめまして」

「ども」

「ま、この椅子座ってくれよ」

「はい」

虎親父いや、虎之助が俺に気さくに声を掛けてきた。どうやら、ミルフィと話を交わしたことで大体の事が分かったらしい。つまり、俺が記憶喪失である事を理解したようだ。

だけど、相手は俺の事を理解したかもしれないけど、俺は全くこの虎之助のことも、この今いる建物の事も、この世界の事も、さっきの出来事もみーんな知らないわけだ。

さっき、サナも少し遅れてこの部屋へやって来た。虎之助は顔は怖いけど、取りあえず俺を食べようとが、そんなつもりは無さそうなので、俺は落ち着きを取り戻し始めていた。椅子に腰掛ければ、色々話してくれるに違いない。さあ 色々聞こうじゃないか。

「拓、何か知りたいことある？」

サナが不意に俺に聞いてきた。さすがにサナは分かってらっしゃる。

「もうね、色々ありすぎて困るんだけど、えーっと、そうだな、ここどう？」

「ここは、事務所兼、自宅、つまり、虎之助おじさん、ミルフィ、私、あなたの住まいです」

「なるほど……」

円卓の周りに4人は座っている。三人と一匹といった方が良いのかもしれない。

だって、虎混じってるしな…… 住まいか、今、部屋の窓を覆っていた、カーテンは開け広げられ、外の景色が顕になっていた。俺は立ち上がり、窓辺によって外の風景を食い入るように眺める。さつき降りてきた黒柱が高く聳え立っているのが、遠目に見える。その周りには現代的な建物が軒を連ねているのも分かる。あの辺りはこの降りてきた階層世界モラクでの中心都市カオスシティだとサナは言っていた。

事務所の近辺を眺めると、なだらかな斜面を丁度上りきった、平坦な平原のような場所だと分かる。カオスシティから、サナ達が音速とも言える猛スピードで、ターミナルから俺を抱えて上がったきたのだ。ここは静かだ、まるで、現実世界のスイスかどっかの牧場ようにも見える。

右側に視線を移すと、屹然と聳え立つアルプスのような山もある。頂には白い靄がかかり、雪が山の中腹より上を白々と覆っている。カオスシティの向こうにも海みたいなものも見えるし、砂地のような場所もあるようだ。しかし とてつもなく広いな？ ここが天空島の中だとすると、一体、天空島はどれくらい大きいんだろう……ま、色々疑問はあるけれど、想像するより聞くが易しだろう。

おっと、肝心の事務所なんだけど、窓から外見を見た感じじゃ、円柱の黒いビルといったかんじだ。平原とのミスマッチがなんとも不思議に思える。

「次いきます、虎之助さんはなぜ虎なんですか？」

「えーっとそれはね」

「いや、サナちゃん、俺が答えるよ、質問されたのは俺だからね」

虎之助は生意気にウィンクをサナに飛ばした。虎の癖に……ウィンクまでできるのか、侮れない奴だ。

さっきから、ミルフィは黙って俺の顔を見つめている。その視線はどこか虚ろで、目がかちあうと、俺の方が視線を逸らしたくなるくらいだ。どうしたんだろう……？

「俺は虎と人間のキメラだ。元は人間でナイスガイだったんだよ、まあ、今の姿も気に入っちゃいるけどな」

虎之助は横顔を俺に向けて、その姿の格好よさをアピールしていた。まあ、髭も長く生え揃っているし、牙も鋭いし、見慣れてきたら虎顔もいいもんだ……って違う！ 更に問い詰めよう、尋問の始まりだ！

「でさ、虎之助さん、なぜキメラになったの？ この世界はどういう場所なの？」

虎之助は一辺に質問を浴びせられ、困ったような顔をしている。そして　サナにその顔を向けて、

「ごめん、サナちゃん、タッチー！」

サナの肩に手の平を置いた。サナは特に表情を変えないで、首を縦に振ると、また平然と話し出す。虎之助、顔は猛々しいのに、折れるの早すぎだ！

「話すと長いんですが、拓ゆっくり聞いてくださいね」

「うん」

サナは目を睨り深く息を吸うと、目を細く開けて、淡々と語り始めた。

「この天空島を管理するサガット博士は、キメラ工学の第一人者なんです。彼の作り出すキメラは失敗率が低いんです。つまり、豚と犬をキメラとして合成したとすると、ほぼ100%の確率で豚の特徴と犬の特徴を兼ね備えた、未知なる生物を生み出すことが出来ます。しかも、そのキメラは寿命が長く、元の犬や豚より、筋力、知能、その他様々な点において、オリジナルより優れているんです」

「ふむ、つまり？」

「健康体で意図した優れたキメラを生み出す合成率はほぼ100%、それまでのキメラ工学では合成によって、片方の動物が死んでしまったり、意図しない生物が出来上がったり、障害をもっていたりとあまり実用的ではありませんでした。しかし、サガット博士は長年の研究の末、確実に合成を成功させ、しかも意図した生物を確実に作り出すことを可能にしたんです。最初は動物同士のキメラ、次に動物と魔獣と段階的に合成の種類を増やしていき、確実にそれを成功させていきました。そして最後には人間を使ったキメラにも着手しました。これには倫理の面で反対はありましたが、賛成派の後押しもあって、その研究は滞る事無く進められ、今では人間とその他の生物とのキメラはほぼ確実に成功するまでになりました」

虎之助は話の途中に部屋を出て行ったが、また戻ってきた。どう

やら、長い話をするサナを氣遣って、飲み物をグラスに注いできたようだ。当然、俺たちにもその橙色の液体の入った飲み物が回されていく。俺は会釈をして受け取った。うーん、オレンジジュースみたいな味だな。サナは少し口に含まと、それを嚥下して、更に深い部分を話しはじめた。

「地上では、希望した人間を使つてのキメラは、続々と生まれ落ち、その健康で独特の力を兼ね備えた完成度の高いキメラを目にした地上の民は、次々とキメラになる事を希望し始めました。政府もキメラになる事を奨励し、雑誌やメディアでも取り上げられ、一躍キメラは地上の世界で隆盛を極めました。しかし……キメラになる事を良く思わない、いえ、キメラの存在自体疎ましく思う人間も多数いました。そのうち、キメラとなった元人間と普通の人間達の間で諍いや、トラブル、衝突が起こり始めたんです。これには地上にある連邦政府は頭を捻りました。そして博士も苦悩します。お互い、何かいい案は無いかと議論しあつた結果生まれたのが、この天空島、『ゲルスタシア』なんです」

サナはまた話を区切ると、飲み物を口に入れる。俺は馬鹿でもないので、8割程はその話の内容を理解していた。けど、ちよつと長かつたので頭で整理するには時間がかかつていた。

しばらく、部屋を沈黙の時間が流れていった。サナも俺の質問が無いと、これ以上は語れないらしく、俺の考え込む姿をじつと眼鏡の奥に光る青い瞳で見つめていた。

俺は大体整理し終えると、頭の中にある確信が浮んで、それをサナに伝える。

「だんだん分かってきたぞ、つまり天空島はキメラの住む島だ、普通の人間達は地上に住み、

キメラとなった元人間達はこの天空島で住んでいるってことじゃない

いか？」

「拓賢い！ その通りです」

俺は少し胸を張って、得意な顔を浮かべた。ふふふ、俺は馬鹿ではないんだ。とはいえ、ここまで言われれば、これくらいの推測は立つわけだけど。

「そう、拓の言うとおり、連邦政府はキメラとなった生物には、この天空島に移住する事を義務づけました。ここはキメラが住む地上の遙か上空に浮ぶ人工島です。島は三階層に別れていて、表面の部分、第一階層には人間を除いた生物、幽体、物質を合成したキメラの居住空間『サークル』が広がっています。第二階層、つまり今いる場所は、人間と動物、魔獣、物質の合成で生まれたキメラが住む居住空間『モラク』があり、第三階層には人間と幽体、人間とその他の者を合成して生まれたキメラが暮らす空間、『ヘル』があります」

「なるほど……」

説明を終えると、サナは一通り言い終えたのか、ほっとした顔で丸椅子に腰掛けた。

今まで立ちっぱなしで、長くややこしい事柄を俺に丁寧に話してくれていた。その疲れは半端じゃないだろう。それにしても、ここまで聞いて色々引かかる事があるな。

ま、それは追々聞いていくか。大体分かったし。

天空編、俺頑張るかも？

「まあ、なんとなくだけど、分かったよ」

「そっかそっか」

虎親父は俺の肩を大きな虎の手で揺さぶり、ガッハッハと威勢良く笑った。

取りあえず爪立てないように、痛いってば……

「じゃあ散歩いこう！」

俺がそうみんなに快活に言い放つ。すると、サナが少し顔を曇らせた。虎親父も急に大口を閉じて笑うのをやめる。何かまずいこと言った？

「拓、それでさ、前から頼んでただけどよ」

唐突に、虎親父が少し低い声だが、何か重々しい口調で俺を見て言った。

「お前もキメラになった方が、良いと思うんだ」

「ええ！？」

じよ、「冗談じゃない……親父ボケたか？

俺は親父が無茶言うので、サナに頼りない視線を送った。もちろんミルフィにも。

そしたら、意外なことに、親父と同じような目で黙って俺を見下ろしてくる。

ちよ、待って！ それってお前たちみんなの一致した意見かよ？

「拓、ここね、モラク、いえ、ゲルスタシア全体に言えることなんだけどね」

サナが言いにくそうに、ぼつりぼつり語り始める。

「博士がこの地でキメラとなった人々に与えた法律ってなんだか分かる？」

「さあ、そりゃいろいろあるんじゃないの？」

現実社会の法律を思い出す。色々あるに違いない。

「それが一つしか無いの……」

「一つ？ 少なすぎないか？ 一体……」

俺は息を吞んで、サナの瞳を食い入るように見つめた。

「ここにある唯一の法律は『好きなように本能の赴くまま振舞え』よ」

俺は我知らず言葉を失った。

しかし、少ししたら色んな予想が頭にどんどん打ち立てられる。つまり、ここは法律が無いと同じ、無法地帯じゃないか？ そんな所にキメラとなったパワフルな人間がうろつろしてるって事は、それはつまり、ま、毎日がサバイバル！？

#

「拓よ、その意味がどれだけ重く、そして恐ろしい事かお前にも分かるだろ？」

虎親父がもともと精悍な虎顔を更に険しくして話す。

その顔で迫らないでくれ……まだ俺は慣れていないんだよ……

「分かるような気もする。だからあんた達は俺にキメラとなって、サバイバル生活圏で生き残れる強い体になって欲しいってわけなんだよな？ 足手間といは邪魔だつて事でしょ」

俺にしては鋭く、少し棘のある言葉を三人に投げつけた。だが、ここで更に滔滔と話を切り込んでいくのが俺なんだ。

「でもさ、無法地帯とか、移住する前にちゃんと話し聞いてたの？ これもし、話とおつてないなら、詐欺だよ。誰も法律も無いような所へ移住したいなんて思うわけないでしょ。これじゃそのまんまキメラとなった人々の隔離施設じゃないか？ しかもある意味モルモットじゃないかい？ ここに來た奴馬鹿みたいじゃないか」

親父とサナがそう言われて、体を少し跳ねて口を噤んだ。痛いところをクリティカルヒットしてしまったらしい。俺は二人が黙るのを見て、自分が言った言葉が嘘でない事を確信した。

そして、同時にものすごく、家に帰りたくなった。そんな危険な世界観だとは思っていなかったからだ。

「拓！ キメラになる必要なんてないよ。私は元々その案には反対だったんだ。どうやったか知らないけど、拓は人間のままこのゲルスタシアに紛れ込んでいた。他のキメラに襲われそうになったのを私たちが助けに入ったとき、あんたこう言っただよ」

そんな隠れたエピソードがあつたなんて知らないし。

そうか、俺はこの世界にいたことになってるんだよな。なんて言っただろう？

少しの沈黙の後、ミルフィーが優しい瞳を俺に向けて、

「『俺は神だから、全然余裕だよ、助けなんていらない！』ってね」

と、言った。

うは、俺がそんなこと言ったの！？ それ俺じゃないだろ！ 他力本願大好き人間なのに。

何か違う人みたい。ここに居た俺はまるで別人のようだ。

予想外の『俺』の過去の発言に、動揺し、なぜだか、尊敬の念を抱いてしまう。

「その後さ、結局あんた、殺されそうになって、危機一髪で助けたんだけどさ、なんか私そんなあんたに惚れちゃったんだよ。私だけじゃない、サナもね。ただの人間の癖に、そんな強気な発言できる拓に、なんか逞しさというか、強さを感じて、格好良いな」って」

ミルフィーが少しうつとりするような目をここでないどこかに向けていた。

たぶん、過去の俺にそれは送られているんだろう。

だが、ちよつと待つて欲しい！

「ミルフィ話は分かったけど、過去の俺は別人だよ、少なくとも性

格が違いすぎる。俺はそんな潔い発言はできないし、自信もない。だから俺……」

俺は素直な心持ちをミルフィーだけでなく、差し向かう三人に告げた。

大きな事はこの場では言えない。率直な事実を述べて置かないと、後々苦勞しそうなんで。

「分かってます。あなたをここに連れてくるまで観察していました。記憶喪失後のあなたは

まるで別人のようでした。言葉は悪いですが、少しおどおどして、前ほどの芯の強さのようなものが見受けられませんでした。でも、だからと言って、拓が拓である事に違いないんです。私は今の拓を守っていくつもりだし、そして、愛していきます……」

サナ……うー、女の子に守られるなんて公言されちゃった。それでいて、そんな情けない俺を愛すとも言っている。何かこれは男として、良いのだろうか……？

俺が良く分からない罪悪感に苛まれていると、

「私も同じ意見！ 拓の命は絶対守りきるし、ずっと愛していくよ！ それに拓だってここにいたら、直ぐに以前のように変わっていくだろうし」

ええ！？ 変わっていくかな？ 俺が？

うーん、それは無い と言いたところだが、話を聞いたあとの俺は、何かが変わりつつあった。消えかけた焚き火に枯れ枝がくべられる様に、俺の気持ちは微かに高揚しはじめていたんだ。

天空編、まだ序の口だよ？

「まあ、でも、さっきは大まかに話したけど、無法地帯ってほどでも無いんですよ」

「どういうこと？」

「考えてみてください、博士に好きに振舞えって言われて、はいそうですね。やってやりたい放題する人たちばかりだと思いますか？ 元は人間ですよ。大体この場所に來たのだからって安住の生活を求めてきた人が大半だし……」

「ふむ、てことは？」

「つまり、身の安全と平穏な暮らしを望む人が多数なわけで、そういう人たちは同じような考えを持つ人々と手を取り合って、独自の法体勢を作り上げて、同じ都市でより固まって生活しています。その際たるものが中心都市カオシティなんです」

更にサナは続けた。

「とはいっても、全てがそうではないですけどね。やはり、やりたい放題したいひとはいるし、そういった人は辺境の地や地下で好きなことしていますし。まあ、結局、人間色々ってことです。地上とあまりそういう部分は大きな差ありません。ただ、地上ほど治安が良くないのは確かです。現にさっきターミナルから出る際、襲われかけました。私たちが排除したんですけどね。その後、拓の記憶喪失の事を考慮にいれて、安全を最優先でこの場所へ、高速移動しました」

「なるほど」

まあ、そうだよな、元は人間なんだし、いくらカメラになったからと言っても、平穩無事に暮らしたいとは思うよな……少し安心した……。命のやり取りがそこらじゅうで為されてるのかと思ったよ。とはいえ、さっきのターミナルの闇も何かの仕業らしいし、治安は確かにそれほど良くないみたいだ。

「拓、今からお昼ご飯作ってきますね」

「あ、俺の分も……？」

「もちろんです！ 精魂込めて作ってきますから、ちょっと待っててくださいね！」

「ありがとうサナ！」

サナは快活な笑みを浮かべて、足取り軽く部屋を出て行った。俺はどうすっかなあ、その間……

ん？ 円卓には虎親父が暇そうに、肘ついてぼーっとしていた。ミルフィは窓を開け広げて、棧に両手を置いて、眼下の景色を眺めている様子。

どちらに声かけても良いんだけど、取りあえず、親父さんとの交流を深めておかないとな。

まだ、言うほど話していないし……

俺は虎親父の隣の椅子に腰掛けると、気さくに話しかけようとした。

あ、しかし名前なんだっけなあ、聞いたような気が……そうだ、虎之助だったかな

「虎之助おじさん、ちょっといいかな」

「ん？　なんだ拓、どうした？」

「あのさ、何で虎とのキメラ選んだの？」

「虎かつこいいだろ？　強そうだし、ほぼ見た目で決めたよ」

「あ、そう……」

すんげえ、単純。聞くだけアホらしいというか……

何か無いかなあ、他に聞くこと……

そうだ、建物について聞いてみようか。

「この建物さ、何でこんな場所に建てたの？」

虎之助は頭を傾げて悩んでいる。答えが出てこないらしい。その呆けた顔を見ていると、大した理由はないんだろうなあ。

「高いし周り何もないし、見晴らし良いからな。ここは」

やっぱりな。それにしても、円柱型のシックな黒で纏めたこの建物は、周りの景色に溶け込んでいない。なんでもっと柔らかい造りの小屋や、ログハウスみたいなのにしないんだろ？

「なあ、おっちゃん、なんでこんな頑丈そうな円形の黒い建物建てたの？」

「そりゃ、お前、危険だからよ、この辺は少しカオスシティから離れていて、警備団も直ぐにはこれないから、案外危険なんだよ。建

物壊されたり、簡単に進入されたら困るからな」

「へー、じゃあ相当頑丈な材質で出来てるんだろっね、セキュリティもかなりしっかりしてたりするのかな？」

「当たったり前より、建物の外壁はちよつとやそつとの爆撃ではびくともしないし、この建物の周囲にも強固なバリアが張られている。そのバリアだって俺達四人と予め登録した者以外は通ることすらできない。入り口の扉だって、備え付けられた認証カメラを通して建物の人工頭脳が許可したものにしか扉は開けられないようになってる」

「鉄壁だね……」

俺はその重厚で用心深いセキュリティの仕組みを聞いて、啞然としてしまった。

まあ、どんなカメラがうろつろしてるか分かんないし、それくらい頑丈なものでないと、安心して寝れないよな……

一応、虎之助とも話したし、次はミルフィにも声を掛けるか。

徐に立ち上がると、窓を眺めるミルフィの隣にそつと歩を移す。

俺が横に並ぶと、ミルフィはこちらを見て口元を緩める。そして、また景色を眺めながら、

「拓、ここから見える風景いいでしょ！？」

「うん、綺麗だね、山も見えるし、高い位置にあるから町も一望できるし、何か気持ちが和らぐね」

俺がそう言ったら、またにこつと笑って俺に優しい瞳を向けた。ミルフィのつけてる香水なんだろうか、とてもいい香りがその場

に立ち込めていた。

右方に見える悠然と聳える山をしばし眺めていた。

柔らかな陽光がほんのり今いる場所を照らし、眠気を誘うような温もりをもたらししていた。

少し気持ちよくなつて、欠伸の一つもしようかと思ひ始めた時、右肩に細い柔らかな腕が、そつと巻きつけられる。

「拓……、記憶無くしても、やっぱり拓は拓だよ……、この強気な男らしい眉毛も、愛らしい丸顔も、みんな拓だよ……」

完全に両手を首に巻きつけられて、体もいつの間にかミルフィー側に向かされていた。

恍惚とした瞳で甘い吐息を吹きかけてくる。完全に俺に甘えているといった素振りだ。

俺はドキドキしていた。設定とは言え、ミルフィは俺の彼女という事になっている。

要はな・に・し・て・も・オールOKなわけで……童貞な俺には刺激がちと強かった。

そのうち頭がくらくらしてきていた。ミルフィが目を閉じるもんだから、理性が吹っ飛んでしまつて、行為（想像にお任せ）の前のキスから入ろうとしていた。

しかし、一線を越えようかと甘美な思いが走った矢先、同じ部屋にいる虎之助の存在を寸前で思い出すと、彼女の両肩をそつと掴んで、距離を離れた。

「どうしたのよ……拓……」

まだミルフィは甘い誘惑を帯びた瞳を向けてくる。

俺は彼女に分かつてもらえるように、親父の方を何回かちらちらと見る素振りをした。

ミルフィもやっとそれに気づいたようで、親父の方に向き直ると、

「父さん！ もう自室に戻りなよ～～！」

「うっさい！ ここは応接間だぞ、好きにいるわい！」

「もう～～～～～！」

ミルフィは親父を見て頬を膨らませると、また俺に向き直って深いため息をついて下を向いた。少時、頭をうな垂れていたが、急に頭をもたげて、目を輝かせて俺に言った。

「拓！ 家の中案内するね、どうせ、記憶喪失で覚えてないんですよ！」

「う、うん、頼むよ、ミルフィ」

「よっし、じゃ行こう！ 父さんちよつと拓あちこち案内してくるね」

「ほーい」

半ば強引に右手を引張られ、部屋を後にする。

ミルフィの唇から鼻歌が漏れ聞こえる。

「はい、ここは、お父さんの部屋！」

「ほお」

虎之助の部屋はつ～～んつと臭かった。

思わず俺は顔をしかめて鼻を摘んだ。

壁のいたるところに黄色い染みが、これはまさか……

「臭いでしょ、父さん虎のキメラでしょ、匂いつけあちこちにしてるんだよね、人間の知性はあってもキメラとなったものは、もう片方の習性をも受け継ぐから結構大変なのよね……」

確か、トラも猫科だよな。ああ、分かる。家で猫飼ってるから分かるよ、痛いほど。

あちこち匂いつけというか、縄張りを誇示するために、小便撒き散らすんだよな。

昔、俺の一張羅の服にかけられた時は、顔を真っ赤にして叱ったもんだよ

だから、さっきの応接間も時折、アンモニア臭がツーンと微かに匂ってきたのか。

それでもほぼ無臭だった事を考えると、サナ辺りが四苦八苦して匂い取りしたんだろうな。

猫なら去勢したら、ああいうのなくなるんだけど、さすがに実の父親を去勢するわけにはいかないだろうしなあ……

俺はあまりのアンモニア臭に、部屋の内部に余り目を配る事無くさっさと部屋を出た。

ミルフィは俺の気持ちを察してくれたのか、直ぐに出てきて、また先頭に立って案内し始める。

#

一通り見終わると、俺達は元の応接間へ帰ってきた。まだサナはいないようだ。料理つくってるんだろうな。

親父はベッドの掛け布団に体を丸くして寝ていた。

それにしても、この塔みたいな建物の中はさすがに広がった。

5階建てで1フロアに平均5つは部屋があった。

部屋と部屋を結ぶ長い白い廊下、一階の廊下の合間には、大窓から光を通した場所に椅子とテーブルが置かれていた。

休憩場所といった所かな。地下には運動器具が所狭し置かれた場所もあった。

トレーニングルームかな。とにかく、なんでもあるし部屋数も半端なかったな。

その中で一番気になったのは、事務所として使われている部屋だな。

横長のテーブルに、高級そうな革張りのソファ、誰かの肖像画、よく分からない機械、一見、本棚っぽいものの中にも、電子機器が埋め込まれていた。

なんで、その部屋が気になったかは、仕事に主として使われる部屋だからだ。

俺はこの世界で『複雑な悩みを持った人の悩みを聞き解決する便利屋みたいな仕事』をして生計を立てている事になっているはずだ。と言う事は、この事務所がその仕事を受け持つ場所であるに違いないからだ。

俺はこの世界の詳細を知った後から、言い知れぬ不安が俺の中でわだかまっていた。

一体　どんな過酷な仕事待ち受けているんだろう……考えるだけでぞつとする。

ま……まあ、それはゆっくり昼ご飯食べた後にでも……聞いてみるか……

天空編、ミルフィの体。

「うめえ！」

サナの料理が円卓を華やかに彩る。

名前も材料も分からない。説明はしてくれるけど、変わった発音が混じっているので聞き流した。俺は美味しければ、名称は気にしない派なんだ。

ただ、目玉焼きや、ステーキなどはそう俺の世界と変わらない気がする。

何の肉か知らなければね！

豪華に盛られる皿をフングゴフング、言いながら食い散らかす四人いやあ、はつきり言うとな、俺と虎之助はともかく、サナやミルフィーまで犬食い並の食い散らし方するとは思わなかった。

とにかく、フォークは飾りか！ ってな具合に、口から肉にかぶり付いている。お愛想程度に肉の端にフォークが添えられているが、用途は落下防止のためだろう。

俺は野菜も食べなきゃと、思い出したように口へ運ぶ。

「拓！ もっと肉食べないと強くなれないぞ！」

「それでふよ！ おとこはかわらも強くなってふあ！ うぐー！」

「フングゴフングー！」

ちよつと、口の中の物飲み込んでから話そうよ……

それにしても……虎之助はともかく、二人の肉への執着を見る限り、肉食系の動物とのキメラなんだろうなあって思う。よく考えると、熊を避けた時の跳躍力、ターミナルからこの建物までやってき

た音速疾走を考えると、とてつもない『何か』とのキメラに違いな
いんだが……

正直、想像がつかない。どんな奴とのキメラになるのを二人は選
んだんだろう。

何か聞くのが怖いんだけど、食べ終わった後、聞いてみよう。

ガチャン！

「ふー食った食った！ サナは料理うまいないつも！」

「あはは、それほどでもないですよ、おじ様！」

「いんや、うまいよ、サナは！ 拓と私とサナで結婚したら、サナ
に料理は任せるからね！」

「な、何を！？」

俺は思わず、焦げちゃ色のお茶みたいな味の飲み物を口から噴き
出しそうになった。

ちよ、ちよと待てよ。俺とミルフィーとサナで結婚！？
それって多重婚って言うんじゃないの？

「あのさ、俺とサナとミルフィーで結婚って多重婚って言うんじゃない？」

「そうだよ、普通じゃん。みんなしてるしね！」

「そうそう！ 常識ですよ拓。そんなことまで忘れちゃったんで
すか？」

「あ、うん、知らなかった……」

む、男にとって都合が……いやもしかして

「まさか、女も男何人とも結婚できるとか？」

「もちろんですよ」

平然と眉一つ動かさず、言つてのけるサナ。

どうやら、この世界ではどちらの側の多重婚も常識らしい。

まあ、所変わればつて所だな。

取りあえず、驚いたけど、結婚とかまだピンと来ないし、その話は頭の片隅にでも置いておこう。そのうちね……

#

円卓はサナに綺麗に片付けられて、真白な表面は電灯の光を帯びて浩浩と輝く。

この部屋はベッド以外には、ソファなど無く、この円卓の周りの椅子にだけ腰を下ろる事ができる。トラ親父は、黄色に黒の縞模様の毛が生い茂る足をもう一方の膝にかけて、何かの本を鼻歌交じりに読んでいる。

その足の先の鋭い爪が、トラ親父の気分に呼応するかのように伸びたり縮んだりしていた。

はつきり言つて、トラ親父の隣を通る事は危険だ。出来れば引っ込めて欲しいもんだ。

などと、神経質に考えていた。俺は怪我とかしたくないからね。さて、また窓際で寛いでいるミルフィーにあの質問を投げかけなくては。

「ミルフィー、ちょっと良いかな」

「うん、どうしたの？」

俺は少し息を吞んで、顔を少し強張らせていたかもしれない。

ミルフィーとサナが何のキメラか確かめるんだけど、正直聞くのが怖いんだよね。

こんなに見かけは小柄で、愛くるしい顔をした彼女が……まあ、もう聞いてみる！

「ミルフィーとサナってさ、何とのキメラ？」

「ん？ えーつとね」

やっと思い切って聞いてみたんだけど、直ぐに返事が返って来ない。

顎先に指を当て、少し考える素振りを見せるが、やがて

「私たちは結構複雑で、高レベルのキメラ融合をして生まれた、言わばエリートなんだけど」

「ほ？」

「ほ」としか言えなかった。

「まず、私の足！ これは音速で走れる魔獣イダテンラビットの細胞と融合したもので、次にこの腕！ これは怪力の魔獣、アークグリズリーとの細胞融合、そして、目は魔獣……鼻は……腹筋は魔獣……etc……」

次々とミルフィは体の場所を指差し、説明を加えていく。
俺は口をぽかーんと開けて聞いていた。

「分かったよ、有難う！」

俺は笑顔を目一杯努力して作り上げると、瞼や口端を微妙に痙攣させながら、ミルフィーに言った。

ちよつと……君の体はいくつの魔獣との融合でできているんだ！
しかも魔獣って何なんだよ！ という疑問がもう頭を忙しく駆け巡って、聞いていられなくなったんだ。

俺が困惑気味に外の景色に視線を向け、目を白黒させていると、

「だけどね！ 見た目だけはお変えがなかったんで、元の姿とほぼ変わらないよう融合してもらったの。色んな魔獣の特徴が体に出ないようにね。この融合技術は高度でね、同じ融合技術でキメラになった人は一握りしかないんだよ！ ほら、見てよ、こことか！
ここ！」

そんな俺にミルフィーは目を輝かせて力説した後、上着をめくつて、俺にあらゆる部分を見せ付けてくる。

ちよつと！ シャツ、え、パ……そんなとこまで……刺激が強すぎる！

思わず……自粛。ふ……参ったな。

俺は今ので敏感に稼動した生理現象を見られまいと、少し体をミルフィーとは逆に捻りごまかす。

「それにしてもさあ、あの太陽といい、この場所のあらゆる地形に使われている岩や水や土砂や、大気とか、どうやって、このゲルスタシアに運んだの？」

ちよつと声を上ずらせながら、さっきの興奮を冷まそうと堅苦しい話に方向転換を図る。

「さあ、詳しくは私は知らないんだよね。サナに聞けば？」

「サナそう言えないかな？」

部屋を見渡すと、いつのまにか、鼻風船を膨らませベッドで丸くなって眠る親父しかいなかった。

さっきまで、サナは部屋中をハンドタイプの機械を使って、部屋を撫でるように忙しく掃除してたんだが……

「あ、ほんと……うーん、たぶん、夕食の買出しにカオスシティの食料センターに行ったのかもね、ちよつと聞いてみる」

そう俺に言った後、ミルフィーの様子が一変した。

突然 虚空を見つめたまま、唇を何かを口ずさむように微かに振るわせる。

横目でその無機質な表情を見ると、急にミルフィーが何かの口ポットにでもなったようにすら思える。腕をだらんとして、瞳孔を開いたまま、突っ立ってるからかもしれない。

だが、しばらくすると、急に電源が入ったかのように、ミルフィーの瞳に光が宿り、体に滑らかな筋肉の動きが戻る。

「拓！ 内部テレパシーで聞いてみたんだけどね、今ね、サナ、カオスシティのエリア31地区にあるお肉屋さんにいるみたいだよ。ちよつと街案内も兼ねて、一緒に行ってみる？」

ミルフィーがいつもの無邪気な笑みをこちらに向けてくる。

それを見て、なんだかほっとして、胸を撫で下ろす自分がいた。
テレパシーでサナと話してたのか……びっくりするよ……

やっぱり、複数の魔獣を取り込んでるだけあって、外見は普通に見えても、俺が現実世界で見知っている普通の女の子とは一線を画する存在なのかも知れない。

俺は静かに頷くとミルフィと手を繋いで部屋を出る。トラ親父は寝ているので置いていくことにした。二人並んで一階に繋がる階段を下りる。

その時……少し今までとは違った方向から……ミルフィーの横顔を眺めていたかもしれない……

天空編、神器『携帯』 再び！

「ちょっと待ってくれー！」

「ん？ どうしたの拓」

一階に降りたところで、俺はミルフィに叫んだ。
敢て大声を出して、ミルフィの歩みを止める。

いやあ、相手の方が力強いので、強引に外に引きずり出されそう
なんで……

俺はこのまま外へ出るわけにはいかないんだ。

「ちょっとトイレ行かせてくれよ」

「ああ、そっか、ごめん。一階にある場所知ってるよね？」

「うん、さっき一通り案内してもらったからね。じゃちょっと行
てくるわ」

ミルフィに軽く笑みを浮べ手を振ると、少し足早に歩を進める。
黒い扉の前までくると、上部にある丸い銀色の金属の凹みに顔を
近づけた。

すると、トイレの扉は俺を認識したらしく、大気に溶け込むよう
に消えた。

狭い空間には俺の家にあるような洋式の便器があり、大理石のよ
うな材質の白い壁が天井まで伸びていた。芳香剤らしき香りが微か
に鼻腔をくすぐる。

中に入った数瞬後、白い壁が不意に現れて入り口を閉ざし、外の
廊下と内部とを隔てた。

俺は安息の空間を得ると、気を楽しんで便座に座った。

ここはもう完全な俺のプライベート空間だ。

何をしようが、誰にも探られる事はないはずだ。監視カメラとかついていなければな！

じゃあ、始めるかな。

実は俺は大便も小便もしたいわけじゃなかった。

ここへはある目的を完遂するためにやってきたんだ。

つまり 今、手の平にある携帯、これを使用するためにこの安息場所へ潜り込んだんだ。

俺はすっかりこの世界に携帯の存在を、設定せずに飛び込んでしまった。

だけど、不思議な事に中へ入ると、俺のズボンの後ろポケットには携帯が入っていた。

前これを設定したとき、俺が作り出す妄想世界全部にその存在が有効になるような書き方をしたようだ。

その影響でこの世界にも携帯は存在していた。おかげでもう一度外へ出て携帯を設定する手間が省けた。

それで今回またある理由で携帯を頼るわけだけど、もちろん楽しみを追求するためには、乱用は控えたいと思う。あまりに無敵すぎる力も出来れば避けたい。

だが、ある理由即ち、この世界で死ぬ訳にはいかないんだ。自分の物語の中で死ぬような事はしたくない。

この世界は前の世界のように生温くはなさそうだ。不慮の事故で唐突に自分の命を散らす事だって考えられる世界観だ。

だから、命の絶対保証は不可欠だと思う。そうすると、前のようなバリアパワーを使うのかって事になるけど、同じような命の保護方法では詰まらないと思うんだ。

バリアに変わる命の保護方法を、考える事は簡単なようで結構難しい。それに下手に力が強大すぎると、話がつまらなくなるからだ。うーん……ウンコしたくなってきた……緊張すると横っ腹が……取りあえず……予想もしない襲撃や、思ってもいない未知の攻撃を一発でもその身に受けたら、俺は息絶えるだろう。自信があるんだ。身体の貧弱さに！ 脆さに！

前のバリアパワーは自分の意思で、オンオフ可能な無敵なバリアだったわけけど。

これってつまり、不意打ちみたいな攻撃を受けたらバリアが消えている間は効果を為さない。つまり俺はバリアが消えている瞬間、攻撃を受ければ死ぬ訳だ。

そんな隙だらけの力でも、何とか前の世界ではやり過ごせた。

ただ、それはあの世界がある意味平和であり、多少なりとも攻撃を仕掛けてくる者の予想がついたからだ。そうはいつでも危うい場面もあったけどね。

だが、ここは違う。キメラなんていうよく分からない奴等が、うようよ周りにいて、幾らミルファイ達が傍で守ってくれるとしても、俺の不安を埋めるには至らない。

だから、サバイバルかもしれない外世界に出る前に、命を保証する何かを今から設定する必要があると考えた訳だ。

でことで、力について考えないと……どうしようかな……
バリア以外で何かないものか……

・
・
・
・

そうだ、『痛みを感じない不死身の身体』っていうのはどうだろう？

バラバラになっても、足が削れようと頭がもげようと生きていられる。

しばらくすると、再生してもとの通り！　これでいいんじゃないかな。
ろっか。

要はファンタジーの世界に出てくるゴーレムとか、再生しまくる
魔物みたいなもんだ。

痛みが全くなしっていうのも、詰まらないから。足をすりむいた
り、青アザが出来る程度の痛みは感じる事にしよう。

それ以上の痛みは遮断される。これでいいかな。取りあえず。

じゃあ設定を。

件名　俺は不死身の肉体をもつ。

不死身の肉体の説明

足を擦りむいたりこけたり、青アザができるくらいの命に関わら
ない痛みまでは感じる。

ただそれ以上の痛みは痛みとして俺に伝わらず。無痛と化す。

バラバラにされても炎で焼かれても、頭がもげてもあらゆる攻撃
を受けても死なない不死身の肉体。

しばらくすると、再生機能が働く便利な肉体。

これでいいっか！

よし、書いたぞ！　じゃOK押そう。押した！

これで俺の肉体は不死身になったはずだ。

ああ、このボタンを押した瞬間、幾分不安が和らいできた気もす
る……

よっしゃ！　サナ迎いに行くか！　なんだか死なないと思うとや
る気も出てきた。

「ミルフィー！行くぞ！」

「うん、拓行こう、はい、これ！」

ミルフィーは見たこともない赤っぽい全身ゴムスーツ？と剣の柄？みたいなものを俺に手渡してきた。

「爆弾やミサイルを受けてもこのキメラスーツを着ていれば平然としてられるよ、そして、この柄は……」

ミルフィーが金色の柄を握ると、突然白光の長剣が、柄の渦をまいたような穴から飛び出してきた。

電流が弾けるようなバチバチツって音が白光する刀身から聞こえてくる。

「イレイザーソードよ、大抵のカメラの身体は切り裂けるよ。力の弱いカメラの人々が護身用に持ち歩く剣よ。あつと、見てて！」

ミルフィーは一階の廊下の窓を開けて、切っ先を空に向けて掲げた。

次の瞬間　轟然たる音と共に剣の先が一瞬眩い光を放つ。

目の前で唐突に起きた派手な現象に、俺は驚いて思わず尻餅をついて床に倒れた。

しばらくして、上空から大気を震わすような爆裂音が耳に届く。

「な、何したの？」

手や足の筋肉が強烈な刺激を受けて震えている。

俺は喉をごくりと鳴らした後、無心でミルフィーに尋ねた。

「エネルギー弾を剣から放ったのよ」

ミルフィーはにやつと笑うと得意な顔で更に続ける。

「イレイザーソードはね、電子弾を切っ先から放つ事ができるの、要はこれは剣でもあり、大砲でもあるのよ、護身用にしては強力な武器よ！ だから、護身用じゃなくても、ならず者のキメラも時々これ使っているの見るわ。私は弱者でもならず者でもないけど、これ使うの楽しくって〜！」

ミルフィーのイレイザーソードを見つめる瞳に妖しさすら漂う。
誰かに使いたくてうずうずしているような眼だ……

怖い……俺はさっきまでの自信が消え入りそうになっていた。
あんなもんで切り裂かれたら……？

エネルギー弾で木っ端微塵にされるってどんな気持ちなんだろう
……
幾ら不死身の肉体だとしても、恐怖心までは拭いきれないようだ。

俺は恐々その柄を手にとってみる。

ミルフィーにイレイザーソードをおさめる、黒い皮袋のついたベルトを手渡された。

それを腰に巻いて柄を、その皮袋の穴に押し当ててみる。

ピタッと穴と柄が吸着して、ちよつとやさつとじゃ落ちない感じだ。

ただ、抜く時は自然に滑らかに離れる。不思議な素材だな……

「あれ〜キメラスーツ履かないの？」

俺がいつまでもスーツを履こうとしなでいると、ミルフィーが聞いてきた。

「うん……」

「え？ な、なにいつてんの！ 履かないと死ぬよ！」

ミルフィがはつと眼を見開いて、強い口調で俺を捲くし立てた。
その澄み渡った青い空のような瞳が、心なしか潤んで震えている
ようにも見える。

「いないよ……」

「な、なんで……言う事聞いてくれないの！ いつもいつも！」

ミルフィの様子が、いつにも増してヒステリックでどこか悲しげ
だ。

何だろう…… 見ているだけで狂おしいほど胸がしめつけられるよ
うな、この哀愁に満ちた眼は…… それほど俺を心配してるって事か？

「……………」

ミルフィは押し黙ったまま顔を逸らした。

いや、スーツ着ても良いんだけどさ、不死身の肉体にそれまでき
たら過保護すぎるし。

待てよ、なんか変だな…… これを着用しない俺に怒鳴りたく
なるのは分かる。

足手まといも良いとこだし、無力で脆い人間の体を持つ俺を、恋
人であるミルフィが心配するのも当然と言えば当然だ。

しかし、ミルフィの口ぶりは、その要求を呑まない俺に対して
うんざりしているようでもある。

一度や二度の拒否でここまで？ 可笑しくないか？

俺は虚空を見つめながら、しばしその疑問に思いを馳せる。

さつき、いつもいつもって言ってたよな……そうか……一度や二度じゃないんだな。

俺がこの世界にやってくる前に、存在していたことになっている別の俺も、こうやってスーツを切ることを拒み続けていたんだ……分かったぞ、つまり、前の俺も不死身の身体を携帯で手に入れてたんだ。

それなら全てが合点がいく。なるほど……そうだとしたら……この後、俺が言う言葉は決まっている！

「ミルフィそんなに心配しないでいいよ」

ミルフィが諦念を滲ませた虚ろな瞳を俺に向けた。

「ん？」

「俺はこの世界じゃ『神』だから、全然心配はいらないよ」

ミルフィは俺のその言葉を聞くと、静かに俯いて眼の辺りに影を刻んだ。

しかし、よくミルフィの表情を観察すると、ふつくらとした唇が微笑みを湛えて歪み、白い歯が覗いている。

「はあ、言っても無駄か、今日も頑張つてごねただけだなあ……」

ミルフィは深い溜息を吐いた後、呆れ顔でそう言いながら、両手を天に伸ばし背を逸らして伸びをした。

そして、さつきとは打って変わって曇りのない快活な表情を俺に

向けて、

「よし、サナ迎いにいこっか！」

と、言った後、俺の手を強引に引張って外へ連れ出した。

天空編、敵襲。

「拓、ほら、ＩＤすーんよ」

「ん？」

「この間置いていったでしょ」

淡い緑色の石、中が透き通っていて、材質はクリスタルに近いのかなあ？

そんな指の一節くらいの大きさのＩＤストーンをミルフィーに手渡される。

石には銀の鎖のようなものが繋がれていた。

俺はそれを携帯のストラップをつける場所に繋いでみる。嵌るか怪しかったけど、不思議とぴったり噛みあった。

「それは、色々使う場所多いから、必ず持っていてね！」

「あいよ」

携帯を宙に持ち上げ、垂れたＩＤストーンをしばらく見つめた後、後ろポケットにしまいこんだ。

もう、安全地帯ではない外の世界を、手を繋ぎ並んで、ゆっくり歩いている。

なだらかな斜面が続く草地とでもいうべきか。

牛でも放たれていてもおかしくないような平原の斜面を、白い道伝いにカオスシティへ向かって降りていく。

太陽は現実世界と同じように西に傾きつつあった。

時間で言えば、昼間の３時ってところだろうか……

白い土の道が眼下に見える、カオスシティまで続いているようだ。まだ、その街の姿は薄っすら霞がかかっていて、その輪郭は朧気だ。

さっきから白い道を結構歩いてはいるが、まだ誰とも出くわしていない。

少し拍子抜けしたというか、心配しすぎてたかなあ……

「見てみて、この花綺麗でしょ」

「ん？ うん、綺麗だね」

道端に小さな黄色い花が、ひっそり咲いている。

ミルフィーは中腰になって、快活な笑みを浮かべて、花のささやかな美を愛でていた。

こういうところを見ると、ミルフィーも女の子なんだなって素直に思える。

ふだんは、男っぽいというか、がさつなイメージがあるから、それとのギャップが、ミルフィーの今の様子が新鮮にさえ感じられる。

道沿いには、所々思い出したように、木の低い柵が現れる。

歪な形をしたものや、二つ連なったものが、ぽつぽつ道沿いに穿たれている。

「なあ、ミルフィー、この木の柵ってさ、ちょこちょこあるけど、何でこんな立てかたしてるんだ？」

「ああ、元々ね、ずーっとこの道に沿って両側に長く繋がってたんだけど、色々あって、キメラに引き抜かれたり、壊されたりして失われていったの」

ミルフィーはそういういい終えた後も、鼻歌を歌いながらゆっくり歩いていく。

だけど、俺はそれを聞いてから、全く心境が一変していた。

さっきまで、頭の中で流れていた平穏な風景に合ったクラシックの音楽が、昔やったRPGのゲームのボス戦間近の、猛々しいBGMへと変わっていた。

ちよつと……いきなり恐ろしいキメラ現れないだろうな……？

俺はそんな一抹の不安に身を焦がし、あちこちきよろきよろして歩く。

そうして、不意に前方に眼をやった時 先に見える木の柵に、何者かがのっかっているのに気づいた。

小さな子供くらいの大きさだろうか……

「ミルフィーあれ!!」

それに気づいていないミルフィーの背中を、シャツを掴んで引張
つる。

「ん？」

花をみていたミルフィーが、俺にきよとした眼を向けた。

そんなミルフィーの背後に回り込んで、後ろから肩を掴んでその者
に向かせた。

そして、後ろから手を伸ばして前方に指差した。

ミルフィーは俺が指差す方へ視線を向けると、

「あ、あれは……サラフィーさんだよ、良い人だよ」

「ほお……」

ミルフィーがそう言い放った口調は、とても静かで穏やかだった。

このかんじからするに、仲のいい知り合いといったところか。

俺は少し安堵して、ミルフィーの横に並んだ。

近付いていくに連れて、その者の容貌が分かってくる。

だまかに言う　狐……狐人間？　狐人間が柵の上に腰かけ、

葉巻のようなものを吸っている。

葉巻の先からは煙が出ているし、たぶん、煙草か何かの類なんだ
ろう。

「サラフィーさん、お久し振り」

ミルフィーが朗らかに微笑み声をかける。

サラフィーは茶色っぽい三角帽子を頭にかぶり、これまた、三角
錐のような民族衣装、現実の世界で言えば、インディアンのような
服を身に着けている。

三角錐の服の腰のあたりに、革ベルトが巻かれていて、長い剣の
ような赤茶けた金属の鞘がぶら下がっている。鞘は細身で後ろに反
りあがっていた。

「やあ……ミルフィーに拓じゃないか、久し振りだな……」

狐人間とも言つべき容貌のサラフィー。

そのサラフィーが発した声は、予想とは反して落ち着いた澄んだ声をしていた。

「二人してどこか行くのかい……？」

「はい、サナがカオスシティの食料センターにいるもんですから、合流しようかなうなんて」

「そうか……」

サラフィーは下を向いて、葉巻を口から離すと、溜め込んでいた煙を吐き出した。

辺りの視界が一瞬もやに包まれたかと思うほど、濛々と白い煙が周りに立ち込めている。

だけど、不思議に煙たくはなかった。俺の知る煙草とは成分が違うんだろっか？

もしかすると、煙草の類でさえないのかもしれない。

「気をつけてな……最近は何物だから……特に拓君は……」

何が言いたいのかは分かる……ええ、俺は弱いですから……

「大丈夫ですよ！ 私がついてますから！」

腕を捲り上げて、握り拳を掲げるミルフィー。

ミルフィーがそんなジェスチャーを見せると、サラフィーの口元が優しく綻ぶ。

うーん、狐つて物語とかだと、嫌味なイメージあるんだけど、この人は良い人かもしれない……

しばし、サラフィーさんと穏やかな会話を交わしていた。

だが、遠くの方から何か轟くような音が聞こえ始める。

機械音……違う……なんだこの音は……

ふと、ミルフィーたちを見ると、俺のほうを見て二人して睨みをきかしている。

え……？ 俺、何かした……！？

柵に座っていたサラフィーが、さっと地面に飛び降りた。

そして あのベルトの赤い鞘に右手を置いた。柄と鞘の間から

白刃が鈍い光を放っているのが分かる。

「な、な、何する気……！？」

「拓！　しゃがめ！」

サラフィーが細い目を見開いたかと思うと、ミルフィー突然、俺に飛び掛ってきた。

「な、なんだ！？」

俺はその重みで後ろに勢いよく倒される。しかし、ミルフィーが俺の頭に手を巻きつけるようにしてるので、地面に背中を打ち付けるも、頭への衝撃は緩和されていた。

「ぐ……重い……」

上にミルフィーの体が押し掛かり、思わず俺は呻いた。

眼を開けると、完全に視界をミルフィーの体に塞がれている。

「ミルフィー……」

俺は搾り出すように囁くが、何か傍で聞こえる大きな音に掻き消される。

その轟音の中にサラフィーの、興奮気味に荒げた声も入り混じっていた。

いや……声だけじゃない、周りの平原の草が、正体不明の風を受けて並立っているし、頬に感じる風の勢いもさっきまでとは違う。そして、極めつけは金属が何か堅いものとかち合うような音。それらの音はしばらく近くで鳴り響いていたが、少し遠ざかったのか、耳に届く音量も幾分和らぐ。

「拓……ちよつとここでじっとして……動いちゃ駄目よ……」

「ええ……」

「サラフィーを助けに行ってくる！」

不意にミルフィーがそう呟くと、青空が俺の視界に戻る。

俺は打ち付けた背中を撫でながら、ゆっくり半身を起こした。

おもむろに辺りに視線を巡らしてみると、少し離れた位置に大きな黒ずんだ物体が浮いていた。

「な、なんだ、あれ、ば、化け物！？」

俺はその謎の生き物を目にして、裏返った声で叫んだ。

その傍らにはサラフィーもいた。その形容しがたい生き物に向かって細身の剣を、追い払うかのように振り回している。

気持ち悪い謎の生き物……無理に例えるなら、その姿はハエに似ていた……

だが、蠅とは断じて違う……大きな赤い眼の真ん中には白い人間の顔が浮んでるし、胴体のいくつかの手足が人間のそれと同じものだから……

俺はその怖気の走る姿に最初釘付けだったが、ゆっくり手前に視線を移していく。

すると　ミルフィーが少し前方で両足を広げ気味に、俺に背中を向けて立ち尽くしている。

そのミルフィーに声をかけようとした時　轟然たる大音響と共にミルフィーのいる辺りが一瞬白くフラッシュした。その強い刺激を受けて、俺は思わず目を瞑って後ろに尻から倒れこんだ。

ズドン！

その後、間髪いれずに大気が震えるような炸裂音が俺の耳に届く。

「さすが、ミルフィー、お見事……」

それから少しして、軽快なサラフィーの声がした。

俺は恐る恐る目を開けてみると、ミルフィーの後姿がさっきと変わらない場所にあった。

「ミルフィー！」

俺はおぼつかない足で何とか立ち上がると、ゆっくりミルフィーの傍まで歩いていく。

傍までやってきて、横合いから彼女の姿を覗き見ると、その手にはイレイザーソードが握られていた。

白光の刀身から電流がはじけるような音が聞こえてくる。

ミルフィーが目を伏せ気味にふーっと息を吐き出すと、白光の刀

身が大気に溶け込むように消えてしまった。

その刀身が消えた柄を腰のベルトに吸着させると、額に手を押し当てて、もう一度深い息を漏らした。

そのうち傍らにいる俺の存在に気づくと、満面の笑顔で、

「拓、もう大丈夫！」

と、親指を立てて微笑んだ。

快活な笑顔を浮かべるその額には、滲んだ汗が陽光を受けて煌いていた。

天空編、カオスシティへ。

「サラフィー大丈夫？」

「大丈夫さ……しかし……」

サラフィーはイレイザーガンでミルフィーが仕留めたカメラの遺骸を見下ろしている。

俺達はサラフィーの傍までやってくると、ミルフィーが安否を気遣う言葉をサラフィーに投げかける。

それに微笑みを浮かべて返すサラフィー。だが、それも一瞬の事で、すぐに張り詰めた表情でカメラの遺骸に視線を戻した。

電子弾を受けたカメラの遺骸の損傷は激しく、高熱で燃え尽き炭のように黒ずんでいた。

殆ど原型を留めていない。

だけど、ところどころ、元の姿の特徴みたいなものは残っていた。黒い残骸ともいえる中に、人間の手足の輪郭が、焼け焦げた胴体らしきものには、繊毛のようなものが伸びているのが見て取れる。

「あんまり見ないカメラだね」

「うん……こいつは昆虫類とのカメラだ。この第二階層モラクにはいるはずのないカメラだ……」

そう呟いたサラフィーの線のように細い目には、何か理不尽なものを見たような、ある種の緊張感が漂っている。

「まあ、良く分からないけど、倒せたんだし、いいじゃん！」

ミルフィーは取りあえず、危険なカメラを倒せた事で満足してるんだろう。

特にサラフィーの言葉を深く意識した様子はなく、終始笑顔で俺の腕に手を絡めて、頬を擦り付けてくる。

正直言つと、俺もサラフィーの深刻そうな顔は気になったが、あんまりこの世界の事深く知ってるわけでもないの、突っ込む気にはなれなかった。

そのうち、ミルフィーが思い出したように手の平を胸元付近で打つと、

「おつと〜！ サナと合流しないとね！ サラフィー後はお願い！」

「あ、ああ、分かった……まだ遺骸に残り火があるから、後始末はしておくよ……」

ミルフィーに言われて、一瞬注意をこちらへ向けてサラフィーが返す。

だが、まだ興味の大半は足元のキメラの遺骸に注がれているらしい。

そのうち、膝をついてじっくり、キメラの遺骸を観察し始めた。

「うん！ お願いします！ じゃあ、拓、早く行かないと日が暮れちゃうし、走るよ！」

「うげ、走るの……？」

俺は体力に自信がない……それに今から俺のペースで丘陵を降りていったら、いつカオシティにつくんだよ……着く頃には夜になっちゃう……

「大丈夫よ、オンブしてあげるから、目を瞑ってる間にサナのところまで着くよー！」

そうか、ミルフィーは足が速かったんだ。ミルフィーは前屈みに尻を突き出して、乗って来いとばかりに後ろ手をヒラヒラさせている。

女の子にオンブされるって何だか気恥ずかしいというか、情けないというか……

だけど、俺は貧弱BOY……結局、従うほかなく、

「じゃ、じゃあ……乗るね」

「どうぞどうぞー！」

「よいしょ……」

年老いた老人のように、力ない掛け声を漏らし、ミルフィーの背中に乗っかる。

両足を抱え上げられ、ミルフィーの体に密着した形で覆いかぶさった。

ミルフィーの首と胸の間辺りに手を絡める。ミルフィーはとてつもないスピードで走るだろうから、高速移動の間に手を振りほどかないように、絡めた手首を両手でしっかりと掴む。

少しずれると、すぐ下にある柔らかい胸にまで届きそうな位置だった。

「ちゃんと、掴んでてね！」

「お、おう……」

俺の顔には照れ臭さが先にたち、熱が籠っていた。下半身もなんだかこそばゆい。

やっぱり女の子の体にこれだけ密着すると……色々ね……

「じゃ行くよー！」

「うん……」

ミルフィーの掛け声とともに、俺はしがみ付く手の力を更に強めた。

そして、目も堅く閉ざす。高速での視界に目を回さないようにね。すぐにミルフィーの体が動き始めた。足からの振動がミルフィーの体を通して伝わってくる。

まだ最初はゆっくり走っているようだ。だけど、だんだん伝わる衝撃が早く、大きく……

そして、次の瞬間 体にかかる負荷がありえないほど増大した。迫り来る風圧が半端じゃない。顔をミルフィーの肩につけてそれを凌ぎ、手が離れそうになるのを必死で堪える。

「ちょっと、ぐるじい……」

不意にミルフィーの呻き声が聞こえ、揺れが穏やかになってきて、やがてしんとした。

何事かと思い目を開けてみると、ミルフィーに絡めていた手が彼女の首を絞めていた。

無意識に落ちまいとして、首に手がかかっていたようだ……

「じ、ごめん」

俺は首から慌てて手を離し、ミルフィーに謝る。

ミルフィーは俺を降ろして、体を前倒して咳き込む。

苦しそうだ……息を荒立たせ、顔は上気して全体が赤くなっている。

わざとじゃ無いんだけど、罪悪感が俺の体中に駆け巡っていた。本当にごめんよ……

「ミルフィ、大丈夫か……？」
「う、うん……」

前屈みのまま、火照った顔をこちらに振る。相等苦しかったんだろ。

薄ら笑いを浮かべながらも、その顔は苦痛で歪んでいた。

「ミルフィ、本当に悪かった、けどもう少しスピード落としてくれ……手が離れてしまう」

「あ……そうか、ごめん、分かった……」

ミルフィは俺の言葉を聞いて、少し納得してくれたようだ。
所詮人間なんで……ミルフィとは感覚のズレが生ずるのも無理はない。

また同じようにして、ミルフィにオンブしてもらう。今度は恥ずかしがらず、落ちない程度に胸により近い位置に手を回した。隆起した胸の麓付近まで手が及ぶが仕方ないよな……

俺はやっぱり照れてしまっただけ、ミルフィは全く気にした素振りは見せない。

「じゃ、気を取り直して、少し押さえ気味に走るよ」
「うん……」

幾分スピードを弱めて走り出すミルフィ。それでも速度は速めだが、現実の世界の車で言えば時速100キロくらいだろうか、でもこれなら持ちこたえられそうだ。

しばらく、ミルフィの首筋に顔を伏せて、手を離れない事だけに意識を集中させていた。

そのうち だんだん体に感じる振動が、顔に注ぎ込む風の勢い

が弱まりだす。

「着いたよ、拓！」

ある程度、そろそろ着くだろうと予期していた俺に、ミルフィから待望の声が届いた。

やっと、解放された……少し手を緩めて一息つくと、ゆっくり顔を上げた。

夕日の光が横から差ししてくる。顔を伏せて闇に浸していたせいか、やけに、左目が眩しく感じていた。

「カオスシティの入り口だよ」

その言葉を聞いて、ミルフィの頭の横からするつと顔を出し正面をみやる。

すぐ眼前には、アーチ状の比較的大きな入り口が目に入る。赤茶色のレンガのようなものをアーチ状に重ねて作ったような入り口だ。夕日を受けて影が差す入り口を塞ぐ木の門は黒ずんで見える。

その入り口を内包する白い城壁のような高い壁が、横にながく伸びていた。

左を見ても右を見ても、この場所からは壁の果てが見えない。

その前には、青っぽい金属の鎧を身に纏った衛兵？ が立っていた。

腰には灰色の鞆を携えている。腕には赤い突起が星を模る？ というよりは

赤いウニのような形をした紋章が、白い生地に刺繍された腕章をつけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5715e/>

俺的妄想ファンタジーに俺を送り込む話。

2010年10月10日01時05分発行